チコリと魔法の物語～魔法使いが夢見た嘘（せかい）～

伊香怜一郎

プロローグ

――外がみたい。
　男がそう言い出したとき、サリマンは「またか――」と思った。乳母として赤子のころから彼の世話役を仰せつかって、かれこれ二十数年来の付き合いになる。人生の大半を閉じられた世界で生きてきた男が自由な外の世界に人並みならぬ憧憬を抱いていたことを彼女は知っていた。
「なあサリマン。外がみたいんだ」
　もう一度、繰り返すように男が呟いた時、サリマンは知った。男の言う「外」とは抽象的な意味での「外の世界」ではなく、文字通り「屋敷の外」がみたいという意味だったことに。
「ならば、お好きにすればいいではないですか」
　とは、サリマンは言わなかった。いや、言えなかった。
　男の身体が一人ではもうそれすら満足に叶わぬほどに衰弱しきっていることに、同時に気がついたからだ。
　サリマンは男の体を運ぶために侍女を呼ぼうとしたが、男はやんわりとそれを断った。誇り高い彼の性格がサリマン以外の人間に弱った自分をみせることを嫌ったのである。ただサリマンに、「手を貸して欲しい」とだけ男は言った。
　好きにはなれぬ男であった。正直な気持ちを言えば、どこか敬愛を超えた畏怖の念をずっと抱いていた。
　それでも、こうして子供の頃のように弱々しく手を差し伸べてくる男に、時の数だけ刻んだ親愛の情を抑えきれず、サリマンは涙をこらえた。
　男はサリマンの手をしっかりと握ると、自分の体をサリマンにあずけながら、頼りない足取りで立ち上がった。
「どうですか？」
　サリマンは気を取り直しつつ、ここに来てから、もう幾度となく重ねた質問を男に尋ねた。
「難しいね」
　これも常套句。その度に男の返答は決まったものだった。
「だけど四賢者亡き今、これは僕にしかできないことだから」
　そう言ったものの、男の力強い言葉とは裏腹に、状況は刻々と悪くなっていることは、もはやサリマンの目にも明らかだった。
　サリマンは男の手を引き、階段を登ると二階のテラスに出た。そこは周囲が一望できる男のお気に入りの場所だった。
「やぁっ！」
　男は大きく息をついた。
「――相変わらず美しいな」
　サリマンは同意しかねて、曖昧に頷いた。二人の前に拡がっていたのは、岩と砂ばかりが延々と続く死の世界だった。照りつける陽光に照らされて大地が燃えるように赤く輝いて見えるため、絵画をみるような叙情を喚起されないでもないが、その事情を知っているものとしては、とても美的な感覚を持って語れる景色ではない。

「サリマンはこの光景をおぞましいと思うかい？」
　サリマンの心を見透かしたかのように、男が尋ねた。
「いえ、私のような卑しき者は恐れ多くもそのような見識は持ちません」
「いいんだ、サリマン。普通であればおぞましいと思うのが自然だろう。でもね、僕は人間の醜い部分を嫌というほど見て生きてきたためか、残酷でありながら何よりも無垢な、この静寂の世界を嫌いにはなれないんだ。たとえ、それが人の罪が生んだ死の世界だとしてもね」
　饒舌な男と違いサリマンはこんな時、男に答えるべき適切な言葉を知らなかった。しかし、サリマンの口をついて出たのは自分でも予期せぬ一言だった。
「ならば……」
「え――？」
　低く呻くようなサリマンの声に、男は一瞬きょとんとした表情を浮かべた。
「ならば、逃げ出せばいいではありませんか。そこまで仰るくらいなら、こんなにも辛くて苦しい想いをせずとも、全てを投げ出して、諦めてしまえばいいではありませんか。……差し出がましい、馬鹿なことを言っているのはわかります。それでも一度くらい……たった一度くらい私の言葉に耳を傾けていただいきたいのです。誰かのために……誰かのために――あなた様が犠牲になるなど、馬鹿げています」
　一度、喋りだしてしまえば止まらなかった。堰を切ったように溢れだすサリマンの言葉を、男は黙って聞いていたが、やがてゆっくりと口を開いた。
「ねえ、サリマン……」
「……」
「――僕の手は汚れている」
「そんなことは……っ！」
「慰めてくれなくていい。君も知っている通り、僕は血に塗れた人生を送ってきた。この力のために、人に恨まれ、嫌われ、怖れられる。そんな呪われた生き方を歩んできたんだ」
「やめてください！　今さらそんな話は聞きたくありません」
「なのに、大事な時に何も守れないなんて――」
　男はふっと微笑んだ。その表情にはもはや何ものにも揺るがぬ確かな意志と――覚悟があった。
「――あまりにも悲しいじゃないか」
　サリマンは堪えきれずに、その場に突っ伏すと、声を押し殺して泣いた。
　男は何も言わなかった。
　静寂の世界に、重苦しいサリマンのすすり泣く声だけが、吸い込まれて、いつしか消えていった。

第一章

　時間が意味を失って、もうどれくらい経つだろうか。
　少女は黙々と荒野を歩み続けていた。
　タジールの街を出てから、村はおろか、もはや人の姿すらみていない。頭まですっぽり身を包む麻のローブは擦り切れ、飢えと渇き、そしてそこから訪れる死の影が、常に少女とともにあった。
　ふと、少女は立ち止まると、辺りを見回した。
　風が何時の間にか止んでいる。
　大気を揺るがすわずかな鳴動。少女はその微妙な気配を敏感に感じ取ると、意識を周囲に張り巡らした。
――来る！
　その瞬間、少女は跳躍した。
　同時に先刻まで少女がいた地面が激しい音をたてて爆ぜる。そのまま前方の地面に手をついてクルリと前転すると、立て膝のまま少女は振り返る。
「砂熊っ……！」
　そこにいたのは、灰色の鱗に全身を包まれた、体長二メートルを超える、巨大な爬虫類だった。二本足で立ち上がった姿がグリズリーに似ていることから、砂熊と呼ばれる。
　シュッ――
　という風を切る音が鳴った。
　砂熊が鋭い爪のついた右手を少女に向けて、振り下ろしたのだ。
　しかし、少女はそれよりも早く、バックステップで爪をかわす。
　わずかに風を残して、前髪がハラリと砂の上に落ちた。
　少女は両手を胸の前で合わせた。祈るためではない。生き抜くための術はいつだって、神への祈りではなく、自分の力で乗り越えなくてはならないことを、この少女は知っていた。
　砂熊は次の攻撃に移るため、体全体で少女に襲い掛かった。
　少女は慌てない。素早く掌を砂熊に向けて、今まさに砂熊の爪が振り下ろされようとする刹那、ポツリと呟いた。
「――いけっ」
　その瞬間、少女の両手から閃光が発せられ、砂熊の全身を包んだ。
　ジリジリと肉の焼ける匂いが少女の鼻を撫でる。
　やや遅れて、地面が揺れた。砂熊が地面に倒れこんだのだ。
――アウストゥの太陽
　その昔、大魔導師イリヤが巨人族の王の最後の心臓を射抜いたとされる高等魔法のひとつで、彼女は古より伝わる秘術を現代に引き継いだ、魔法使いの少女だったのだ。
　少女は荒くなった呼吸を整えると、集中力を高めるために、そっと瞳を閉じた。
　それが油断になった。
　少女の耳に、かすかな息遣いが聞こえた。

砂熊がまだ生きていることに気付いたと同時に、尾による横薙ぎの一閃が少女の体を吹き飛ばす。
致命傷にこそならなかったものの、地面に叩きつけられたのを最後に少女は気を失った。
砂熊はのっそりと身を起こした。少女の右手を掴み、体を持ち上げて、顔の前に宙吊りにする。
チロリと長い舌を伸ばすと、ローブで影になった少女の顔に這わす。砂熊は獲物を巣に持ち帰る習性があり、この場合も、少女がまだ生きているか確かめようとしたのだ。
湿った舌の不愉快な感触に、少女は無意識ながらも、短く呻き声をあげた。
少女はまだ生きていた。
その瞬間、砂熊の野生が爆発した。
彼は自然に生きるものとして、必要以上の嗜虐性を持たない。
しかし、目の前の生き物は単なる被捕食者ではない。何か不思議な方法で、己の鱗を焼いた、未知なる敵対者でもあるのだ。
砂熊は少女の頭蓋をひとおもいに噛み砕こうと、顎を開いた。砂熊の牙が、少女に突き刺さろうとした、まさにその時だった。
少女の胸元から何かが飛び出し、砂蜥蜴の喉に噛み付いたのだ。
それは一匹の蛇――マムシだった。
突然のことに、砂熊は少女の腕を離す。
地面に転がった衝撃で、少女は意識を取り戻した。そして、自分が今まさに危機的状況におかれていたことを瞬時に把握した。
暴れる砂熊に振り落とされた蛇が地面に投げ出される。同時に、頭上を襲った振り下ろしの爪を、少女は地面を転がって、回避すると、精神統一をはかる。
「今度こそ！」
少女の掌から閃光が放たれた。それは先ほどと同種の魔法でありながら、その威力は比較にならないものであった。
砂熊の頭が跡形もなく吹き飛び、その巨体を地面に横たえた。血は一滴も出なかった。あの一瞬の閃光によって、傷口が焼ききられたのだ。
「ふぅ、危なかった……」
少女は疲れきったように、その場に座り込むと、キョロキョロと周囲を見渡し、それから岩陰に視線を向けると、言った。
「おじいさん、もう出てきていいよ」
「ほう、気付いておったか」
のっそりと、岩陰から小柄な老人が現れた。薄汚れた麻の服を着て、頭は禿げ上がっている。
「いつからじゃ？」
老人は笑った。笑うと、顔中がしわだらけになり、真っ白な眉毛がハチの字に垂れた。妙な愛嬌のある老人だった。
「最初に魔法を撃った後かな。砂熊が倒れたのに、他に生き物の気配がしたもんだから、仕留め

そこなったことに気付かなかった。お蔭で、危なかった」
「なぁにが、危なかっただ」
　突如として、誰かが言った。
　声がした方向に視線をやると、そこには先刻、少女の危機を救った蛇がいた。
「大体、最初から手加減なんかしなければ、こんなことにならなかったんだ。大魔導師イリヤ様が編み出されたアウストゥの太陽は、巨人族にすら通用した超攻撃魔法だ。それを、砂熊一匹を退治するために二発も使うとは！」
　言いながら、蛇は這い進むと、少女の足元から、腰、胸元を通って、肩の上にちょこんと乗っかった。
「おほっ、蛇が喋った！」
「あっ、自己紹介がまだでしたね」
　そう言って、少女はローブから顔を出した。年のころは十六、七くらい。日焼けと砂埃で顔中が黒く汚れているものの、小ぶりの頬と爛々と輝く瞳には、娘特有の可愛らしさがある。整った目鼻立ちに、薄く赤い唇だけが妙に浮いていて、どこか儚げな印象すら与える。後ろでにひとつでまとめた長い髪が揺れた。
「あたしはチコリ。ご覧の通り、魔法使いで、今はデランに向かう旅の途中。この蛇はあたしの魔法の師匠です」
「蛇が師匠とは、これまた珍しいこともあるわい」
　そう言いながらも、老人の表情に変化はない。
「……」
「どうした。ワシの顔に何かついとるか？」
「あたしたちをみても、あまり驚かないのに、驚いているんです」
「ホッホ。なあに、年をとると、人様よりも多くの経験だけは重ねておるから、物にビックリするということがなくなるんじゃよ。……おおっと、ワシはモンク。お前さんたちと同様、旅人じゃよ。もっともワシの場合は、何処行くあてない気楽な一人旅じゃがの」
「おい！　チコリ。無視するなよ！　僕がいなけりゃ、死んでたかもしれないんだぞ」
　蛇がチコリの肩の上で喚いた。
「少しは反省してるのかよ？」
「だって……」
　チコリは不満そうに口をとがらした。
「アウストゥの太陽は本気でやると、倒すどころか相手が消し炭になっちゃうんだもん。消し炭じゃ、食べられないでしょ」
「げっ、これ食べるの？」
　蛇はビックリした声をあげると、気味悪そうに頭を失った砂熊の体に視線をやった。蛇にすれば、同じ爬虫類ということで、食欲と結びつけるには忌避感があるが、人間の気持ちで考えても、食べるには、生理的嫌悪感を持つ造形だろう。
「当たり前でしょ。もうすぐ食べ物が底をつきそうってのもあるけど、食べないのに殺すわけにはいかないじゃない」

「げぇ、本当かよ。嬉しいことに、量だけは食べきれないくらいあるけどさ」
「お嬢さん、どうじゃろう。ワシにも少し肉をわけてくれんか？」
　老人が口を挟むように、言った。
「そのかわり……」
　そう言って、モンクは服の中から、自分の頭ほどもある卵を取り出した。
「この卵をわけてあげよう」
「本当に！　僕、卵大好き」
　蛇が嬉しそうにチロチロと舌を出した。
「実を言うと、これは砂熊の卵でな。卵を獲ったために、親砂熊に襲われていたんじゃ。お嬢さんのお蔭で、助かったよ」
「なんだ、それなら卵も肉も僕らに権利があるんじゃないか」
「そう言うな。老人に優しくしても罰は当たらんよ。ホッホッホ」
　高笑いする老人を尻目に、チコリは砂熊の側に歩み寄った。
（そうか。子供のために必死だったんだ。悪いことしちゃったな）
　それから、ゆっくりと屈むと、目を瞑り、砂熊に黙祷を捧げた。
「――ホッ」
　モンクは笑うのをやめ、少女の姿をじっと見守っていたが、やがてチコリと同じように砂蜥蜴の魂のために祈った。

「あっ、おいしい」
　チコリは焼けた砂蜥蜴の肉にかぶりついてみて、その身が存外に美味であることを知った。砂熊の肉は淡白な白身で、炙ると焦げた油の香しい匂いが鼻をついた。
「うん。なかなかいけるね」
　蛇はすでに食事を終え、お腹のなかで食べ物をこなしているところである。パチパチと爆ぜる焚き火の炎が丸くなった蛇の腹を赤く照らす。
「なによ、食べるって言ったら、嫌そうな顔してたのに」
「食わず嫌いはよくなかったね」
　ツンとすました蛇にチコリは肉を頬張りながら、ジットリとした視線を送った。
「ふ〜ん。あっ、そう。でも砂熊がこんなに美味しいんだったら、蛇の肉も結構いけるかもね」
「な、何だよ。その目！」
「ホッホッホ」
　二人のやり取りをみていた老人が笑い声をたてた。
「お嬢さん、こっちの肉も焼けとるよ」
「あっ、ありがとうございます。おじいさんはもう食べないんですか？」
「年をとると、少しの量を食べただけで満足してしまうんじゃよ。あんたはまだ、お若いんだから、たんとお食べ」
「もともと僕達が仕留めた砂熊じゃないか」
「こらっ！」
　チコリが少し怒ったように、蛇を睨みつけた。
「いや何。本当のことじゃ。かまわんよ」
「でも香辛料もこんなにわけていただいて。ありがとうございます。おかげで肉を保存して、持っていくことができます」
「ホッホッホ。お嬢さんは命の恩人じゃからな」
　そう言いながら、モンクは懐から煙管を取り出すと、火をつけた。
「ところで、お嬢さんにひとつ聞きたいんじゃが。あの時、お嬢さんは岩陰に隠れておったワシに『おじいさん』と言ったが、何故見もせぬうちから、ワシがこの通りのジジイじゃと、わかったんじゃ？」
「それは……。あたしも確信があったわけじゃないんですが……」
　モンクは聞きながら、ごろりと横になると、気だるそうに煙を吐き出した。
「ただ人の気配は一人だけだったんで、女子供ではない気がしたんです。荒野の一人旅は危険ですから」
「ふむ」
――お嬢さんも女の子じゃがな。
　モンクはそんなことを言いたそうだったが、余計なことは何も言わなかった。
「それに女子供なら、ああいう場合、すぐに逃げてしまうか、あるいは悲鳴をあげるなりすると思うんです。それをせずにずっと岩陰に隠れている雰囲気だったから、きっとそれなりに経験を積んだ男のひとだなって……」

「じゃが、それではワシのようなジジイだということまでわからんが？」
「それは……」
　チコリはちょっと言い淀んで、それから言葉を継いだ。
「あたしが危なくなっても、隠れたままだったから。それなりに体力のある年齢の男の人だったら、砂熊に襲われている人をみれば、助けようとするでしょう。少なくとも、助けるべきかどうか、迷いが生じるはずです。なのに、岩陰の気配は全く微動だにしませんでした。だから、きっとそれも適わないくらいに年を取った男の人じゃないかと……」
「なるほどのう」
「だから、もし若い男の人だったら、なんで見殺しにしようとしたの！　って――」
　そう言って、チコリはモンクに向けて、魔法を撃つ構えをつくった。
「――ちょっとだけ仕返ししてやろうと思っていたんです」
「……冗談になってないよ」
　それまで満足気に、眠たそうに黙っていた蛇が言った。チコリは一言多いとでも言いたげに、蛇の鼻先を指で軽く弾いたが、本気で怒っているわけでもなく、彼女にしてもじゃれ合いなのつもりだろう。蛇は特に気にする素振りもみせず、またうつらうつらと目を細めた。
「ホッホッホ。しかし、そうするとお嬢さんの推測は随分と粗いものだったんじゃな」
「そうですね。ですから結局は勘だったんです。あたし昔から勘だけは鋭いんです」
「ふむ。昔から魔法使いとはそうしたもんじゃというからのう」
　モンクが大きく煙草を吸い込むと、煙管の先から白い雲が一筋の線になって流れた。
「それはそうと、どうしておじいさんは一人旅しているんですか？　荒野を旅するのは若い男でも命がけだって言うのに」
「昨年の大災害で、息子夫婦と孫を亡くしてのう。他に身寄りもないし、村にはワシのような年寄りの面倒をみるような余裕がなかったもんで、村に居辛くなっての」
「すみません、余計なこと聞いてしまって……」
「なあに。昔のことだよ。それに、『旅行かん　野垂れ死ぬなば　そが故郷』というじゃろ。もはや子供達もおらん村はワシにとって帰りたい場所ではないんじゃよ。そこで、どうせなら死ぬ前に、若い頃に夢だった、世界を見て回る旅に出ようと、ワシが皆に黙って、村を飛び出したんじゃ。お嬢さん、こういうの何というか知っておるか？　――家出じゃよ」
　モンクはニタリと笑った。つられてチコリも思わず吹き出して、クスクス笑う。
　ひとしきり笑いあったあと、老人がポツリと呟くように言った。
「……ワシのような老い先短いジジイはともかく、お嬢さんのような若い娘が明日とも知れぬ旅とはのう。何か事情があるとみたが？」
　チコリは言葉にはせず、無言で頷いた。
「いいんじゃよ。話したくなければ、話さんでも。何も詮索しようと言うわけじゃない。ただ老婆心ながら心配になってのう」
「いえ……。ありがとうございます」
　それから老人もチコリも押し黙ってしまった。すっかり炭になってしまった焚き火の柔らかい

炎が、チロリチロリと荒野の夜を暖める。
　ふと、思い出したように老人が言った。
「お嬢さんは旅に出て、長いのかね？」
　チコリは焚き火から顔をあげた。モンクはすでに眠ってしまったかのように、腕を枕にして横たえた体勢で、瞼を閉じている。
　熱に浮かされた火の粉がゆらゆらと揺れた。
「十年――」
　少女は誰言うともなしに呟いた。
「もう、十年になります」
――チコリが人買いに売られて村を離れたのは十年前のことだった。

チコリが人買いに売られて村を出たのは十年前のことだった。
当時、十四歳。折りからの不作もあり、貧しい農家が娘を売りに出すのはそう珍しいことではなかった。
チコリは七人兄弟の一番上で、このまま手をこまねいていれば、一家離散か飢え死にというところまで追い込まれた時、彼女が自分を売るよう、両親に進言したのだ。
まだ幼い弟や妹に過酷な運命を背負わせるのは不憫であるし、年長の自分がいなくなることは、それだけ食い扶持が減るということで、一家の暮らしにも都合がいいと判断したからだ。
この時代、奴隷に売られるということは、人間として固有のあらゆる権利を失うことを意味する。そうなれば、もはや人並みの人生は望むべくもない。
それだけに、家族にとっては辛い決断だったが、結局、他にとるべき道はなく、両親はチコリの提案を呑んだ。こうして、チコリはピザン地区の自治領主クロウ男爵にその身を売られることになった。
奴隷商人の馬車が迎えに来た日、チコリは弟妹の一人一人に別れを告げた。腰にしがみついてきて、無言で涙を流す十歳になる妹のレトリーの姿をみて、チコリは自分の判断はきっと正しかったのだと感じた。最後に両親にこれまで育ててきてくれた感謝を述べると、母親は父に寄り添って泣き崩れた。父親は何かに耐えるように押し黙ったままだったが、その方がチコリにはよかった。父は口を開けば、謝罪の言葉を口にするだろう。そうなれば、お互いに辛くなる。
おそらく、もう家族に会うことはできないに違いない。
チコリはそれを確信していた。しかし、チコリは泣かなかった。泣けば残された家族に悔恨を残してしまう。彼女は馬車に乗り込む瞬間、振り返って穏やかに笑みを浮かべた。
それが家族との最後の別れになった。
御者が馬に鞭をいれると、低いイナナキ声とともに馬車は出発し、チコリの幸せだった日々は駆ける速さで手の届かないものとなってしまった。
馬車が村を遠く離れ、最早生まれ故郷が見えなくなってから、チコリは自分の腕に歯をたて、声を押し殺して泣いた。
（あたし、ちゃんとやれたよね――？）
その時、チコリの脳裏には残された家族のことで一杯で、これからの自分の運命については気をまわす余裕すらなかった。
馬車は日が落ちきらないうちに、都城に到着した。門を入ると、そこらかしこで市がたっており、穀物や鉄器、さらには、みたこともないような綺麗な布や石が売られていた。
「ここが、クロウ様のお城ですか？」
チコリの問いに奴隷商人は下卑た笑いを浮かべるだけで、何も答えなかった。
馬車は大通りから横道に入り、屋敷裏の広場で止まると、そこでチコリは降ろされた。
そこにいた太った男に奴隷商人が二言、三言話しかけると、「来い」と言って、チコリは広場の端に止まっている馬車に向かって歩かされた。
その馬車はここまで乗ってきたものと違い、馬が四頭曳きになっている大きなもので、なにより目を惹いたのは鉄で四方を囲まれた車両が繋がれていたのだ。
ここにきて、さすがにチコリも自分の暗澹たる未来に想いを馳せ、重苦しい気持ちになった。

「どうだ、都の馬車は趣があるだろう」
　奴隷商人が嬉しそうにゲラゲラと笑った。チコリはこんな嫌悪感を感じる乗り物にすら興を感ずる都人の瑞々しい感性に驚愕せずにはいられなかったが、それでもスッと澄まして、
「まあまあです」
　と、答えた。それが奴隷商人の下賤な冗談だと気付いたのは、随分後になってからのことだった。
　天井の低い入り口を潜り抜けて、鉄の車両にチコリが乗り込むと、扉が閉められ、辺りは闇に包まれる。
　車両のなかは、すえた臭い。それに人いきれが激しい。酸素が薄いのだろう。軽い立ち眩みを覚える。暗闇に目が慣れてくると、車両のなかには、自分の他に十数人の人々が詰め込まれているのがわかった。
　大きく地面が揺れる。
　馬車が動き出したのだ。ここからクロウ男爵の城に向かうのだと、チコリは理解した。
　チコリはどうにか空いているスペースを見つけ出すと、そこに座り込んだ。車両のなかは人数の割には手狭で、横になることは出来なかった。チコリは自分が奴隷の身に落ちたことを実感した。
　それから何時間かが過ぎた。それは、ずっと暗闇のなかにいるチコリには数日にも感じられる時間だった。体は疲れきっていたが、興奮のためか、眠気はなかった。
　聞くともなしに奴隷達のヒソヒソ話が聞こえる。
　そのどれもが悲嘆や、怨嗟にも似た絶望の声ばかりである。
「食べるものも食べられず、貧困に苦しんだ挙句、奴隷として売られたんだ」
　ふと、場の空気に似つかわしくないような、女の子の声がした。
「生きていても、いいことなんかひとつもない」
　しかも、声から察するにチコリよりも幼い少女である。
（レトリーと同じくらいだろうか……）
　チコリは思った。しかし、チコリはその少女のように絶望はしていなかった。
　今までチコリは貧しくても幸せだった。全てを諦めてしまえば、自分の手の中にある小さな幸せすら感じられなくなってしまうことを少女は知っていた。
　さらに時間が過ぎ、チコリがようやくまどろみはじめた頃、馬車の外で異変が起こった。
　はじめに馬車が大きく揺れた。それから馬の激しい泣き声が轟き、馬車が止まった。
　男達の怒声が飛び交い、時折、獣じみた断末魔の悲鳴が聞こえる。
　すっかり目を覚ましたチコリは車両の中の様子を見渡す。奴隷達は声を潜めているが、不安気な様子が雰囲気で伝わってくる。事態を把握している者は誰もいないが、クロウ男爵の屋敷に着いたのではないことは確かなようだ。
　やがて、シンと辺りが静かになった。
　静寂を打ち破ったのは、車両の扉を開けようとする物音だった。
　まじまじとした恐怖が人々を包み込む。誰かが唾を飲み込む音が聞こえた。

扉が開けられた。
何時間ぶりかもわからない日の光がわずかに車両の中に差し込んだ。
「奴隷たちに告ぐ。我が名は騎士ケサン！」
声が聞こえた。しかし、入り口からはその姿は見えない。
「この馬車はクロウ男爵の屋敷に向かう奴隷馬車であろう。名誉なき勲と知りつつも、自らの騎士道精神により、君達を奴隷の身から解放したいと願い剣をとった。自由になりたい者は馬車から出てくるがいい！」
奴隷達の間でざわっと動揺が拡がった。
そして天佑とばかりに、喜びの声があがったが、一人の男の「馬鹿――！」という叱責で、その声も掻き消された。
「まともな騎士様が俺たちを助けてくれるものか。何をされるかわかったもんじゃないぞ！」
混乱した状況を両断するような強い口調である。
その一言が、車内の動揺に拍車がかけた。

――解放騎士団
　誰もが脳裏にその単語を思い浮かべた。
　解放騎士団とは、ここ数年来、各地で貴族領主を悩ましている非合法革命組織の名称である。もともとは都市社会の発展に伴い、市民意識に目覚めた一部の進歩派が、市民による都市の自治運営を王国に要求し、市民自衛団を組織したことが解放騎士団の前身となっている。ところが、市民層の台頭を快く思わない貴族側の弾圧と、それを遠因とした指導者層の没落により、その性質が分派化かつ過激化していき、そのなかでも武力闘争による市民革命の達成を悲願とする武闘派団体が、亡命騎士ラッセルという指導者を得て、他組織を糾合していくことで、解放騎士団となった。その理念は王族や貴族による領地支配からの人民解放にあり、思想的にも現王政に対する明確な反対勢力といっていい。構成員の多くは都市社会のあぶれ者や奴隷あがりといった、出自不明の者達で、いわば騎士とは僭称に過ぎない。
　そして、なによりこの場でその言葉が意味を持ったのは、多くの者にとって、解放騎士団といえば、思想どうこうよりも、反社会的な暴力集団という表面的なイメージが強く、その印象は、犯罪者そのものだったことにある。
　考えてみれば、男の言うとおり、正式な騎士がこのようなことをするとは考えにくく、ケサンとやらが解放騎士団だとすれば納得がいく。それだけに、男の言葉は重かった。猜疑心から、お互いが牽制しあい、誰も自分から動こうとはしなくなってしまった。
　そんな中、チコリは立ち上がると、入り口に向かった。ケサンという男が何者かはわからない。しかし、自分は奴隷に落ちた身である。もし自由になれるというなら、たとえどんな困難が待ち受けていようとも、その機会に賭けたかった。決断を他人に委ねて、後々まで後悔することは嫌だった。
　チコリが扉に手をかけたとき、一人の少女がチコリにしがみついてきた。
「駄目だよ、お姉ちゃん」
　声に聞き覚えがあった。生きていてもいいことなんかひとつもない、と言っていた少女である。入り口から漏れる光を通してみると、頬は痩せこけ、ボサボサの髪は伸びるにまかせ、目に年不相応な不気味な光を宿した少女である。年齢はまだ十になったか、ならないくらいだろう。
勢い、チコリの目には、妹のレトリーの姿に重なった。
「出たら、非道い目にあうよ」
「心配しなくても大丈夫。そんなつもりなら、とっくの昔に向こうから乗り込んできてるよ」
　チコリは女の子を安心させるために、殊更、笑顔で言った。口には出さなかったが、自分よりも幼い少女が、こんな悲観的な考えしか持てないことにやりきれなさを感じた。
「私たちを油断させるつもりかもしれないじゃないか！　それに、もしここで逃げて、男爵様の追手に捕まったら、殺されるかもしれないよ。私たち奴隷にはもう帰る場所もないんだ。ここで逃げたってどうなるもんか！」
「そうだ、そうだ！」
　それまで、判断をつけかねていた奴隷の一人が叫んだ。
「その子の言うとおりだ。よしんば逃げきったところで、行く当てもなく野垂れ死にするなら、奴隷より悲惨な人生じゃないか。奴隷なら、まだ最低限、生きてはいける。俺は残る！」

　その発言で大勢が決した。みんなが口々に「自分も残る」と主張し、結局残されたのは、チコリだけになってしまった。
　少女がすがりつくようにチコリの顔を見上げる。チコリは優しく声をかけた。
「ねえ、お名前は？」
　少女は最初、その質問の意味がわからなかったのだろう。ポカンとした表情を浮かべていたが、その後、ポツリと呟くように言った。
「……アリス」
「ねえ、アリス。お姉ちゃんと一緒に行こう」
　プルプルと少女は首を左右に振った。
「そっか」
　少女の言葉は決して間違ってはいない。無理強いするわけにもいくまい。チコリは少女を残して、馬車を降りた。
　身を屈めて、車両から出ると、地面に降り立つ。
　その刹那、目に飛び込んできた景色に、チコリは息を飲んだ。チコリはこの時にみた光景を生涯忘れることはなかった。
　それは、見渡す限り一面の草原で、その草の波が地平線間近の陽光にきらめいて、赤々と燃えるように輝いているのだ。
　今までみたこともない、美しくも荘厳な光景にチコリは一瞬、我を忘れた。
「やあ。結局、出てきたのは君だけかい」
　声がした。視線を向けると、そこには馬を携えた一人の少年が立っていた。チコリより年上にみえるが、まだ若い。真黒な髪に切れ長の黒い瞳。固く結んだ口元には凛々しさと気品が漂っている。
「ええ。他の人は残ると」
「聞こえたよ」
　と、少年は言った。チコリは少年の服が血に濡れているのに気付いた。怪我をしている様子はない。おそらく自分達を解放するために、戦闘に及んだのだろう。だとすれば、馬車の陰には死体が転がっているのかもしれない。見たくもなかったが。
「全く。人を疑うことしか知らない連中なんだな」
「ごめんなさい。でも、そう気を悪くしないで」
「わかっている。君は誇り高き人間だ。だが、多くの人はそうは生きられない。自由に憧れながら不自由を愛する。そんな奴隷根性がしみついているのさ」
　そう言って、呆れたように鼻で笑った。
「奴隷の境遇に落ちながら、それでも必死に生きようとするものを嘲笑うのがあなたの誇りですか？」
　チコリは屹然と言い放った。少年は驚いたように、チコリの顔をみつめた。それから、ふっと視線を落とすと、
「すまない。僕が言いすぎた」

　素直に謝った。
「いえ。あたしこそ、助けてもらったのにお礼も言わないで……。ありがとうございます。あたしはチコリといいます」
「自己紹介はあとだ。じきに追っ手が来る。ひとまず逃げよう」
　そう言って、チコリを馬に乗せると、自分もその前に乗りこんだ。
「掴まって！」
　チコリは少年の腰に手を回し、ぎゅっと抱きしめる。
「よし！」
　そう一声あげると、少年は馬に鞭を入れた。

「もう、ここまでくれば一息ついても大丈夫だろう」
　草原を抜け、森の中に入って、しばらく走ってから、ケサンはそう言って、手綱を緩めた。日が高くなりはじめたころで——チコリがみた赤い太陽は夕日ではなく、朝日だった——森の中、空を覆う枝葉から漏れた光が、空気を暖めている。
　少年は手ごろな場所をみつくろうと、「休憩しよう」と、地面に降り立った。それからチコリを馬から降ろすと、山羊の胃で作った水筒を手渡してくれた。
「飲んで。喉が渇いただろう」
「ありがとうございます」
「疲れたかい？」
　少年の問いかけに「ううん」とチコリは首を振った。
　ほとんど寝ていなかったが、色んな興奮がごっちゃになって、思うほどの疲労は感じていない。
「そうか。でも悪いが、今日は一日中、馬の上にいることになるから、そのつもりでいてくれ」
　少年は言った。
「クロウ男爵の部下には卑しい技を持ったものが多くいるという。そのなかには、獲物の追跡の技術に精通した者もいるそうだ。今のうちに出来るだけ距離を稼いでおきたい。追いかけっこになれば、二人乗りの僕等は分が悪いからね」
「わかりました」
　と、チコリは少年の身なりに目を落とした。金糸で装飾の施されたブラウンのレザージャケットにパンツ。腰にぶらさげた剣の鞘造りといい、深紺のマントといい、いずれも品が良いものにみえる。近年、天変地異や異常気象が続いたことで、農作民は飢饉に苦しめられること久しく、農民反乱やあるいは解放騎士団の活動といった騒乱もあり、王国の体制基盤が緩むこと甚だしいと聞く。特に、騎士階級の零落ぶりは目を覆うばかりで、騎士とは名ばかりの貧乏士族が多いなか、少年は高貴さすら感じさせる。
　チコリは解放騎士団の人間に会ったことはなかったが、目の前の少年がその一員だとはどうしても想像がつかなかった。
「どうした？　不思議そうな顔をして？」
「もしかして、あなたは随分と名のある方なのではないでしょうか？」
「ああ、そういえば僕を解放騎士団と疑っていたようだね。残念ながら、違う。僕は王宮騎士だ」
「王宮騎士！」
　チコリは目をしばたたいた。王宮騎士は都の警護にあたる、いわば名誉職で、王族や上級貴族の子弟がその任に当たることが多い。少年のどことなく気品ある雰囲気の理由が納得できた。
　ただ、そうなると腑に落ちないことがひとつある。
「ケサン様——」
　チコリは言った。
「ケサンでいい」
「ケサン。あなたはあの馬車がクロウ男爵のものだと知っていたんですよね？」

「ああ」
　ケサンはこともなげに肯いた。
「でも、どうしてそれなら——王宮騎士であるあなたが、私達を助けてくれたのですか？　クロウ男爵は王に領地を認められた正式な自治領主ですし、このご時世、奴隷なんて珍しくもないのに……」
「クロウ男爵の馬車だと知っていて何故こんなことをしたのかかい？　逆だよ。僕は、あの馬車がクロウ男爵のものだと知っていたから、こんな行動をとったんだ」
「どういうことですか？」
　チコリは聞いた。
「君はクロウ男爵がどういう男か知っているかい？」
　質問には答えず、ケサンは逆にチコリに尋ねた。
「いえ。よくは……」
「一言でいえば狂人さ。彼は鉄のように冷徹な心と、目的のためには手段を問わない残虐性の持ち主だ。これは王宮内では公然の秘密となっているんだが、男爵は数年前から奴隷を大量に買い集めては、何かの研究に躍起になっているらしい。なんでも、生の秘密を解き明かし、不老不死の術を編み出そうしているのだと言われているが、その真の目的はわからない。ただ、その具体的な内容については、信憑性の高い噂を聞いたことがある。——奴隷を使った人体実験だ」
　心臓が高鳴ったのが自分でもわかった。
　人体実験——？
　では、あの馬車に乗っていた人たちは、そのための“素材”だというのか。
「男爵の城からは定期的に、大量の人骨が運びだされるそうだ。なかには肉を歯でこそぎとったような人間の歯型がついているものすら含まれていて、それを実際に見た者もいる。それだけでも男爵の怖ろしい所業の一端は知れようものだ。そして男爵のもとに運び込まれる奴隷の数と、人骨の数から考えて、男爵に買われた奴隷は半年と生きられないに違いないという話だ。それを知っていただけに、むざむざと殺される者たちを見捨てるのは忍びなくてね——」
　全てを理解した瞬間、考えるよりも先に体が反応していた。駆け出そうとしたチコリの腕をケサンが引き止めた。
「どこに行く？」
「——助けなきゃ」
　声が震えていた。
「助ける？　何を？」
「決まってます。馬車にいた人たちを。あたし……自分だけ……」
「馬鹿言っちゃいけない。彼らは自分から残ると言ったんだ。それに、そろそろ馬車の異変に男爵が気付いてもおかしくない。そうなってくると、今度は奴隷商などではなく、男爵の部下が相手になる。王国側の人間である僕はもう手を貸すわけにはいかないよ」
　チコリは黙した。言いたいことがないではなかったが、自分の気持ちを、ケサンが納得するように告げるには、どう言えばいいのかがわからなかった。

「最初からクロウ男爵がどういう人物かを告げていれば、こんなことにならなかったと思うかい？　僕だって、全員助けたいのは山々だ。しかし、逃げる人数が増えれば、それだけ危険性はいや増すんだ。危険を伴った決断なしに、何かを手に入れることなんてできやしないよ。それは彼らにとっても、そして僕にとってもそうだ。僕は自らの騎士の誇りにかけて剣をとり、君だけがそれに応えてくれた。僕には最早君を助ける以上のことは出来ない」
　ケサンの言っていることは確かに正論かもしれない。だけど――と、チコリは思う。
「それでも……」
　チコリは言った。
「それでも、あたしはあの人たちを助けたいんです」
「何故――？　君がこだわるべき何があそこにあるというんだ？」
　その時、脳裏に浮かんだのは、妹によく似た、あの幼い少女。
「上手くは言えません」
　呆れたようにケサンが首を振った。しかし、チコリは挫けない。

「——ただ、父様がよく言っていたんです。大事なのは幸せになることじゃない、幸せを感じられる心を手に入れることなんだって。もし、ここで殺されるとわかっている人たちを見捨てて、生きていくならば、あたしはこの先、幸せになることはできても、それを幸せと感じる心は永遠に失ってしまう気がするんです」
「そんなものは一時の気の迷いだ。なにも君のせいで殺されるわけじゃない。しばらく気に病むこともあるかもしれないが、それも時が解決してくれる」
「そうかもしれません。でも、ここでそんなことを考えてしまうのであれば、最初から馬車に残っておくべきだったとも思うんです」
「僕が助けたのが余計なことだったとでも言いたげじゃないか！」
　ケサンはむっとした表情を浮かべた。その苛立ちはもっともであったが、自分の意志を翻したくはなかった。ただ自分の言葉に語弊があるのを知りつつ、それを上手く説明できないのがもどかしかった。
　もし、チコリにそれを伝えるだけの能力があれば、こう言っていただろう。
　自分は今まで何が利口かではなく、ただ自らが信じられるものを信じて生きてきた。だからこそ他の人に流されることなく、ケサンの呼びかけに応えることができたのであり、ここでその信念が揺らいでしまう自分は、最早、馬車を降りることが出来ない自分である。だから、馬車の人たちを助けに行くのは、チコリにとって他人事ではなく、心理的内情でいえば自分自身を助けるのも同義の行為である、と。
　しかし、それが叶わないからには、望むべくも仕方がない。チコリは言葉を吐いた。
「あなたはとても誇り高い方です。だから、あたしは、あなたの誇りへの感謝を忘れることはありません」
　せめて感謝の気持ちだけでも伝えたくて、チコリは頭を下げた。
「ただ、あなたが差し伸べてくれた手が、気高さにのみ支えられたものだとしたら、あたしはその手を戴くわけにはいきません。なぜなら、あたしも一度は卑賤な奴隷に落ちた身だからです。やはりあたしには——たとえそれがどんなに馬鹿な行為だったとしても——自分によく似た境遇のあの人たちを見捨てることはできないのです」
　風が吹きぬけ、森の梢が揺れた。少年の顔にサワサワと木の葉の陰が落ちる。
「ごめんなさい。あなたに救われた命ではありますが、どうか、あの人たちのために賭すと決めた恩知らずな我侭をお許し下さい」
「——チコリ」
　少年に名を呼ばれて、チコリは顔をあげた。
「……どうしても行くのか？」
「ええ」
　チコリは頷いた。
「……死ぬぞ」
「ええ」
「それでも？」
「覚悟のうえです」

「……」
　ケサンは無言のまま、チコリの目を見つめた。それから、しばらく沈黙が続いた後、少年は苦々しげに言った。
「僕には……やるべきことがある。騎士として、命を賭けて果たさなくてはいけないことだ。だから、君を助けることはできない」
「ええ」
　チコリは頷いた。もとより、これ以上、少年に迷惑をかけたくなかった。ケサンは苦渋の表情で、何事か迷っている様子だったが、ややして口を開いた。
「――行くな」
　チコリは何も言わずに、戸惑いの表情を浮かべた。
　ケサンは、少女が口を開くのを待たずに、言葉を継いだ。
「このままじゃ、むざむざ死にに行くようなものだ。僕が言ってることは、君にとって不本意な選択を迫ることになるだろう。だが、君が僕にわずかでも感謝の心を抱いているのなら、僕の言うことを聞いてくれ。行くな。いや、行かせない」
　少年はそう言いながら、チコリの両の手を握った。
　そこまで言われて、チコリの心に揺れ動くものがなかったといえば、嘘になる。しかし結論は最初から決まっていた。わずかな沈黙が続いた後、チコリは少し目を伏せて、そして言った。
「ケサン、あなたはとても優しい方です。でも、だからこそ――あなたは、あたしを止められません」
　チコリは視線をあげ、少年の目をみつめた。その力強さに、勢い、チコリの手を包む少年の力が弱くなる。
　少女の意志が変えようのないものであることを知り、少年は頭を垂れた。
「僕は……卑怯者だ。もはや君の助けとなるものは勇気を伴った行動だけだと知っていたはずなのに」
「ケサン！　そんなに自分を責めないでください。もはや、どうお詫びを申し上げていいかもわからない自らの不明を悔しく思うばかりです」
　チコリの手から少年の掌が零れ落ちた。
「ありがとう、ケサン。あなたに会えて良かった。あたし行きます」
　最後にそれだけ言うとチコリは心残りを振り切るように、振り返り、そして、あっという間に駆け出した。
「……待って」
　ケサンは口の中で呟いた。だが、そんな呻くような声では、もはや去りゆく少女には届かない。瞳をぎゅっと閉じる。拳を強く握り締めると、手の平が汗で濡れた。
　ゆっくりと瞼をあげると、チコリの後姿が揺れ、そして、段々とそれすらも霞んでいった。
「僕も――」
　その続きは喉奥まで出かかった。しかし、その言葉が最後まで発せられることはなかった。
――一緒に行く。

唇を噛む。結局、ケサンはただ呆然と少女を見送った。チコリも、一度も振り返らなかった。
ケサンはそれからしばらく呆然としたまま、まんじりとも動かなかった。
しかし、チコリの姿が完全にみえなくなってから、ようやく思いついたように動き出すと、馬に跨った。そして進むべき場所を見定め、鞭をいれた。
チコリが消え去った方角を背にして——

ケサンと別れたチコリは、一途に森の道を引き返していた。
どことなく寒く感じるのは、森の冷気のせいばかりではないだろう。
やがて、雨も降っていないのに、霧が立ち上ってきた。
太陽の光を遮る白いモヤは容赦なくチコリの体力を奪っていく。そういえば昨日から水しか口にしていないのだ。自分の身体も普段より重たく感じる。
しかし、少女の足取りは力強い。
怖くないといえば嘘になる。
このまま進めば、その先にあるのは確実ともいえる死だ。
それでも、チコリは、まるでそうあることが生き残る唯一の術だと信じるかのように、努めて冷静であろうとした。もとより無謀は承知のうえなのだ。精神の機敏さまで失っては、微かな希望すら見出せない。恐怖は心を萎縮させる。
刻々と、時間だけが容赦なく過ぎ去っていく。
日が暮れようかというころ、チコリは森を抜け切った。霧は何時の間にか晴れ上がっている。まもなく夜が訪れることになるが、チコリは休もうとはしなかった。幸いにも、今夜は晴れていれば、月の出る夜だ。
と、その時だった。はるか草原のかなたに、ゆらゆらと炎がゆらめくのがみえた。
（――追手だ）
心臓が高鳴る。
逃げるか、あるいは隠れるか。
当然、そうあるべき二つの選択肢が脳裏をよぎる。
しかし、少女はそのどちらも選ばなかった。
チコリは真直ぐ前を見据えると、その場から一歩も動かなかった。そして、追手を待った。
それはチコリにとって、ひとつの賭けであり、道すがら、ずっと考え続けて出た必死の結論でもあった。
追手が現れたということは、既に馬車の異変は男爵の知れるところとなり、奴隷たちは男爵の屋敷へと引き取られたはずである。だとすれば、悠長なことはしていられない。ぐずぐずしている間にも、皆が殺されるかもしれないのだ。それに相手は貴族領主。もとより、まともな手段では、手も足も出ない。ならば、いっそ相手の懐に自ら潜り込むことで、状況を打開する糸口を見出そうと考えた。
もちろん、そこにはこの少女なりの目算がなくもない。
だが――
（――むざむざ死ににいくようなものだ）
ふとケサンの言葉が思い出された。自嘲するでもなく、そうなのだろうと思う。自らの生命を担保にして、勝てる確証もない賭けをするようなものなのだ。チコリは恐怖心に打ち勝とうとするかのように、ギュッと瞳を閉じた。
たったそれだけの動作でチコリは最後の覚悟を決めた。

　それは緊張のあまり、数時間とも感じられたが、時間にすれば数分にも満たなかっただろう。
　やがて、蹄音とともに夜の闇の奥から騎乗の男達が姿を現した。
　男達は、少女に気がつくと、あっという間に駆け寄ってきて、「ドウドウ」と手綱を引き絞り、チコリの周りをぐるりと囲んだ。
　人数は六人。ランプに照らされた男達は、皆、黒髪に赤胴色の肌をしていて、眼孔が深く窪んでいる。異相といっていい。
「――そこの娘、そんなところで何をしている？」
　その中で、指揮官と思われる口ひげを生やした男がチコリに尋ねた。チコリは大きく深呼吸をし、気持を落ち着かせて、それから口を開いた。
「私はチコリといいます」
　その言葉に、男達がざわっと、ざわめいた。
　チコリはその反応で、彼らが男爵の追手であることを確信した。チコリは言う。
「あなたたちは男爵様の使いの方ですね？」
「いかにもそうだが」
　先ほどと同じ男が答えた。
「お待ちしておりました」
　そう言って、頭を下げたチコリに男たちは訝しげな顔をした。戸惑っているのが伝わってくる。
　悪い反応ではない。動揺は、心の隙につながる。
「待っていた？　――どういうことだ？」

　言いながら男は、右手で部下に指示を出す。すると二人の男が馬から飛び降り、音もなく森の方に走り去っていった。影すら追えない素早い動きだった。想定外の出来事に、罠を用心して、斥候を差し向けたのだろう。
　チコリは男達が冷静であることに嫌な気がしたが、それでもそれを顔に出すことなく、セリフを吐いた。
「言葉の通りです。あたしを男爵様のもとへ連れて行って欲しいのです」
「――何？」
「というのも、男爵様にお話したいことがあるのです」
「男爵様に？　どういうことだ。貴様は自ら奴隷馬車から逃げだしたのではないか」
「ええ。そうです。あたしは一度は自由になるため逃げ出しました」
「なら、何故――？」
「一時の気の迷いに任せ、逃げ出しはいいものの、あたしには行く当てもありません。奴隷として売られたあたしには、もはや奴隷として生きるしか道はないと気づいたのです」
「ふむ。だからこうして戻ってきたというわけか？　しかし、一度逃げ出しておきながら、やはり奴隷がいいなどとは、随分と都合のいい話ではないか？」
「……騎士ケサンとは何者なのか」
　チコリがその名を口にした瞬間、周りを取り囲む男達の目がギラリとひかった。
「あなた方はご存じではないのでしょう？」
　そう言って、チコリは乾いた舌で唇を舐めた。少女にとって、その言葉こそが、状況を打破するためのキッカケであり、ことの成算を決する切り札であった。
　ケサンは奴隷たちに逃亡を呼びかけるさい、自分の名前と地位を名乗っている。しかし、それは賢明な行動ではなかった。なぜなら、奴隷馬車を襲撃したことは、明らかな違法行為であり、ましてや王宮騎士という地位につく身であれば、自分が何者であるかは慎重に秘匿せねばならかったはずだからだ。だが同時に、奴隷からすれば、何者かもわからない襲撃者に呼びかけられても、絶対に馬車を降りようとはしなかっただろう。それがわかっていたからこそ、ケサンは男爵にそれを知られる危険性を顧みず、自分の身分を明らかにして、奴隷達の警戒を解こうとした。
　しかし、皮肉にも馬車を降りたのはチコリだけであった。結果、ケサンは利なくして、徒に男爵にその名を知られることになった。
　だが、それは、男爵にとっても別の意味で影響を与えたはずだ。
　馬車を襲撃した者が「騎士」を名乗ったということ。この事実が、事態に複雑な機微を与えている。
　ケサンが騎士だとするならば、その主君となるべき者は誰なのか、あるいは、その者は今回の襲撃に関与しているのか。
　そういった目的や背後関係次第で、貴族領主同士の政治問題に発展することになるからだ。
　だからこそ、事態の収拾にあたって、男爵は何よりもまず事件の全容を明らかにすることを重視するのではないかと思った。そうであればこそ、情報提供者としての自分の価値を、男爵は無視するわけにはいかないに違いない。

　そして、その予測は男達の反応で確信に変わった。
「おまえは――」
　と、先ほどと同じ男がようやく口を開いた。
「ケサンとやらが何者かを知っているのだな？」
「それは男爵様に直接お話します」
「解放騎士団ではないのか？」
　と、男が尋ねたのは当然のことだった。
　チコリの予想に反して、男はケサンを正式な騎士とは思っていなかった。正式な騎士であれば、自らの身分をわざわざ明かすとは考えにくく、その線は薄いとするのが必然で、それはおそらく男爵の考えも同様だろう。
　それよりも、頭を巡らせねばならない杞憂は別にある。
　解放騎士団――である。
　ビザン地区における解放騎士団の活動実態は現在のところ報告されていないが、特にここ一、二年の解放騎士団の勢いは凄まじく、徐々に新しい活動拠点を拡げてきているという噂は常々聞いている。
　解放騎士団が為政者にとってやっかいなのは、破壊活動などの「犯罪性」そのものよりも、その思想が高い伝播性を持つことにある。解放騎士団の理念は人民の解放にあるが、具体的には、王族をはじめとした支配領主を排して、人民を中心とした新社会を作り上げることで、人間の尊厳と自由を旧制度の束縛から解放することを目的としている。この考えは、近年の不作によって、現体制への潜在的不満が高まったことを背景に、指導者的立場の農民層や開明的市民層を中心に徐々に理解されるようになってきている。彼らは、共同体における影響力が強く、段階的に下部組織へとその思想を啓蒙していくことで、解放騎士団は知らぬ間に木の根のように支持基盤を拡げて行く特徴がある。
　それだけに、一度完全に根を拡げきってしまえば、その根絶は不可能であり、早期に芽を摘み取っていくのが体制側にとって唯一絶対的な対処法とされている。
　だから、もしケサンが解放騎士団だとすれば、奴隷馬車が襲われたなどという直接の被害の多寡など問題にならないほどの由々しき事態であり、その情報は喉から手が出るほど欲しい。
「そうであろう？」
　男は重ねて問うた。
「さあ」
　男のカマかけを無視して、チコリは首を振った。
「言えぬというのか？」

「ええ」
「何故？」
「なぜでも」
「おまえは自分の立場がわかっていて、そんな口を利くのか？」
「わかっているからこそ、です」
　まるで、その話が自分の安全を保証するとでも言いたげである。
　もちろん、チコリは、男爵が相手だろうと、ケサンが王宮騎士であることを言うつもりはない。そして、それに気づかれれば、この場で殺される危険性すらある。
　ただ、だからといって明らかな嘘をつこうとはしなかった。あくまで、遠まわしな言い方で、それを匂わせるのみである。なぜなら、どんな嘘でも、それを信じさせようとすればするほど、新たな嘘をつくことになり、いつかは破綻するものだからだ。それよりも、情報を隠し、嘘とはいえない、いくつかの判断材料となるパーツだけを与えることで、相手にそれを組み立てさせ、全く別の完成形を導くのだ。そうすれば、自らが構築した理論から弾き出した解だけに、心理的にそれを否定し難くなるに違いない。それこそが少女の思惑であった。
　それに、もとより成功する確率は低いのである。ならば、たとえ事敗れるにしてもも、最低限、自分が納得できるやり方をとりたかった。自分の生死がかかった決断を、卑しい嘘でしくじってしまえば、きっと後悔する。
「ふむ」
　男は眉根に皺をよせた。
　どうやら、この少女は生意気にも自分を相手どって駆け引きをしているらしい。つまり、この少女が黙して語ろうとしないのは、それが少女にとって大切な交渉カードだからだろう。もし少女がこの場で知っていることを話してしまえば、その扱いは通例的な逃亡奴隷のものとなり、咎を受けることは必至である。そして、その想像は正しい。
　しかし、男は安易にそれを少女に確かめようとはしなかった。男には経験に裏打ちされた智謀がある。問えば語られる式に得られる安易な答えではなく、自らの洞察と思考に判断力の重点を置いていた。
　もっとも、男は、少女の言葉通り、男爵様のもとに連れて行くのがいいだろうと結論づける気にもなっていた。男は少女の言葉から、この話を機に、逃げ出した罪を許してもらいたいとでも考えているのだろうと察した。だが、だとすれば哀れな話ではないか。どのみち奴隷の最終的な運命は決まっていることを、この少女は知らないのだ。
　それに、そもそも、男爵に命じられたのは、逃亡した奴隷とケサンという騎士の捕縛であり、尋問はその任に含まれていないという事情もある。ならば、これ以上少女を問い詰めることは、分を出過ぎた真似である。職務に忠実であるとは、そういうことだ。
（だが……）
　だが、ひとつだけどうしても気になることがあった。
　それは、男爵がケサンという男の正体を知りたがってることを少女が見越していることである。たかが奴隷の小娘にしては、勘が良すぎるのではないか。それがどうも気にいらないといえば、気にいらない。

ふと、男はあることを思いつくと、チコリにこんなことを言った。
「……どうだ、小娘。それならこうしよう。今ここで知っていることを全て話すならば、貴様のことは見逃してやろう。さらにその見返りとして貴様に千ルーグを与えよう。それをもってどことなりとも逐電するがいい。貴様にとっては思いもかけない条件だと思うが、どうだ？」
男の申し出にチコリは細かくまばたきを繰り返した。チラリと男の顔を窺うが、その表情に変化はない。
一方、男はチコリを舐めるような目付きで観察していた。もちろん、チコリが言われたとおりに話したところで、男に約束を守るつもりは毛頭ない。それよりも、この申し出にチコリがどういう反応をするかで、少女の心底を試そうとしたのだ。
「千リーグ……」
チコリは言葉を詰まらせた。当然、男の申し出を受けるわけにはいかない。チコリの本当の目的は男爵の屋敷に潜り込むことにあるからだ。
だが、だからといって言下に断るわけにはいかない。断ってしまえば、男はその理由を執拗に追及してくるだろう。
後悔といわないまでも、自責の念がチラリと湧いた。
男からこんな申し出がなされては、今さら何を言ったところで、説得力を失ってしまうからだ。
相手に自分の考えを想像させようとしたチコリの思惑は半ばまで間違っていなかった。男は、実際、チコリが予期していた通りに考え、それを実行しようともしていた。ただチコリにとって誤算だったのは、自身の能力に強い自負を持つ男の性格にとって、少女の奴隷らしからぬ賢しらな態度が鼻についたことだ。それが、いわば遊び心から、やらずもがなの駆け引きをさせたのである。
もっとも、このような窮地を生み出したチコリの行動理由に、どんな明快な論理があったとしても、結果として重大な過失を犯したことは疑いようもないだろう。命がけの状況ですら、嘘をつくことを拒否した理由の側面に、少女の潔癖な精神性があったとすれば、それがための逸機であり、また、それ故の自責であった。
（ダメか……）
ここにきて、チコリは初めて弱気になり、思わず男の鋭い視線から逃れるように顔を逸らした。

「どうした……？」
　不審気に男が尋ねた。
「あたしは……」
　と、チコリは顔をあげた。それはチコリにとって、瞬時の閃きだった。男の声音に、わずかながら人を愚弄する響きを感じたのだ。
「あたしは奴隷として売られた身です。このまま逃げ出したところで、もはや行くあてもありません。だから……」
「だから？」
「千ルーグでは足りません。二千リーグなら――」
「二千か」
　男は薄く笑った。その表情には深い満足があった。
　少女が要求を切り上げてきたことで、侮蔑の感情が生まれたからだ。男の言葉を真に受け、自分に交渉の余地があると思っているのだろう。欲深い娘だ。
　頭が鋭いだけの娘なら、自分が危惧を感じる必要はない。男爵様ほどのお方であれば、この程度の娘を手玉にとるのはわけもないに違いない。
　チコリを試したのは、男の瑕疵ともいえない強すぎるきらいのある自尊心であった。そのため、今度は、ついチコリのことを、たかが奴隷の小娘と侮る向きに傾いた。それに言葉を発する直前に、ふと視線を逸らした仕草が、目先の欲にかられた奴隷らしい卑しい性根から出たものと感じられ、自分の考えを後押しした。
　男は言った。
「なるほど。交渉決裂というわけだ。それなら、当初の予定通り、男爵様の屋敷に連行するとしよう」
「えっ！」
　チコリは安堵を押し殺しつつ、ひきつった声をあげた。
「何を驚いている？」
　もはや男は嘲笑を隠そうとはしない。
「そんな！　わかりました。千で結構です」
「駄目だ、駄目だ。もはや機は去ったのだ」
「ならば、八百……いえ、五百でも結構です！」
　懇願しながらも、チコリはとっさの賭けに勝ったことに、心中で喜んでいた。
　あの時、男の声音に愚弄する響きを感じ取った瞬間、千ルーグなどデマカセで、自分はからかわれているのではないかと疑念が湧いた。そう考えれば、男が本当に千ルーグもの大金を身につけているのかも疑わしいのだ。
「さあ、もう貴様と付き合うのも終わりだ」
　男は言った。それと同時に、斥候の二人が戻ってきた。
「どうだ？」
「周囲に人の気配はありません」
「そうか。では、これより追跡隊を二隊にわける。お前たちは私とともに、引き続き、もう一人

の追跡にあたれ。カピとシバイはこの娘を男爵様の屋敷に連れて行け。――不審な動きをしないかぎりは、手荒な真似はするな」
「はっ！　送り届けてからは――？」
「再び、我々本隊に合流しろ」
「かしこまりました」
　男は素早く指示を出した。
　こうしてチコリは別隊により、男爵の屋敷へと連れて行かれることになった。
　チコリは馬の背に乗せられた。
（まずは上手くいった）
　ぎゅっと身が引き締まる思いだった。
　クロウ男爵に謁見する機会を作り出す。
　それがチコリの狙いだった。
　相手は一国の貴族領主なのだ。自分のような小娘が相手になるわけがない。だが、もしも男爵と直接相対することができるなら、それがわずかな勝機になるかもしれない。
（――こうなれば、男爵を殺すしかない）
　とは、チコリは思わない。男爵と対面したあと、どうするかまでは考えていない。そもそも、男爵を直接狙うにしても、そんな隙があるかもどうかもわからない。
　それでも、最初から天運をあてにせねば賭けるべき可能性も生まれないのだ。ならば、がむしゃらに行動するしかない。
「では、参ります」
　シバイと呼ばれた男がヒゲの男に報告した。
　それから、手綱を引くと、馬は走り出した。もはや、引き返すことはできない。
　チコリは改めて覚悟を固めた。

クロウ男爵の屋敷に着いたのはその日の夜更けだった。男達はずっと無言のまま馬を走らせ、道の途中、休憩するときも、チコリに向けて不気味に目を光らせるだけで、縄をかけるような真似はしなかった。
もとよりチコリに逃げ出すつもりはない。体力を温存するためにも、努めて大人しくしていた。
やがて、天上の月が高くなるころ、台地のすそ伝いに道を曲がるとその先に、街がみえてきた。クロウ男爵が治める街ビザンである。
月明かりに照らされたビザンの街は全体がぐるりと城壁で囲まれており、門を抜けると、石畳で舗装された一本道が小高い丘の上の屋敷にまで続いている。この時代の貴族領主の屋敷といえば、城砦の機能も兼ね備えるのが通例で、クロウ男爵の屋敷もその例にもれず、石造りの無骨な城館がそびえたっている。
城壁をくぐり抜け、町並みを抜けた丘のふもとには錬鉄の門と門番が立っている。カピとやらが門番に話しかけると、チコリの身柄が門番に引き渡された。カピとシバイはそのまま屋敷へと馬を走らせていく。
しばらくして、二人は馬車と警備兵を引き連れて戻ってきた。
今度はチコリの身柄は馬車に乗せられた。カピとシバイはそのまま屋敷に戻らず、街の外へと向かう。このままケサンを追うため、本隊に合流するに違いない。
新しく来た男達のチコリに対する扱いは、賓客を遇するが如しである。大人しく恭順の意を示したことで、情報を聞き出すまでは懐柔策をとるつもりなのだろう。チコリにとって思惑が当たったともいえる反応だったが、奴隷の行く末を知っている身として、腹の底が見透ける鄭重な態度ほど不愉快なものはない。
馬車を降り、建物に足を踏み入れると、質実剛健な外観に比して、内部は瀟洒な造りとなっている。
玄関ホールは高い吹き抜けの天井になっていて、尖塔アーチが多用されており、窓にはめたステンドグラスは聖女を模したモザイク画が施されている。無造作に飾られている調度品ひとつとっても精妙な細工の技がふるわれており、重量感のある光沢は、そういった審美眼のないチコリにも、高価なものだとわかった。
警備兵は思わず見蕩れそうになっていったチコリに「はやく来い」と言葉をかけた。ここからは、この男が一人でチコリを案内するらしい。
正面の階段を上り、廊下を渡る。そして、チコリが通されたのは書斎だった。
警備兵はノックすると、声が掛かるのを待って、ドアを開けた。
「男爵様、お連れしました」
男爵と呼ばれた男は椅子に腰掛け、机に向かって何か書き物をしていた。でっぷりとした巨漢で、肌は青白く、頬の肉がだらしなく垂れ下がり、首がなくなっている。全体的に、動きも物の考え方も鈍重そうなイメージを受けるが、この男が奴隷を何人も殺してきたことを考えると、どこかに余人も及ばぬ鋭い残虐性を秘めているのかもしれない。
「ふむ」
男爵がペンを動かす手を止め、顔をあげた。チコリは、はしこく視線を走らせ、書斎を隅々ま

で観察する。決して広くはない。むしろ壁の両側に本棚が整列しているため、警備兵とチコリが並べばもうそれだけで手狭になっている。机の上にはペン、インク、羊毛紙、それに幾冊かの本が高く積み上げられている。男爵が腰掛けているのは、背もたれと肘掛のついた木製の椅子である。座るうえでの快適性はともかく、とっさの機敏な動作には向かないだろう。
「確か……そうそうチコリといったね」
　男爵がチコリに声をかけた。女のように高い声である。
「私に話があるそうだが？」
　チコリはうつむいたまま返事をしない。
　少女は考えていた。
　ひょっとして、今が好機なのではないかということを。
　この場にいる警備兵は一人だけ、しかも油断しきっている。警備兵の武器を奪い、男爵を人質にとれば、一気に形勢は逆転する。力では男に敵わないだろうが、隙をつければ、あながち不可能ではない。素早さなら、自信がある。
　チコリの決死の覚悟が手繰り寄せたのか。ここまで恵まれた状況は少女にとって、むしろ驚きだった。
　思うに、奴隷を人間とも思わない扱いをしてきた男である。その奴隷が逆に自分に危害を与えるなどという可能性は、頭の隅に浮かんだことすらないのだろう。
「どうしたのかね？」

男爵は少女が何も答えないので、不思議そうに尋ねた。
チコリはなおも返事をしない。
どうするべきか。やるなら躊躇していられない。
言葉を発すれば、そこから気魂が発散する。そうなれば、そのままずるずると行動のきっかけを失うことになりかねないのだ。チコリはその機微を本能的に知っていた。
わずかでも確実性の高い勝算のある今こそ、機先を制するべきだ——。
「おい、どうした？」
黙ったままのチコリの顔を警備兵がのぞきこんだ。その刹那、チコリの決心は固まった。
「痛ッ！」
と、同時に警備兵が声をあげた。のぞきこんだ警備兵の目をチコリの手が打ったのだ。何が起きたのか把握するのに時間がかかるだろう。間髪入れず、チコリが体当たりすると、いとも簡単にバランスを崩す。そのまま警備兵に自分の体を預けながら、腰に携えていたサーベルを引き抜くと、警備兵が壁にぶつかった反動を利用して体勢を立て直し、チコリは一気に男爵への距離を詰めた。
男爵は椅子からとっさに腰を浮かせただけの体勢である。
「——動かないで！」
サーベルの切先を男爵の喉元に突きつけた。さすがに声がかすれた。今まで気づかなかったが、極限まで緊張しきっていたのだ。だが、まだ緩めるわけにはいかない。
「ま、待て！」
「動かないで。言うとおりにすれば、殺す気はありません」
「わ、わかった」
男爵は力が抜けたように、椅子に腰を落した。
「あなたも——」
チコリは振り向くと、警備兵を目で制した。
「——動かないでください」
その目には必死の相がある。警備兵も従う他なかった。
それからチコリは、サーベルで男爵を威圧しつつ、警備兵の動向が見渡せるよう、男爵の背後に体を移した。
「ど、どういうつもりだ？」
恐怖心からか、男爵の声はかすれていた。
「まず……」
と、チコリは言う。
「あたしはあなたの命を奪うつもりはありません。そのことを理解してください。あたしの要求を聞き届けてくれれば、無傷で解放します」
「要求……だと？」
「ええ」
「何が目的だ？」
すぐに殺されることはないと知って、幾分か落ち着きを取り戻したのだろう。男爵は言った。

「――奴隷の解放」
　チコリは答えた。
　男爵の肩がピクリと動く。
「何故――」
「あたしはあなたが奴隷を集めて何をしようとしていたかは聞くつもりはありません。ですから、その問いに答える必要もありません」
「な、なるほど、どうやら君は色々と知っているようだな」
「……まず、馬車を用意してください。それから皆が安全な場所に逃げるまで、決して手出しを許しません」
「わかった。だが、君はどうする？」
　男爵が言った。
「あたしは……」
　と、チコリは言いながら、ごくりと唾を飲み込んだ。そこまで自分の考えが及んでいなかったことに気付かされたのだ。そもそも、こんな状況になったのからして、最初から計算してのことではなかった。
　皆と一緒に逃げる――？
　いや、駄目だ。それでは男爵が追手をけしかけないかどうかが確かめられない。
　ケサン。
　こんな時に、ケサンがいれば、きっと何かいい知恵を出してくれるのに――
「……あたしは残ります」

　それが試行錯誤の結果、チコリが出した結論であった。
　これにはさすがの男爵も「なに！」と声をあげた。
「そして皆が無事に逃げ切れるまで見届けます」
「見届けたあとはどうする？」
　男爵が尋ねる。チコリは答えない。なぜなら少女は今から自分が発する言葉に怯えていた。しかし、それが考えうる最善策であるならば、そうする他ないことを少女は覚悟していた。チコリは意を決すると、慄然と言った。
「――いかようにも」
　皆が逃げる時間を考えれば、男爵を引き連れたまま自分も逃げ切れるような余裕はないだろう。
　それに男爵が受ける屈辱を考えると、このままでは偏執的な遺恨の根を残すことになる。そうなれば、男爵が一時的に約束を守ったとしても、後々、草の根をわけても、逃がした奴隷たちを探し出し、自分が受けた屈辱を晴らそうとするかもしれない。だとすれば、誰かが残って男爵の復讐心を満足させてやる方がいい。ならば、それは自分がやるべきだ。自己犠牲ではない、それが自分の責任だからだ。
「ホウ」
　男爵は低く唸った。
「……彼らのために君が犠牲になろうというのか。そこまで彼らに執着する理由はなんだ？」
　チコリは無言のまま。もっとも、男爵にしてもはじめから回答が得れるとは思っていなかったのだろう。
「わかった」
　男爵は、言った。その言葉に、チコリは表情にこそ表わさなかったものの、安堵した。しかし、次に男爵が発した言葉はチコリにとって思いもかけないものだった。
「ようやく理解できたよ。男爵様がこのような悪戯をされた理由が――」
「え？」
　チコリは自分の耳を疑った。何を言っているのか理解できなかったのだ。
　その時、書斎の扉が音を立てて開いた。まず数人の警備兵が部屋に雪崩れこみ、それから、一人の老人がゆっくりと姿を現した。
　その老人は痩せこけた身体に、モスグリーンのジュストコールにベスト、キュロットのいでたちであった。頬骨の浮き出た貧相な顔は、伝説に聞く死神を思わせたが、何よりもその目。腐ったドブのように濁りながら、どこまでも深く続いているような、おぞましい瞳がチコリを貫いていた。
「男爵様！」
　チコリの手の元にある男が声をあげた。
「クロウ……男爵……？」
「フフフ」
　今しがた現れたばかりの老人が笑った。
「それじゃあ、この男は？」

「彼はハムソンといって、殺された奴隷商人の親方だよ。私の代役になってもらった」
「だ、男爵様！　早く、早く助けてください」
「まあ、待ちなさい。今は私が彼女と喋っているんだ」
「どうして――？」
「どうして？　今の状況をみれば明らかじゃないか。私は君の話など信じてなどいなかったのだよ。相手の出方もわからぬのに、ノコノコと目の前に姿を現すほど私も馬鹿ではない」
　クロウ男爵は満足そうに目を細めた。
　最初から、チコリは男爵の術中であった。チコリが感じていた警備の薄さも、全ては男爵が偽者ゆえのものであり、それをもってチコリがどう動くかで、その目的を確かめようとする罠だったのだ。
　もっとも、こんな回りくどいことをしたのも、男爵がチコリを完全に疑っていたわけではなかったという証拠でもある。せいぜい騎士ケサンとやらからの肝煎りを受けて、内通者として潜りこんできたのではないかという疑念を抱いたという程度のものであった。あるいは、それだけこの件に関する情報を欲していたからこその慎重さだったともいえる。
「さあ、ハムソンを離しなさい」
「動かないで！　この人がどうなってもいいのですか！」
「ふむ、これは困った」
　そう言って、男爵は笑った。それから、警備兵の一人に指図を与えた。
「仕方ない。誰か奴隷を一人連れてきたまえ」
「な、何をするつもり！」
「何って、理由はわからないが、君は奴隷を助けに来たのだろう。君が彼を殺すというのなら、私は君が大事に思う奴隷の皆様方を一人ずつ殺していくとしよう。どうだい、これで立場は対等だよ。いや、人質の数を考えれば、形勢逆転といったところかな」
「やめろ！」
「それは君次第だよ。わかっているだろう。どうすればいいのか？」
　男爵は「ククク」と嬌声をあげた。
　もしここでハムソンを解放してしまうのは、それは考えうるかぎり、最悪の選択肢だろうことはチコリも理解している。しかし、その最悪を選ばざるをえない状況にまで、チコリは追い込まれているというのも、また事実であった。
「さあ、どうする？」
　再度の問いかけに、チコリは観念した。
　締めを解く。は「わ！」と声をたてながら、転がるように、男爵に駆け寄った。
「さあ。あのお嬢さんを捕らえろ」
　それから、男爵は警備兵に声をかけた。
　チコリはサーベルを手からとりこぼすと、力を落とし、その場に膝をついた。地面に転がったサーベルがカラカラと虚しい音を鳴らした。
　全てが終わったのだ。

　それをみて、男爵は満足そうに恍惚の表情を浮かべた。
　あの時、まともに捕らえようとすれば、少女は敵わないまでも、抵抗しようとしたかもしれない。そうすれば、少女は必ず死んでいただろう。男爵には、少女に聞くべきことがあった。しかし、少女を殺してしまえば、それは永久に知れなくなってしまう。
　男爵は床に押さえつけられたチコリの前に回り込むと、しゃがみこんだ。
「――いい目だ」
　無意識ながら、視線をそらそうとしたチコリのアゴを男爵は手で支えた。
「失うことを恐れない目をしている。だから今も命乞いをしようとはしないし、私に歯向かうような真似もできたのだ。だが、普通は違う。人は皆誰しも失うことに怯えるものだ。命を、財産を、日々の暮らしを。そして守るものがある人間は途端に臆病になる。交渉の基本は相手の手の内を探りつつ、自分の本心を悟られないことだが、君は私のカードを読み違えたことに気付かず、自分から守るべきものを曝け出してしまった。それが君の失着だよ」
　そう言って、男爵は喉奥で笑った。
「君には聞くことがある」
「どうするつもり？」
　気丈にもチコリは尋ねた。
　おそらく非道い責めを受けることになるだろう。だが、せめてケサンに迷惑がかからないよう、どんな目に遭わされても、何も喋るつもりはない。
　しかし、そんなチコリの決意を見透かしたように、男爵は笑い声をあげた。
「クク。またその目か。だが君はわかっているようで、わかっていない」
　そう言って、男爵は立ち上がると、警備兵に指示を与えた。
「とりあえず、この娘を地下の牢屋に入れておけ」
　それから、チコリを見下ろすと言った。
「いいことを思いついたよ。明日を楽しみにしていたまえ」
　男爵の視線がチコリの身体に注がれた。偏執的な薄気味悪い輝きに、男爵の瞳は濡れていた。

翌日、牢屋で一夜を明かしたチコリの元に現れたのはクロウ男爵自身だった。
「さあ、来い」
そう言って、男爵は警備兵に命令すると、チコリの手に枷をかけた。
そうしておいてから、男爵が先頭を歩き、そのすぐ後を警備兵に引き連れられ、チコリは歩かされた。
階段を昇り、廊下を歩いて行くと、今度はまた別の地下へ通じる階段があり、一行はそこを降りていく。
そこは空気が沈殿して、腐臭と血の匂いが漂っていた。
男爵は階段を降りると、すぐ右手にある扉を開けた。
チコリは部屋に招かれると、扉のそばに立たされる。
燭台に火が灯され、かすかな明かりに部屋の全景が浮かび上がる。
そこには見たこともない器具の数々が所狭しと並べられていた。それらの器具にはどす黒いシミが滲んでおり、おそらく血の跡だと思われた。
背筋が凍えるほどの寒気を感じた。
「どうだい？」
男爵がチコリの顔を後ろから覗き込むように、言った。
「拷問部屋だよ」
「ごうも……ん……」
チコリはごくりと唾を飲み込んだ。
「そうだ。なかなかどうして素敵だろう。——気に入ってくれたかい？」
チコリは言葉にせず、キッと男爵を睨みつけた。だが、男爵はそれを意にも介さず、言った。
「君には聞くことがあるといったね」
声が壁に響いて、こだました。男爵はチコリに歩み寄ると、耳元に口を寄せた。
「……ケサンとは、何者？」
チコリは男爵の顔を一瞥して、それから恐ろしげな拷問器具の数々に目をやると、再度男爵に視線を戻し、言った。
「もう、あなたに話すことはありません」
「ククク」
その答えに男爵は笑った。
「この部屋をみて、そんなことが言えるとはね。嬉しくなるよ。……しかし、君がそう言うことも予想はしていたよ。……先ほどゲストを招待しておいたんだ。そろそろ来る頃だ」
そう言って、男爵は入り口の扉を開け、外を確かめた。
「ほうら、ちょうど来たところだ」
男爵はチコリをみて、不気味に笑った。
ややして、警備兵に連行されて十数人の人たちが部屋に入ってきた。皆、手に枷をかけられている。チコリにはすぐわかった。馬車にいた奴隷たちだった。
「みんな！」
チコリの声に反応して、先頭にいた男が「あっ」と声をあげたが、警備兵に殴って静かにさせ

られた。それをみて、後続は誰も喋ろうとはしなかった。彼等が何を考えているのかはわからないが、列の最後尾にはアリスがいて、信じられないといった目でチコリをみていた。
　奴隷達が全員部屋に入ると、扉が閉められ、チコリと向かいあうかたちで整列させられた。二十人近くの武装した警備兵がその周りを取り囲む。
　皆、状況がわかっていないのか、それでも容易ならぬ雰囲気を察して、異様に緊張した顔をしている。もちろん、チコリにも状況がつかめない。自分が責めを受ける姿を見せしめにでもしようというのか。
「もう一度、聞く。ケサンとは何者だ？」
　男爵がチコリの前に立ちはだかると、先ほどと同じ質問を投げかけた。
「話すことはないと言ったはずです」
「クック。なるほど」
　男爵は後ろを振り向くと、警備兵に声をかけた。
「おい。やれ！」
「な、何を？」
　驚いて声をあげる。
「目を見ればわかる。君は苦痛すら恐れていない。そんな人間をいくら痛めつけたところで吐きはしないだろう。だが、君は彼らを助けたいんだろう。ならば、君ではなく、彼等に私のコレクションを堪能してもらえばいい。君はここでそれを観ていてくれたまえ」
　チコリは息を飲んだ。
「おい！　何をする気か知らないが、その女と俺達は関係ないだろう！」
　前列の中央にいた奴隷の男が叫んだ。男爵の視線が、瞬時にその男を睨みつけた。
「おい」
「はっ」
　男爵に指図され、警備兵の一人が、男を列から連れ出した。
「な、なんだ。何する気だよ……おい、や、やめろよ」
「君は果敢にも私に意見した。だから喜びたまえ。その勇気と智恵を表して、君から犠牲になってもらう」
「……ま、待て。犠牲ってなんだ。やめて。止めてください。嫌。やめて。頼む。助けてくれ」
　男が悲鳴をあげる。悲痛な叫び声が、地下室に響いた。

　チコリは男爵に掴みかかろうとした。しかし、横にいた男に押さえつけられ、壁に叩きつけられた。その衝撃で、肺から空気が漏れた。
　必死で、呼吸を整えると、チコリは叫んだ。
「やめて！　その人たちは関係ない。聞きたいことがあるなら、あたしにやりなさいよ！」
　男爵はチコリの前に立ちはだかると、少女の顎に手をかけた。
「ならば、言え！　ケサンとは何者だ」
　喋れば、あの少年に責が及ぶ。チコリは口をつぐんだ。その様子に、男爵は後ろの部下に目で合図した。
「やれ！」
「待って！」
「素直に吐け！　そうすれば、望む通りにしてやる」
「やめろ！　卑怯だぞ」
　堪えきれず、チコリの目から涙が溢れ出た。
「卑怯？　何とでも言えばいい。さあ、吐くんだ。ケサンとは何者だ？」
　奴隷の男は上着を脱がされると、壁から垂れさがる鎖に、万歳する体勢で手首を固定されようとしていた。男の悲鳴がチコリの耳を切り裂くほどに、高くなった。
「やめて！」
　チコリは叫んだ。
　その様子を冷静に眺めながら、男爵は考えていた。
　最初、男爵はケサンを解放騎士団であると予想していた。
　だが、この少女の反応。ここまでケサンとやらの正体を吐くことを拒絶するのであれば……
（ひょっとすると、解放騎士団ではないのか……？）
　男爵は心中でそうあたりをつけた。
　そうであるなら、奴隷馬車を襲撃したのは正式な騎士ということになる。
　だとすると、その目的はわからなくなるが、逆にいえば、だからこそ初手の情報戦で優勢を確保するためにも、なんとしてでも少女から知っていることを聞き出さなくてはならない。
「用があるのはあたしでしょ！　あたしを拷問しなさいよ！」
　少女はなおも吠える。
「威勢がいいのも結構だが、苦しむのは、君じゃない。早く決断した方がいいのではないかね」
　奴隷の男はもはや完全に手首を固定されている。男は恐怖のあまりひきつった笑い声をあげる。
　男爵はチラと少女の顔をうかがった。
　どちみち奴隷は死ぬ運命にあるし、そのことはこの少女も知っている。だから本来であればこんな見世物は茶番に過ぎないのだ。
　それでも、奴隷達を痛めつけることは少女にとって自分自身の苦痛よりこたえるはずだと、男爵は確信していた。
「やれ」
　男爵が指図すると、奴隷の男の体に鞭が飛んだ。

「ぐぁっ！」
　男が叫び声をあげる。
　たちまち、男の体に、赤いラインが走り、破れた皮膚からは血がにじんだ。
　鞭打ちなどという単純な拷問は本来なら男爵の趣味ではない。それでも、素人相手のデモンストレーションには、コクのある苦痛を与える洒落た拷問よりも、皮膚を破り、ついには血の飛び散る、原始的な道具を用いた方が効果的だと、男爵は知っていた。
　また鞭が飛んだ。男の悲鳴がさらに高くなる。
　しかし、男爵の視線はチコリにも、拷問を受ける男にもなく、それを見守る奴隷たちに向いていた。訳も分からず、自分たちの仲間が拷問を受け、恐怖に怯える奴隷たちの目。その恐怖はそのままチコリへの無言の抗議ともいうべき、批難の目となって、少女に浴びせられていた。当然、少女もそれに気が付いているはずだ。
　男爵は苦笑せずにいられない。
　何と愚かな者たちであろうか。彼らが憎むべきは本来なら男爵であるはずなのだ。だが、奴隷として売られ、卑屈さに精神まで虐げられた彼らは、嗜虐者の匂いを敏感に嗅ぎ分け、心の中ですら反逆することを恐れる。そして、その憎悪の対象を、自分たちと同じ被虐者の立場にある少女に向けるのだ。
　奴隷達はその無言のうちにこう言っている。
――俺達がこんな目にあっているのはお前のせいだ。お前が余計な事をしたせいだ。さっさと男爵様の言う通りにするんだ、と。
　そして、こんな愚かな者たちを、少女は自分の命を賭けて、救おうとしていたのだ。これが笑わずにいられるだろうか。
　ついにチコリは耐えきれずに音をあげた。
「やめて……」
　その声には涙が滲んでいる。

「やめろ！」
　男爵はすぐさま指示を飛ばした。
「どうだ、話す気になったか？」
「何故？　何故、こんなことをするの？」
「私に質問しろとは言っていない。私の質問に答えるかどうかだ」
「それは……」
　ぐっと唇を噛んだチコリをみて、まだ足りぬかと男爵は再開の指示を出した。
「やれ！」
　ピシリっと音をたてて、鞭が男を打つ。
「ギィグァア！」
　肉が裂け、血が飛び散り、男の湿った悲鳴が大気を揺らした。
　チコリは思わず目をつぶる。そこに男爵の平手が飛んだ。頬がかっと熱くなった。
「見届けろ。お前がはじめたことではないか」
「もう……やめて」
　チコリは男に目をやった。責めは一旦休止しているが、男はひとしきり悲鳴をあげたあと、ぐったりと青い顔をして、不規則に荒い息をついている。
「吐け。ならば吐くんだ」
　チコリは涙をポロポロとこぼしながら、嫌々と首を振った。どんなことがあろうとも、ケサンが王宮騎士であることを言うわけにはいかない。
「ふむ。これでは話にならない。いいだろう。質問を変えよう。君はどうしてそこまでして奴隷を助けようとしたのかね？」
「話せば……やめていただけるのですか」
「やめるかどうかは、君の答え次第だ。さあ答えろ」
　答えるべきかどうか窮して、チコリは俯いた。その顔に二度目の平手がとんだ。それからチコリ髪の毛を引っ張り、無理やり前を向かせながら、男爵は重ねて、言った。
「何故だ！」
「――生きてても……」
　チコリは嗚咽を吐き出すように言った。
「……いいことなんか……ひとつもない」
　アリスを盗み見ると、声が聞こえているのだろう。顔色が変わるのがわかった。
「……そう思わざるをえないのが……奴隷の身です」
　頬がじんじんと痛む。口の中を切ったようで、上手く舌が回らなかった。
「でも……そんなことないんだと。世界には……想像もできないような素晴らしいことが……沢山あるんだって。あたしが……みんなを自由にすることが……できたら……それを信じてもらえるんじゃないか……って――」
　掴んでいた髪の毛を離すと、男爵は目を白黒させた。それから、突如として、おかしくて堪らないとでも言いたげに、笑い声をあげた。
「ククク。とんだ救世主もいたもんだ。その結果がこの様か！」

（その結果がこの様か……）
　心の中で、チコリは男爵の言葉を繰り返した。自分に哀しいのに、もはや声をあげて泣くことも自嘲することもできなかった。
「さあ、もはやわかっただろう、自分の無力さが。君がだんまりを続けていれば、ますます奴隷達が苦しむことになるぞ。さあ、言え！」
　男爵は「ククク」と唇の端から笑い声を洩らした。
　歯噛みする思いで、チコリは男爵の顔を睨みつけた。目の前にいる男を殺してやりたかった。首筋を噛み切って、息の根を止めてやりたかった。
　しかし、自分はあまりにも非力で、無力だった。

「まだ意地をはるか。いいだろう。よし、再開だ。続けろ」
　男爵はそう言って、振り返った。
　その言葉に、チコリの憎悪が弾ける。目の前が真っ白になり、持て余した激情の塊が、少女の体中の血を沸き立たせた。
　その時だった。
　チコリの脳裏にどこからか映像が流れ込んできた。
「え？」
　少女は思わず声をあげた。
　辺りを見渡すが、その異変に気がついたのは、自分だけのようだった。しかし、確かにみたのだ。それも脳に直接届いてくるかのような峻烈で、鮮やかな映像を。
　それは文字だった。それも王国の共通文字とは違う、今までみたこともない文字。しかも、何故だかチコリはその文字を読むことが出来た。まるで、生まれる前から自分の身体がその読み方を知っていたかのように。
　そこにはこう記されていたのだ。
「……ロゥーモ　ポテンツォ――？」
　その瞬間だった。チコリの身体全体から光が放たれ、地下の部屋が昼間のように明るくなった。チコリの身体を押さえつけていた警備兵がその光に弾かれ、地面に転がった。輝きを増すにつれて、光はチコリの両手に収束されていく。
「ま、まさか――」
　男爵が驚愕の声をあげる。その輝きは明らかに魔法によるものだった。
　魔法。
　それは太古より伝わり、選ばれし者だけが操ることのできる超常の力で、多くは血統により、その才能と技を受け継ぐ。しかし稀に、ごく普通の家系から、魔法の才を持つ者が生まれるという。
　だが、まさかこの少女が――！
　しかし、男爵の思考はそこで途切れた。チコリは我にかえると、その手を男爵に向けた。それと同時に、チコリの両手から閃光が放たれた。
　あまりの眩しさに目がくらんだ。地下室全体が揺れ、轟音が鳴り響く。光が消えた後、チコリが見たのは、魔法の軌跡が、土の壁を、抉るように焼け溶かした跡だった。それから、男爵の姿を探したが、どこにもいなかった。クロウ男爵は髪の毛の先すら残すことなく、この世から消滅したのだ。
　誰もが言葉を失い、呆気にとられていた。
――ドサッ
　と音がして、チコリが倒れこんだ。初めての魔法の反動とこれまでの疲労で、体に負担がきたのだ。もはや立っている元気もなかった。
　そんななか、チコリを押さえつけていた警備兵が立ち上がると、誰よりもはやく声をあげた。
「貴様――！」
　剣を抜くと、チコリ目掛けて、振りかぶった。

「お姉ちゃん！」
　アリスが声をあげた。奴隷達を掻き分けて飛び出すと、警備兵に体当たりをかました。警備兵は不意をつかれたのか、壁に頭をぶつけ、短い呻き声をあげて、気を失った。
「――お姉ちゃん！」
　アリスはチコリに駆け寄った。
「大丈夫？　お姉ちゃん。しっかりして！」
「だい……じょう……ぶ」
　チコリは少女を安心させるため、笑おうとしたが、顔の筋肉が強張って、上手くいかなかった。アリスは、反射的にした自分の行動が信じられないという表情をしていたが、緊張の糸が切れたのか、途端に顔を歪ませるとポロポロと泣き出した。
「お姉ちゃんの馬鹿！　何が私たちを助けるだ！　こんなにフラフラになって、お姉ちゃんは弱いくせに、無茶ばっかりじゃないか！　私たちを助けるなんて言うな！　口先だけで、出来もしないこと言うな！」
「そう……だね。……ごめんね」
　チコリは謝った。少女の涙がポツリ、ポツリと顔を叩いた。
「いい加減にしろ！」
　たちまち二人は正気を取り戻した他の警備兵たちによって、取り囲まれた。
「奴隷風情がよくも！」
　警備兵が、チコリに剣をつきつける。アリスはチコリを庇うように上から覆いかぶさった。
「どけ！　どかぬと、貴様共々斬るぞ！」
「どくもんか！」
　アリスが叫んだ。

「お姉ちゃんは私達を助けようとしてくれたんだ！　殺されたってどくもんか！」
　反抗的な少女の態度は、殺気だった警備兵たちの神経を逆撫でした。
「ならば、死ね――」「――く、くそぉッ！」
　その言葉に重なるように、声があがった。
　警備兵に、一人の奴隷の男が襲いかかったのだ。たちまち男は警備兵に、逆に組み敷かれる。
「何をする」
「くそ。こ、殺せ。殺すなら、さっさと殺せ！　俺にだって人間としての意地がある！」
　男は叫んだ。
「――ぐ、ぐおぉッ！」
　するとその言葉を聞いて、今度は別の奴隷がそれを助けるため、突っ込んだ。
　それが皮切りだった。奴隷達は次々に大挙して、警備兵達に飛び掛っていったのだ。
「くそっ。離せ！」
　警備兵達は慌てふためいて、事態の収拾にあたるも、奴隷達の勢いは止まらない。剣を突きつけられても、誰かが斬られても、命のある限り、突進を続ける。
「――うぅああぁっ！」
　誰もが声をあげていた。それは言葉にならない叫びだった。しかしそこには明確な意志があった。
　流されるままに、その身を委ねるばかりだった奴隷達が、今、自らの手で新たな流れを作り出し、その激流が、この場の全てを押し流そうとしていた。
　虐げられし者たちが、蛮勇を奮い、立ち上がったのだ。
「みんな！」
　アリスが涙交じりに言った。
　死すらも覚悟した特攻に、警備兵達は次第に劣勢に立たされていった。何しろ、警備兵隊は男爵が死んだという混乱の内にあり、しかも奴隷は命を捨てていた。
　警備兵を取り囲み、剣を奪い、鍵が回され、次々に枷が外されていった。
　地下室に咆哮が響き渡り、もはや奴隷達の勝利は明らかだった。
「行こう！　俺達は自由を勝ち取るんだ！」
　扉が開け放たれ、新鮮な空気が部屋に吹き込んだ。その風に向かって、奴隷達が押し寄せる。
「お姉ちゃん、私たちも行こう！」
　希望に目を輝かせた少女の言葉を、しかしチコリは最後まで聞くことはなかった。勝利を見届けて、気が抜けると同時に、体中が激しい疲労感に包まれ、意識が途切れ途切れになったからである。チコリは深い眠りに落ちていった……。

――夢をみた。
　暗闇のなか、何かに追いかけれるような焦燥感に駆られる、そんな夢だ。
　チコリは走り続ける。音もなくヒタヒタと忍び寄ってくる存在を確かに感じる。
　ふと背中に生暖かい感触を感じ、チコリは立ち止まる。
　振り返ると、そこには血まみれのクロウ男爵が立っていた。
「――ヒッ」
　チコリは短く悲鳴をあげる。
　自分の手を見ると、知らない間に血糊に濡れていた。
「ち、違うの！」
　叫び出さんばかりに、チコリは言った。
――何が違う？
　闇から侵食してきた影が、男爵の体を包み込んでいく。
「来ないで！」
　逃げ出そうとしたが、足が動かなかった。
――殺すつもりはなかったとでも？
　影は男爵の姿をぐずぐずに溶かし尽くすと、今度はチコリにまで侵食をはじめた。足元から、にじり登ってきて、チコリの胸元で五つに分かれ、鼻、舌、目、耳、胸元に取り憑き、渦を巻いた。
「やめて！」
　チコリは叫んだ。
　その言葉に反応するかのように、影がそれぞれに囁きはじめる。
『お前はあノ男を』
『殺シたぃと』
『願つタばずだ』
『そしデお前は』
『魔琺を使っタ』
　チコリは半狂乱になりながら、影に抵抗する。
『殺した』
「――嫌ッ」
『殺しタ』
「――やめて！」
『恐ろしい魔琺使い』
「――誰か！」
『罰を受けろ』
「――助けて」
『捧げろ』
　目から。
『捧げろ』

　耳から。
『その身を』
　鼻と口から。
『捧げろ』
　指先から。
――影の渦はチコリの身体に溶け込んで消えた。

第三章

　城下町にある宿屋の一室で、チコリは目を覚ました。
「お姉ちゃん！」
　それと同時に、アリスがチコリの胸元に飛び込んできた。
「私たち、助かったんだよ！」
　チコリは少女を身体から引き離すと、上半身を起こした。チコリはベッドに寝かされていた。
「どういうこと？　あれから、何が起きたの？」
「へっへー」
　アリスは笑った。
「その前に、ちょっと待ってて。お腹空いたでしょ？　今、ご飯もらってくるから」
　そう言って、アリスは立ち上がると、足早に部屋から出て行った。
（どういうことだろうか？）
　いまいち状況が把握しきれない。それに、思い出せないが、何か夢を見ていた気がする。それも悪夢を、だ。
――その時、一人の少年が部屋に入ってきた。
　チコリはその少年をみて、「あっ！」と、驚愕の声をあげた。
「――起きたようだね」
　その少年とは、ケサンだった。チコリはなおも驚きから冷めやらず、言葉も出ない。
「何が起こったかはあの少女から聞いたよ」
　そう言って、少年はつかつかとベッドの上のチコリに歩み寄ると、平手を振り上げた。
（殴られる――？）
　瞬間的にそう感じたチコリは、思わず目を閉じる。しかし、いつまでたっても衝撃はこない。
　恐る恐る瞳を開けると、少年の掌はチコリの頬の寸前で止まっていた。
「まったく、無茶もほどほどにしろ！　どれだけ自分の命を粗末にすれば気が済むんだ」
「……すみません」
「本当は君に会ったら、まず一発叩いてやろうと思っていたが、すでに十分まいっているようだし、この場はおさめておくよ」
　ケサンはそう言って、右手を下ろした。
「ケサン。でも、一体、どういうことなんですか？」
「慌てないでいい。心配しなくても、ちゃんと事情は話す。何しろ、体も衰弱しきっているし、顔色も悪い。まずは少し落ち着いたほうがいい」
　ケサンは椅子を手にとると、ベッドの前に座った。
　チコリは、はっと思い出して言った。
「そういえば、他のみんなは！」
「だから、そう興奮しないで。大丈夫。無事だよ。怪我人は出たが、幸いにも誰も死なずにすんだ。拷問にかけられた彼も、命には別状ないよ」
　死ぬ。

　その言葉は否が応にもチコリに男爵のことを思い起こさせた。ようやく人を殺したという実感がこみあげてきて、一瞬、チコリの目が虚ろになった。
「チコリ？」
「いえ……大丈夫です」
「とても大丈夫にはみえないよ」
「……大丈夫です」
　チコリは同じ言葉を繰り返すと、喉の奥から込み上げてきた色んな感情の塊をすんでのところで飲み込んだ。無理をしているのが明らかである。
「本当はこれも後で話そうと思っていたんだが……」
　ケサンは困ったように苦笑いを浮かべると、仕方ないといった風情で、
「……ロゥーモ　ポテンツォ」
　と、言った。チコリは反応しまいとしたが、顔が強張るのを感じた。
「君はそう唱えたそうだね」
「はい……」
「どこでその呪文を？」
「わかりません。あたし男爵を殺したいと願った時、みたこともないような文字が脳裏に浮かんでくるのを感じたんです。でも、あたし何故だかその文字を読むことができたんです。それで、あたし……、あたし！」
「やはり、そうか」
　ケサンが納得したように肯いた。

「え？」
「魔法使いの才は、血の記憶に受け継がれるという。君は、男爵に抱いた憎悪をきっかけにして、その記憶を呼び起こしたんだ」
「だとすれば、やはりあたしには魔法が？」
「ああ、そうだ」
　と、ケサンはいとも容易く肯定した。しかし、チコリには実感がない。ケサンは言う。
「そして、ロゥーモ　ポテンツォとは古代ルーン語で、“光よ敵を滅せよ”を意味していて、初等魔法使いが用いる魔法補助のための自己暗示式のひとつに過ぎない。本来なら、あれほどの高威力の魔法は撃てないはずなんだ。もはや失われた言葉になっているが、魔法使いとは元々“淀める者”といわれていた」
「ヨドメルモノ？」
「そう。雲が雨になり、川に流れ、海へ注ぎ込み、蒸発してまた雲になるように、この世の森羅万象には大いなる因果――流れがある。その因果律を支配する力をマナといい、魔法使いとは、マナの流れを淀めることで、力の揺らぎを生み出し、それを自らの理とする者のことだ。……あの地下の大気には男爵に殺された者たちの、怨念と呪詛が残留していて力の吹き溜まりになっていた。君が放った魔法は、それを受けて、死んでいった人々の思念に呼応したものだ。いわば、男爵は自らが殺した者たちの、残された想いによって、殺されたんだ。忘れろとは言わないが、君が悪いわけじゃない」
「でも、あたし！　あの瞬間、自分の怒りが爆発して、魔力が暴走するのを感じたんです」
「魔力なんてものはないよ」
　ケサンは笑った。
「それは君が大いなる流れに耐え切れず、逆に、流れに身を委ねてしまったからだよ。力を支配するのではなく、力に支配されてしまったんだ。それに男爵は死んで当然の男だった。君が気を病む必要はない」
　ケサンの言葉に仕方なくチコリは頷いた。しかし、だからといって気が楽になったわけではない。あの時チコリがクロウ男爵に確かな殺意を感じてことは紛れもない事実で、魔法はあくまでもそれを叶えた手段にしか過ぎず、自分が人を殺したことの言い訳にはしたくなかった。もっとも、それをこの心優しい少年に告げることも、またしなかったが。
「……さあ、あまり喋りすぎては体に障る。あとのことは、食事のあとにしよう」
　気を取り直すように、ケサンは言った。まだまだ聞きたいことはあったが、チコリはケサンの言葉に従うことにした。

　アリスが運んできた食事はミルク粥だった。
「慌てないで。ゆっくり食べないと、胃に負担がかかる」
　ケサンはそう言って、穏やかに笑った。
　陶製の食器からは、美味しそうな湯気が立ち昇っている。そういえば、ここ数日、何も食べていなかった。
（おかしいな？）

　チコリが不思議に思ったのは、それにもかかわらず、自分が空腹を感じていないことだった。それに風邪でもひいたのか、匂いもよくわからない。まるであの恐ろしい体験をしたために、恐怖がまだ自分の体の中に残っていて、全ての感覚が冷たくなってしまったかのようだ。
　少女から食器を受け取る。じわっとした温もりが手に伝わり、チコリは何故だかホッとした。
　チコリはスプーンでミルク粥を掬い上げると、口に運んだ。久しぶりの食事にもかかわらず、最初に感じたのは、異物感だった。金属を舌に当てたような無機的な感触がするだけで、味がよくわからない。
（やはり風邪でもひいたのだろうか）
「美味しい？」
　少女がチコリの顔を覗き込むように聞いてきた。
「うん。ありがとう」
　チコリは力なく笑った。それから、ケサンの方に目をやった。
「そろそろ何があったのか、お話していただけませんか？」
「……そうだね。大分落ち着いてきたようだしね。ああ。ゆっくり、そのままでいい。食べながら聞いてくれ」
「はい」
　チコリはそう言って、もう一口食べると、手元の皿に目を落とした。やはり香りも味もしない。
「どこから話そうか……。そうだな。まず森で君は別れたあとだが、僕は、迷っていたんだ。君を助けたいのは山々だったが、そのために危ない橋を渡るわけにはいかない。しかし、僕はある考えを思い付くと、その足で王都に向かった」
　チコリは話がみえてこず、目をパチクリさせた。
「そして、ライン王に内謁すると、ある勅令を下されるよう、進言したんだ」
「――勅令？」
「ビザン地区における奴隷の解放令だ」
「――ねえ？」
　と、ここでアリスが口を挟んだ。
「そんなことが出来たのなら、どうして王様はもっと早くその命令を出してくれなかったの？　そうすれば、もっと沢山の人が助かったんじゃないの？」
「仕方なかったんだ」
　ケサンは首を振った。
「いくら人道に背いていても、全ての事は男爵の領土内での出来事だ。王といえど、それに対して、みだらに干渉することは、後の禍根を残すことになる」
「それじゃあ、どうして今回に限って、ご決断されたのですか？」
　今度はチコリが尋ねた。ケサンはどこまで喋るべきか、迷っているようだったが、ややして口を開いた。
「僕にはやるべきことがあると言っただろう？　……詳しくは言えないが、僕はライン王から直

々に、ある密命を受けていて、そのおかげで、ライン王に格別の便宜を図って頂ける立場にあるんだ。もっとも王も男爵の所業には、以前から心を痛めてなさったから、難しい判断になるにもかかわらず、速やかにご決断なされたよ」

アリスには少し難しすぎたのか、よく分からないといった表情をしていたが、それでも「そうせざるを得なかった事情がある」ということは納得できたらしく、コクコクと首を縦に振った。

「話を戻そう。王より勅令をいただいた僕は、自身が勅使として、男爵のところに向かった。男爵の屋敷に着くと、騒ぎが起きていた。そこで僕は初めて、何が起きたのかを知ったんだ」

ようやくチコリは納得した。

しかし、それならば大人しくケサンを待っていれば、無駄な怪我人も出なかったことになる。

「どうやら——」
　と、チコリは言った。
「——あたしは余計なことをしてしまったようですね」
「いや」
　ケサンは首を振った。
「慙愧に耐えないことに、王家の威光も昔に比べれば、絶対的なものではなくなってきている。もし男爵が生きていれば、勅令に大人しく従ったかはわからない。結果はどうあれ、君は彼等と——」
　そう言って、視線をアリスに向けた。
「——その少女を救ったんだよ」
　その言葉を聞いて、チコリは少しだけホッとした。ケサンは自分の鼻の先をちょっと撫でた。
「それに、今回の勅令は、たとえ男爵がそれを素直に受け入れたとしても、形のうえでは王家に貸しを作ることになる。そうなれば、後々、どんな災禍を引き起こしたかわからない。正直な話、僕は男爵が死んでくれたことに、ほっとしている。——というのも、男爵はずっと前から、王家を裏切り、ある男と密かに交流していたことが、今回の件で発覚したんだ」
「ある男——？」
　問い直したチコリに、ケサンはペロリと唇を舐めた。
「詳しくは言えない」
　何故——？
　とは、チコリも尋ねなかった。ケサンがそう言うからには、王から受けたという密命に関連しているのではないかと思ったからだ。
「まあ、それからのことは、君も知っての通りだ。君が助けようとした者たちは、僕を待つことなく、自ら守るべきもののために、立ち上がっていた。男爵の配下はまだ残っていたが、クロウ男爵が亡くなり、王からの正式な命令が出たとなっては、もはや彼らに奴隷達の解放を拒む理由はなかったよ」
「それじゃあ——」
「そうだよ。私たち自由になったんだ」
　そう言って、アリスが顔中を無邪気な笑顔で一杯にした。思えば、チコリが今回の件で得たものといえば、それくらいのものだったが、たった、それだけのことが心から嬉しかった。
「さあ。もういいだろう。あとは体を休めて。君が回復次第、僕が二人を村まで送っていくよ」

　言いながら、ケサンはチコリが食事をあらかた食べ終わったことを確認すると、腰の袋から、小指の第一関節くらいの大きさの、黒い薬を取り出した。
「薬草を練りこんだ丸薬だ。疲れた体を回復させる効果がある。あとは、これを飲んで、もう一度お休み」
　チコリの手をとると、ケサンはその手の平に薬をのせた。
「でも、味は保証しないよ。凄く苦い薬なんだ」
　しかし、その言葉より早く、チコリはその丸薬を口の中に入れてしまっていた。

「はい――？」
「苦く……ないの？」
　ケサンは苦笑した。チコリは水を口に含むと、一気に薬を飲み込んだ。乳粥と同様、何の味もしなかった。
「え、ええ。……大丈夫みたいです」
　チコリは答えた。
「普通は臭いだけでも顔をしかめて、躊躇するもんなのに……」
　そんな風に言われて、チコリは困ったように、頬を掻いた。臭いがしたことすらも分からなかった。
「実は……風邪をひいたみたいで、さっきから味も臭いもよくわからないんです」
「えッ！　でも、相当、臭いも味も強烈なんだが……」
　そう言って、ケサンは言葉を失ったように、何事か思案していたが、手のひらを、チコリのおでこに当てた。
「どうやら熱はなさそうだ……」
　ケサンはそう独りごちると、今度は先刻の袋から、小瓶を取り出した。
　そして、蓋を開けると、チコリの目の前に差し出した。
「気付けだ！　嗅いでみて」
　言われたとおり、チコリは瓶に鼻先を近づけると、クンクンと匂いを嗅いだ。
「……どう？」
「よく……わかりません」
　物珍しげに、アリスが小瓶に寄ってきたが、顔を少し近づけただけで、「うわッ！」と、顔をしかめた。
「――キッツゥ」
「……チコリ。それは本当に風邪なのか？」
　ケサンは低い声で言った。その目には食い入るような、真剣な色があった。その気迫に押されて、チコリは返答が出来ない。さらにケサンは独りでブツブツと何事か呟くと、言った。
「アリス、悪いが薬屋に行って、カスの実を買ってきてくれ」
「……お姉ちゃん……相当悪いの？」
「いや、大丈夫。疲れてるだけだよ。少し興奮しているようだから、よく眠れるようにね」
　ケサンはそう言って、アリスに銅貨を渡した。
「でも薬屋がどこにあるのかなんて知らないよ？」
「それじゃあ探してくればいい。いいかい。絶対買ってきてくれよ」
　強い口調で、ケサンが言った。
「……わかった。行ってくる」
　不安気な表情をみせながらも、アリスは渋々部屋を出て行った。
「さて、と――」
　ケサンはチコリに鋭い視線を向けた。アリスにあてられたわけではないが、その重々しさにチ

コリまで不安になってきた。
「この町の薬屋は北地区のはずれに店を構えている。これでしばらくは帰ってこれないはずだ」
「どうして、そんなことを――？」
「チコリ。今から確認しておきたいことがあるんだ。僕の勘違いなら、それでいい。ただどうしてもハッキリさせておかなくてはならないことだ。チコリ、僕を信じてくれ。僕がこれからすることを。今から僕のなすがままに従って欲しいんだ」
　よくわからなかったが、チコリは「はい」と、首を縦に振った。
「よし。いい返事だ」

　そう言って、ケサンは部屋の隅にあったテーブルをチコリのベッドの前に運んだ。そして、自分の荷物から、いくつかの瓶をテーブルの上に並べ、ナイフと二枚の白い布を取り出した。それから、瓶をひとつ手に取ると、蓋を開け、中に入っていた液体を布に染み込ませて、丹念にナイフの刃を拭った。
「手を――」
　差し出されたケサンの手に、自分の手をのせる。
「痛いかもしれないけど、我慢して……」
　チコリの人差し指にナイフの刃を立てると、スッと引いた。
「痛っ！」
　ケサンはテーブルの中央にもう一枚の布を敷くと、その上にチコリの人差し指を導いた。傷痕から膨らんだ血が、指先を伝わって、雫となり垂れ落ちる。無垢の布の中央に、ぽっと赤い花が咲いた。
　その赤い一粒種の染みを取り囲むように、それぞれの瓶のなかの五色の粉を薄く盛っていく。等間隔で、円を描くように五箇所。
　全ての動作を完了すると、ケサンは再度ナイフを手に取った。
　切先をテーブルに向け、ナイフの柄を握った右手を左手で包み込む。
「――ふんっ！」
　気合一閃、振り下ろした。刃は真直ぐな軌跡を残して、血で出来た染みを貫き、テーブルに突き刺さる。
　まるで生き物がのたうつように、赤い染みは布にじわっと拡がると、翼の紋様が浮かび上がった。と、ボウッ――と青い炎が、刹那あがり、布からは、血の染みが、まるではじめからなかったかのように、消え失せていた。
「今のは――？」
「間違いない。くそッ、クツァルめ！　やられた！」
　ケサンが怒声をあげる。ビックリして、チコリは目を白黒させる。
「あっ！　いや、大声を出して悪かった」
　幾分、声音を抑えているが、その口調には苛立ちが隠せない。
　ケサンは言った。
「――すまない。どうやら君を巻き込んでしまったようだ。こうなったからには全てを話さなくてはならない」
　それから、ケサンは顔を手で覆うと、疲れたように深く溜息をついた。

「僕はクツァルという男を追っている」
　ケサンは椅子に再び腰を下ろすと、そんな風に語り出した。
「クツァル――？」
「王国一の魔法使いの名だ」
　チコリは小首を傾げた。それほどの魔法使いであれば、どこかで聞いたことがありそうなものだが、『クツァル』という名前は記憶になかったからだ。
「知らないのも無理はない」
　ケサンは言った。
「これは最近まで、王族のみが知る機密事項として扱われていたんだが、代々王家には、その影としてクル＝クァールと呼ばれる魔法使いの一族が仕えてきた。クツァルとは、その血統が受け継いできた襲名だ。クル＝クァールの暗躍は常に歴史の闇の中にあり、しかして、その力は、かつての四賢者すら凌ぐと云われていた」
　それからチラリと部屋の戸に目を向けた。アリスが戻ってくるには、まだしばらくかかりそうだ。
「……そのクツァルが王都から姿を消したのが、十年前。先王レオ様の御世のことだった。レオ王は、クツァルの出奔を王家への裏切りと考え、激怒なされたが、クツァルを連れ戻すことを画策しなかった。いや、できなかった。なにしろレオ王はクツァルを重用され、政敵の暗殺といった自身の暗部ともいえる仕事も任されていたため、今さらその存在を誰かに知られるわけにはいかなかったからだ。そして、その四年後、レオ王は崩御なされ、弟公であったライン王が戴冠された。こうしてクル＝クァールは、永遠に歴史の闇から闇へと葬り去られるはずだった」
　ケサンは手を膝の上で組むと、「しかし――」と、言葉を継いだ。
「しかし、今年の春のことだ。あまりにも近年天変地異が続くことに心を痛められたライン王が、呪い師を呼び、卦をたてさせた。すると、呪い師はこの異変が世界の崩壊を意味していること。そして、これらが『天災』ではなく、『人災』である、と占ったんだ。『これが人災であるなら、誰の仕業というのか？』――ライン王が色をなすと、呪い師はこんな紋様を書いた」
　そう言って、ケサンは布に瓶のインクをのせたナイフの切っ先で、ある形を描いた。
「これって――？」
　チコリには見覚えがあった。それは先ほど血のシミが浮かび上がらせた、あの翼の紋様と同じものであった。
「そう。そして、これこそがクル＝クァールの紋様――つまり世界の崩壊を引き起こしているのは、クツァルだったんだ」
「では、近年頻発している、全ての災厄がクツァルという魔法使いのせいだと仰るのですか？」
「そうだ」
　ケサンは頷いた。
「魔法使いとは流れを淀める者のことだと言っただろう。クツァルはこの地上のあらゆる流れを淀め、因果律を乱し、世界のバランスを崩壊させようとしているんだ」
「そんな……」
「ライン王は紋様をみて、すぐにクツァルの仕業だと気付いた。先王の実弟であるライン王はク

ル＝クァールとクツァルをご存知だったのだ。ライン王は元老議会を開き、事態をどうすべきか協議した。そして、クツァルを討つことを決め、その討手として、僕が選ばれたんだ」
　チコリはハッと思い出したことがあった。
「もしかして――」
　チコリは言った。
「クロウ男爵と繋がっていたある男というのも……？」
「そう。クツァルのことだ」
　言いながら、ケサンは少女の頭の回転が早いことに驚嘆した。
「男爵の『人体実験』は穢身を得ることが目的だった……」
「えみ？」
「ああ。古い黒魔術に伝わる邪悪な法だ。光の差さない密室に数十人の人間を監禁し、食事もあたえず数ヶ月間放置する。すると、閉じ込められた人々は次第に精神に失調をきたすようになり、飢えと渇きから、お互いの肉と血を喰らうため殺し合いを始めるんだ。そうして生き残った最後の一人にはあらゆる負の情念が凝縮されるようになり、その血肉は穢身と呼ばれる」
「そんな！　何故そんなことを――？」
「いくらクツァルが強大な力を持った魔法使いだとしても、世界そのものを変革する魔法となると、大規模な術式が必要になる。つまりは魔方陣や呪文、あるいは地脈の利――そして生贄だよ」
　チコリの瞳がキュッと鋭くなった。

「じゃあ……？」
「ああ、そうだ。穢身は古くから最良の生贄になるといわれている。クル＝クァールには『時の呪法』といわれる肉体と精神を永遠のものとする魔法が伝わると聞いた。そんなものが本当にあるかどうかは知らないが、大方そんなものを見返りに協力を求められたのだろう。クツァルにいいように扱われていたとは知らずにクロウ男爵も馬鹿な男だよ」
　ようやく、これでチコリのなかで話の流れが繋がった。しかし、まだ解からないことがある。何故、そんな話を自分にしたかだ。
　ケサンはふっと大きく息を吐くと、口を開いた。
「――君のその体の異変はクツァルの呪いによるものだ」
「えッ！」
　チコリは思わず声をあげた。
「クツァルは新しく魔法の力に目覚めた君が己の敵となることを恐れたんだ。そして先手を打って、君に呪いをかけた。その呪いは君の五感を少しずつ奪っていき、ついには死に至らしめる――」
　ケサンはチコリの鼻をまず右手で指差し、それから同じように口を指した。
「そして、君はすでに嗅覚と味覚を失っている」
「どうすれば――？」
　チコリは尋ねた。
「残念ながら、その呪いの解き方を知っているのは、クツァルだけだ」
「あたしも――」
　と、チコリは言った。
「あたしも一緒に連れて行ってください。あたしに魔法の力があるというのなら、きっとお役にたてるはずです。それにあたし、自分のことだから、自分で決着をつけたいんです」
「そのつもりだ」
　ケサンは頷いた。クツァルの元へ少女を連れて行くのは、危険ではあったが、呪いをかけられた少女を自分の目の届かない場所に置いていくのは、もっと不安だった。それに、一度決めたら、テコでも動かないのが、この少女だと、ケサンは嫌というほど知っている。
「ただいま」
　その時、扉が開いて、ちょうどアリスが帰ってきた。
「なかなか見つからなくて、疲れちゃった。はい。これカスの実とお釣り」
「ありがとう」
　ケサンはそれを受け取ると、チコリに、
「それじゃあ、もう少し休んでおいてくれ」
　と言ってから、耳元で言った。
「これから、どこに向かうかは後で教えるよ」
　チコリは目で「わかった」と返事をした。
「あれ、カスの実はどうしたの？」
「ごめん、ごめん。大分具合が良くなったみたいだから、もういいんだ。さあ、僕たちは邪魔に

ならないよう、外にいよう」
「えー、あんなに探したのに。ひどいや」
「アハハ。悪い、悪い」
　そんなことを喋りながら、二人は部屋を出て行った。
　色んな話を聞きすぎて、頭が混乱していたが、それでもチコリは静かに目を閉じると、しばし眠った。
　今度は、夢は見なかった。

　アリスとは城下町で別れた。
　当初は村まで送っていくとケサンは言っていたが、「呪いがかけられた今、一刻もはやく出発しなければ」という主張により、ここで別れることになった。
　奴隷の男の一人がアリスの村を通りがかるということで、アリスのことはその男に託した。
「あんた、若いけど大したもんだよ。あやうく、あんたのせいで酷い目にあうかもしれないとこだったが、こうして生きて故郷の土が踏めるのも、あんたのおかげだ」
　男はそう言って、豪快に笑った。
「お姉ちゃん、また会えるといいね」
　アリスが言った。
「なあに、生きていりゃ、また会えることもあるさ」
　男はアリスの頭をぽんぽんと叩いた。
（生きていればか……）
　チコリは決心を新たにすると、
「そうだね」
　と、声を張り上げた。男はちょっとギョっとした様子だったが、何が可笑しいのか、声をあげて笑った。
　アリス達と別れたあと、ケサンとチコリは町で馬を一頭買い求め、荷物をまとめると、町を出発した。
　チコリは馬に乗るのはこれが初めてだったが、日が傾く頃には、すっかり馬上にも慣れていた。
「すごい。チコリは勘がいいね」
　ケサンはそう言って、チコリを誉めると、楽しそうに笑った。しかし、それにはどこか重苦しい空気を、少しでも明るくしようという意図が感じられた。
　これから待ち受ける困難を思えば、気持が沈みがちになるのは無理もないことだった。
　あれから、チコリが起きると、ケサンは地図を広げて、向かうべき場所を示した。
「ここが今いる町だ。僕たちはこれから東北に向かい、イリ山脈を越えて、その向こう側にある砂漠を目指す。男爵の侍従から得た情報によると、クツァルはこの砂漠にあるオアシス都市バルトラを根拠地としているらしい」
　旅に出て、最初の夜は、途中にあった村で、民家の納屋を借りて、過ごした。
　二日目。
　馬にも慣れ、順調に道のりを消化した。
　道すがら、ケサンはこれから向かうイリ山脈について、こんな話をした。
　イリ山脈にはアイライ山という鉱山があり、多量の銀とわずかに胴が採れ、クロウ男爵の経済基盤となっていた。男爵が奴隷を次から次に買い集めることが出来たのも、このアイライ山が生み出す豊富な鉱物資源を背景としていた。
　もっとも十数年前まで、このイリ山脈には、古くから、山の民と呼ばれるハン族が住みついていた。山の民はその大半が、王威に教化されることなく、独自の文化を守り続けており、王国にとって憎むべき夷敵といえた。

　クロウ男爵は王の勅令を受けて、ハン族を討ち滅ぼし、その功によって、アイライ山における鉱業権を許されたのだ。
「王様も罪なことをされたもんですね」
　チコリが皮肉交じりに言うと、ケサンは、参ったなという顔をしていた。
　ケサンはチコリの三つ年上であり、騎士という身分よりも、同年代の気安さがあった。
　その日は、イリ山脈の麓の村で、体を休めた。
　そして、翌日。
　二人は朝から山越えに差し掛かった。イリ山脈を超えるルートは途中まで鉱物資源を運ぶための交易路と重なっており、人の行き交いが激しい。遥か遠くから全体像を眺めると、山の高さはそれほどではないものの、いくつもの頂きが重なって、波のような稜線を描いている。
　ここからは馬に乗って進むわけにはいかない。ケサンとチコリは馬に荷物を乗せ、手綱を曳きながら山を登った。
　昨日と違い、ケサンはずっと押し黙っている。
　さすがに疲れが出始めたのかと思ったが、どうやらそうではないらしい。
　山越えを始めて、最初の休憩地で、ケサンは言った。
「どうやら、つけられているらしい」
「えっ！」
　とチコリは声をあげた。途端に緊張が走った。それからチコリは「誰に？」と、質問を投げかけた。ケサンは首を振った。
「わからない。気配からして、おそらく五人前後だろう。今朝からずっと僕らを追ってきている」
「もしかして、クツァルの刺客でしょうか？」
　チコリは尋ねた。
「それもわからない。ただ、自分たちの気配を隠そうとしないところをみると、僕たちが精神的に疲労するのを狙っているのか、人目につくことを避けるつもりなのか、あるいはその両方か……」

「どうしましょうか？」
　ケサンの言うことが確かなら、果たして、このまま先を急いでいいものか。
「なに。向こうがその気なら、数に劣るこちらとしても都合がいいんだ。おいで」
　そう言って、チコリを招き寄せると、耳元で作戦を囁いた。
「いいね」
　ケサンが念を押すと、チコリはうなづいた。
　それから、二人は登り坂の途中で、脇道に逸れると、傾斜に沿って、縫うように進んだ。
　アイライ山に差し掛かった。ケサンが昨日話してくれた通り、山全体が鉱山になっており、至る所に坑道が掘られている。
「この道なんか、よさそうだ」
　ケサンは行きがかった順に、四つ目の坑道の前で立ち止まると、言った。
　それから二人は荷物を自分たちで背負い、馬を放って、坑道の中に入っていった。
　ケサンがランプに火を灯すと、はや廃坑となっているのか、天井を支える木組みが古くなって、ところどころ腐っているのがわかる。
　さらに奥に進んでいくと道幅がぐんと狭くなってくる。と、入口の方から集団の足音が聞こえた。
「追って来た――！」
　ケサンが声を抑えて言った。
「アイオイ山の坑道はそれ自体がアリの巣のように入り組んでいて、入口と出口が複雑に繋がっているんだ。僕らをここで見失わないためには、どんなに危険でも、奴等は追ってくるしかない」
「でも、馬を放してきて、大丈夫だったんでしょうか？」
「なに。僕の愛馬は賢いんだ。たとえ持ち場を離れても、指笛が聞こえれば、すぐに僕のところに戻ってくるよ」
　ここからの山越えは騎乗には適さない。そのため、荷物を運ぶための馬が一頭いれば、大丈夫だとケサンは言った。
　ケサンはランプを掲げると、周りを照らした。壁や地面に遮蔽物はなく、道の広さも二人が並んで、ようやく通れるかどうかである。
「よし。ここらへんでいいだろう」
　そう言って、ケサンはランプの火を消し、荷物と一緒に少女に預けると、剣を抜いた。
　ケサンの作戦のひとつは追跡者達をこの場所に誘い込むことであった。
　やがて、追跡者達の足音が高くなってきた。
　坑道の中は、わずかな物音すら響く。追跡者たちはもはや声を潜めることすらしない。
「おい。いくぞ！」
　男たちの声が聞こえてくる。チコリはクッと息をとめた。
　闇が少しづつ薄くなり、ぽうっとした光源が通路の先から、近づいてくる。
　追跡者たちが姿を現した。
「おい！　あそこ！」

　男が声をあげた即座に、剣を抜いたケサンが躍りかかった。瞬く間に先頭にいた男を斬り伏せる。
「追えッ！」
　ケサンはひとまず闇の中に後退する。男たちは慌てて追いかけようとしたが、狭い通路では重なり合っては進めない。自然、一人ずつケサンにかかっていくことになる。
　少年は突き進んでくる男たちを冷静に、かつ確実に対処した。太陽の光も届かぬ洞窟の奥深く、光源は男たちのランプだけ。そのため、男たちからは、ともすれば、闇の中から突如として、白刃が襲いかかってくることになる。
　これも、やはりケサンの作戦のうちであった。
　しかし追跡者もまた熟練の戦士であった。罠に嵌められ、自分たちに不利な状況を知ってなお退こうとしないのは、彼らの意地、そして一瞬の勝機に賭けるためであった。
（残り二人――）
　四人目の男が地に伏せると同時に、ケサンは素早く敵の残りを確認する。
　すぐさま次の男が大上段に構えて体ごと突っ込んできた。剣を払い避けながら、返す刀で男を斬り捨てる。
（あと一人――）
　と、その背中の陰に重なるように距離を詰めてきていた最後の男が、突如として躍りあがった。
――しまった！
　不意の刃は咄嗟に差し出したケサンの剣を払い飛ばした。坑道に金属音が響き、弾き飛ばされた剣が地面に転がる。男は剣を振り上げた。
（避けられない！）
　まさしく、その時であった。
　ケサンの背後で光が煌めいた。
　一閃した光が男の剣を貫く。あまりの眩さに目がくらみながらも、男が勢いのままに振り下ろした剣は、しかし、ケサンの体に届くことはなかった。剣の刀身は、先刻の光閃によって半ばから熔け折れ失せていた。
　突然の出来事に、男は事態が把握出来ない。手応えがない剣を握る手に再び意思を伝えるには、わずかな時間がかかった。
　もし、ここが陽の下であれば、少年の後ろで、魔法を撃った姿勢のまま息を荒げるチコリの姿が、男の目にもハッキリとみえたであろう。
　男が呆然と自失にくれたのは、時間にすればほんの数瞬のことであったが、それでケサンには充分だった。落した剣に飛び込むと拾い上げ、我を取り戻した男が短くなった剣で再びケサンに斬りかかるより早く、その切っ先を男の喉元に突きつけた。
「――動くな！」
　勝負は決した。

「武器を捨てろ」
　男の手から剣が零れ落ちた。
「誰の差し金だ？」
　男は答えない。ケサンは背中に向って声をあげた。
「チコリ。悪いが、ランプを、こっちに持ってきてくれ」
　言われて、チコリは慌ててランプに灯りをともすと、ケサンの側に歩み寄った。
　光が男の顔を照らし出す。チコリは見覚えのある、その男の顔に「あっ――！」と、声をあげた。
「あなたは……」
　それはチコリが奴隷馬車から逃げ出したとき、彼女を捕らえたあの追手の男だった。
「どうして――？」
　ケサンは事情がよく呑み込めていないらしく、不思議そうに聞いた。
「……知ってるの？」
「はい。クロウ男爵の配下の者です」
　チコリは答えた。
　男は喉奥で笑うと、言った。
「こんな小娘とガキにやられるとは俺達もヤキが回ったものだな」
「ライン王の勅令により、彼女は正式に解放されている。それを知っての狼藉か？」
「ああ。もちろんだ」
「なら、何故――」
　今度は声に出して、男は笑った。
「何故？　どうしてそんなことを聞く必要がある。貴様たちは男爵様を殺した。男爵様の配下である俺達が貴様たちをつけ狙うのに、どうして他に理由がいる？」
　チコリは息を呑んだ。
「俺達はその娘を捕らえた後、男爵様に送り届けてから、お前を追った。しかし、お前の足跡は王都に続いていた。俺たちは男爵様の次なる指示を仰ぐため、城へ舞い戻った。そこで俺達はケサンと名乗る男が王からの勅令書を携え、奴隷の解放を宣言したこと。それによって奴隷たちによる暴動が起こり、男爵様が殺されたことを知った」
「それで復讐を企んだというわけか」
　奴隷たちの暴動が起ったのは、勅令が下される前である。どうやら話の食い違いがあるようだが、話の腰をおらないよう、ケサンは尋ねた。
　ケサンの言葉に男は「そうだ」と、言った。
「でも、何故――？」
　チコリは叫んだ。
「男爵が何をしていたか、あなたは知っているの！」
「小娘、その小賢しい口を閉じろ！」
　と、男は目だけでチコリを睨みつけた。
「男爵様は確かに恐ろしいお方だ。しかし、その冷酷さは公平な判断力の証左であり、その暴虐

は綱紀の乱れを許さぬ強い意志力をお持ちだからだ。それが証拠に男爵様が治められている支配地はかつてない隆盛と活気に溢れている。男爵様は暴君ではあれど、稀にみるドゥーズーをお持ちであった」
「まさか——」
　その言葉にケサンが目を見開いて、男の顔をみつめた。
　チコリは後で聞き、それを知ったが、『ドゥーズー』とは山の民に伝わる言葉で、『王者の資質』というほどの意味を持つ。
「そうだ。——俺達はハン族の生き残りだ」
　男は言った。
「ハン族！　ハン族って、あの男爵に滅ぼされたという……」
「ああ」
　ケサンが頷いた。
「しかし、ハン族であれば、なおさらだ。どうして男爵に忠誠を誓う？」
「俺達はお前たちが戴く王によって、国を追われ、山に移り住んだ古き血族の末裔だ。俺達は自らが王と認めたお方でなければ、たとえ命を失うことになっても従いはしない。それが俺達の誇りだからだ。かつて俺達ハン族も幾度となくお前たちの王によって侵攻を受けたが、その度に屈することなく、一族をあげて、ことごとくこれを打ち破った」
　チコリはケサンの横顔を横目でみやった。心なしか、顔に緊張感が滲み出ている。
「だが、男爵様が王レオの命により兵を挙げると、その見事な用兵術により、ハン族は壊滅的な打撃を受けた。俺達生き残った男達と一族は砦に籠り、このうえは一兵残らず屍となっても、徹底抗戦を続けることを決した。しかし、その夜、男爵様からの使者が単身、俺達の砦を訪れた。驚いたことにその使者とは男爵様御自身であった」
「まさか！」
　ケサンは驚愕の声をあげた。
「そう。お前らには信じられないだろう。戦に勝つためには、どんな卑怯な手でも使うのがお前たちの倣いだ。ましてや、大将自らが、敵陣に乗り込むなど、殺されても文句は言えない。そして、もし俺達がそうしていたならば、不利な戦況も一変していただろう。しかしハン族は決してそんな真似はしない。戦場において勇者を打ち破ってこそ、戦士の誇りだからだ。男爵様はそれを知っていたからこそ、護衛もなく御自らが使者として俺達の元に来られたのだ。俺達のことを誰よりも理解してくれていたのは、他あろう敵である男爵様御自身だったのだ」
　男はわなわなと奮えた。その時のことを思い出して、感激に打ち震えているのだ。

「男爵様は仰られた。『君達の勇敢なことは知っている。私が降伏を申し出ても決してそれを受けることはないだろう。しかし、そうなれば私は王の命により最後の攻勢を掛けることになる。君達は屈強な勇者揃いだが、もはやこの状況では、戦局を覆すことは敵うまい。そして、もしそうなれば、兵士のみならず、一族全てが累を受け、君達はその尊い血族を絶やすことになる。私にはそれが悔やまれてならないのだ。どうだろう。今から明日の太陽が沈むまでのあいだ、君達を包囲する軍を一時的に撤兵させる。そのあいだ、君達がどこに逃れようと、私の与り知らぬことだ。王の威光もこの山を超えた土地には及ばぬ。砂漠を越えて安息の地を見出せば、生きて生きられぬものではない』――その申し出は俺達にとって僥倖ともいえた。男爵様が自陣に戻られたあと、俺達は話し合い、俺を含めた精鋭の男たちを残して、他の一族の者はみな新天地を求め、山を降りた」
「何故、お前らも逃げなかった？」
　ケサンが尋ねると、男は色をなした。
「俺達には守るべきものがある。血を絶やさぬため、一族の多くが落ちのびはしたが、干戈を交えることを恐れたわけではない！　精鋭が死兵となりて、乾坤一擲の戦場に奮迅してこそ、生き延びたハン族の名誉は守られる！」
　男の激にケサンは口をつぐんだ。男はそれから気を静めると、話を続けた。
「そして翌夕。攻め寄せる男爵様の旗下に、奮戦むなしく半数は死に、半数は捕らえられた。俺達は男爵様の前にひきだされた。このうえは生き恥を晒すことなく、名誉ある死を欲すると、俺達は訴えた。しかし、男爵様はそれを許されなかった。『死ぬだけならば、犬畜生にもできる。生き恥を雪ぐものは功なき死にはない。どうだろう、私に仕えてみないか。君達の技を私のために使って欲しい』――と。それでもなお、俺達が戦士としての死を望むと、男爵様は俺達の縄を解き、言った。『ならばどこへとなく消え失せて、勝手に死ぬなり何なりすればいい。武器をもって、敵を打ち倒すのも戦なら、どんな試練があろうと、耐え抜き、生き抜くことも、また戦だ。私が君たちに礼儀を払ったのは、君たちが、過酷な運命にも抗うことを恐れない本当の戦士だったからだ。もはや牙を抜かれた負け犬に死場所を与えてやるほど、私は優しくはない。さあ、消えろ！　そして二度と私の前にその姿を現すな！』……その言葉に俺たちの意思は決した。俺達の負けだった。戦においても、その器においても、俺達は敵わぬことを知り、男爵様のために、忠誠を誓うことに決めたのだ」
　ケサンもチコリも、もう一言も喋らなかった。
「それがまさか俺達のいない間に、こんなことになろうとは。惜しむらくは、男爵様がお亡くなりになられ、『反逆者』は俺達になってしまったことだ。そうでなくば、こんな場所に誘い込まれることもなく、お前達など撫で殺しにしてくれたものを……」
　男はそれが悔しくて堪らぬといった風にギリギリと歯噛みした。ケサンは言葉を失っていたが、その意味にはっと気づくと、叫んだ。
「――やめろ！」
　しかし、それは既に遅かった。男は口から血を吐きだすと、糸が切れたように死んだ。
「――ッ！」
「毒だ……」

　愕然とするチコリにケサンは言った。
「奴ら、奥歯に毒を仕込んでいたんだ」
　それから、剣の血糊を拭き取ると、鞘に収めた。チコリは呆然としたまま動けないでいた。
「……どうしたの？」
「あたし……自分のしたことがわからなくなっているんです。果たして、男爵を殺したのが正しかったことなのか……」
「何言ってるんだ！　あれは仕方のないことだったじゃないか！」
「でも……」
「いいかい。今の話に絆されたんだろうけど、君は男爵が何をしてきたか知っているだろう？ハン族を助けたのだって、自分の部下に彼等を引き入れる意図があってのことだったに決まっている！」
「いえ、そうじゃないんです。あたしずっとクロウ男爵は非道なだけの人間だと思っていたんです。だからといて、そんな人間は死んでもいいなんて言う気はありませんが、男爵が非道な人間だったことに、どこかで救われていたことも確かなんです」
　ケサンは口を開きかけたが、掛けるべき言葉が見つからず、沈黙した。
　チコリはさらに言う。
「あたし自分が殺したという事実を軽く考えていたんです。男爵は悪い人だったから死んでも仕方ないって、口にしないだけで、そう思っていたんです。あたし……何も背負う覚悟もなくて――」
「チコリ！」
　言葉を遮るように、ケサンは言った。
「チコリ、僕だって人を殺したことはある。今だって、六人の男を殺した」
「あっ……！」
　チコリは息を呑んだ。
　そうなのである。罪に慄いて悲嘆にくれるのはいいが、直接手を下していないだけで、自分のために既に何人もの人間が死んでいるのである。そして、そのうちの多くは目の前の優しい少年の手によるものだ。
「だが、それは仕方なかった。そうしなければ自分が殺されていたというのもあるが、何よりチコリ。君を守るためだ。チコリ。人間は神じゃない。ただ生きてるだけで誰かを傷つけることもあれば、時には過ちを犯すこともある。でも、大事なのは何をしたかではなく、何のためにそれをしたかだ。譲れないものがあれば、争いが避けられないこともある。だからといって、本当に守りたいもののためには、それを恐れるわけにはいかないんだ」
　ケサンはじっとチコリの目をみつめた。
「チコリ。君は馬車の人たちを助けたかったんだろう。その気持には今でも嘘はないんだろう？」
「はい」
　チコリは首を縦に振った。

「なら、君はしっかりしなくては駄目だよ。悔むのは構わない。だが、立ち止まっちゃいけない。今さら君が歩みを止めたところで、失われた命はもう戻ってこない。自分がしたことを受け止めてなお、前に進まなくては。神ならざる人間に出来ることなんて、それくらいしかないんだ。それが本当の意味での背負うってことだ」
　チコリは俯いた。ケサンの言う通りだった。ここで、罪の意識に押し潰されたところで、何にもならない。それくらいなら、最初から逃げればよかったのだ。自分で決めたのだ。しっかりしなくては。
「……っ！」
「どうしたの？」
　ケサンが不思議そうな顔をした。
「あ……、ありがとうございます。……少し、落ち着きました」
――ごめんなさい。
　そう言いかけて、チコリはお礼の言葉を選んだ。もう二度と不甲斐ない自分を繰り返さないためだ。
「さあ、もう行こう。ランプを貸して。僕が先に行く」
　ケサンが差し出した手に、ランプを渡そうとして、手が滑った。ランプを落としてしまったのだ。途端に、視界が暗闇に包まれる。
「あ、ごめんなさい！」
「いや、いいよ」
「でも、火が消えてしまって……」
　その言葉を聞いて、ケサンは「――えッ！」と、声をあげた。
「今、点け直しますね」
　チコリはランプを拾おうとしゃがみこんだ。
「……チコリ」
「ちょっと……待っててください」
「チコリ。いいから、チコリ！」
　ケサンはチコリを立ち上がらせると、その両肩に手を置いた。
「どうしたんですか？」
「いいかい、チコリ。落ち着いて。落ち着いて、聞いて欲しい――」
　チコリは小首を傾げる。ケサンは言った。
「ランプは……ついている」
　最初は何を言っているのか、わからなかった。しばらくして、その言葉が意味するものが、おぼろげながら掴めてきた時、ケサンは繰り返した。
「――チコリ。火は消えていない。今もまだ明りはついているんだ」
　途端に頭がクラっとして、立眩みを覚えた。ケサンが体を支えてくれなければ、チコリは倒れていただろう。
　クツァルの呪いは嗅覚、味覚に続き、ついにはチコリの視覚までも奪ったのだった。

　クツァルの呪いは確実にチコリの身体を蝕みつつあった。
　ケサンとチコリの二人はハン族の追撃を打ち払ったのち、山ふもとの村に戻ると、その日は、そこで宿をとることにした。ケサンはチコリを励まそうとしたが、ショックが大きいのか、ほとんど何も喋ろうとしない。
　宿屋の主人が部屋まで食事を運んできて、遅い夕食をとったあと、ようやくチコリは口を開いた。
「ケサン……」
「なに？」
「あたし、このまま一緒に行っていいものでしょうか」
　どこかで少女がそう言い出す気がしていたのだろう。ケサンは大きく息を吐いた。
「足手まといになる。と、でも言うのかい？」
「ええ」
　チコリは自分を置いて行けと言うつもりなのだ。しかし、ケサンは首をふった。
「足手まといだなんてことはないよ。今日だって君のおかげで助けられたじゃないか」
「でも、その時と今では状況が違います」
　目が見えなくなった今、一人ではまともに歩くこともかなわない。こんな自分を連れて行っては、邪魔にしかならないだろう。
「何も違いはしないよ。君は呪いを解くため、僕は世界の崩壊を防ぐため、クツァルを倒しに行くんだ」
「そういう意味で言っているんじゃありません！」
　チコリはちょっと声を荒げた。もちろん、そんなことはケサンもわかっていたが、それでも少女の言葉を素直に聞くわけにはいかない。奇しくも「今は状況が違う」と言った少女の言葉はまさにその通りで、今日、ハン族の襲撃があったことから考えて、また男爵の残党がチコリをつけ狙うことがあるかもしれない。目の見えないチコリを一人残すわけにはいかなかった。
「君は僕に――」
　とケサンは言う。
「再び、君のことを見捨てろと言うのかい？」
「そんな――！」
「つもりじゃないとでも？　君が言ってるのはそういうことだ。あの時、君は僕と一緒に行きたいと自分で決めた。そして僕も君を連れて行くことを承知した。普通の旅じゃないんだ。そこに困難がつきまとうのは最初から半ば予想されていたことだ。こんなことくらいで音を上げるくらいなら、最初から来るべきじゃなかったし、置いてくるべきだった。違うかい？」
「今はそのほうがよかったと……」
「まだ言うのか！　いいかい、君は今クツァルの呪いで弱気になっているんだ。だが、そんなことでは奴の思う壺だ。クツァルに立ち向かうには何よりも強い意志が必要なんだ」
　怒気を含んだケサンの口調に、少女はしゅんと頭をたれた。

「それに、なにも意地だけでこんなことを言うんじゃない。僕は君の魔法を、君が思う以上に頼りにしているんだ」
「本当に？」
「ああ。嘘じゃない。君の魔法は充分戦力になる」
　事実、驚いたことに、今日チコリが放った魔法は、単純な攻撃力では歴代の魔法でも三本の指に入るといわれる「アウストゥの太陽」に酷似していた。もちろん錬度も威力も「アウストゥの太陽」には遠く及ばないが、ほとんど何の訓練も受けていない魔法使いが、それに近い魔法を使ったというだけでも、その才能の片鱗がうかがえる。
　クツァルに脅威を与えるだけのものが、この魔法を覚えたばかりの少女にはあるのだ。
（――ただし、）
　チコリに告げはしなかったが、少女が嗅覚と味覚を失ったのは、男爵の屋敷で魔法を使ったあと。そして視覚を失ったのは、またしても坑道で魔法を使ったあとと、いずれも魔法を使用後に、五感を失っている。つまり、クツァルの呪いは、魔法に感応するタイプである可能性が高い。
　だとしたら、チコリにこれ以上、魔法を使わせるのは得策ではないのかもしれない。
「……どうしたんですか？」
「いや、何でもない」
　視覚がないだけあって、わずかな沈黙に過敏な反応をみせたチコリにケサンは首を振った。
「まあ、今はまだショックを引きずっているうえ、疲れているから、悲観的な考えしかできないんだろう。さあ、今日はもうお休み。明日は少し遅めに発つことにしよう」
「……ひとつだけ」
「なんだい？」
「ひとつだけ約束してください。それでもあたしが足手まといになったと感じたときは、きっとあたしを見捨ててください！」
　いまや光を失った少女の瞳は真剣そのものでケサンを見据えていた。
「わかった」
　ケサンは言った。と、いうよりも、少女の気迫に言わされたといったほうが正しいだろう。
「――わかった。必ず。約束するよ」
　それを聞いて、少女はようやくうなづいた。

次の日、二人は再びイリ山脈越えにかかった。それは視力を失ったチコリにとって、困難な行程だった。
ケサンはチコリを励ましながら、時にはチコリの手を引き、時には馬の背にのせ、歩みをすすめる。
ようやく、二人がイリ山脈を越えたのは三日後のことだった。
ここから先は砂漠を進むことになる。
ケサンは砂漠の手前にある街、ミシュレンで砂漠を渡る準備にとりかかった。
砂漠を渡るには、砂の海に点在するオアシスとオアシスを繋ぐ道を通らねばならない。そして、その道を正確に知っているのは、砂漠の民だけである。
ケサンは案内人となる男を金で雇った。パルサスという四十過ぎの男で、その生涯が短い砂漠の民とっては、老年にさしかかった年齢といえた。それだけに砂の世界で危険を避ける経験と能力には信頼がおける。
パルサスは王国の共通語は片言しか喋れないのが難点だったが、ケサンは砂漠の民の言葉にも精通していたため、とりあえず支障はなさそうに思えた。
「バルトラに辿りつくまでには八回太陽が沈むことになる」
それがパルサスの見立てであった。だとすれば、一度街を出てしまえば、目的を達するまで戻ってくることはないだろう。砂漠の旅は初めてなだけに、パルサスの協力のもと準備にはじっくりと時間をかけた。
ラクダを入手し、水や食料を買い込む。また砂漠では、昼は溶けるほどに暑く、夜は肌を刺すほどに寒くなる。砂漠の民が用いる麻の衣服や、野営に便利な移動式の天幕も用意した。夜になると、ケサンは地図をもとに、パルサスとおおまかな計画を話し合う。
そうした準備で、出発できるようになるまで丸三日かかった。
そして、いよいよ、砂漠の旅が始まった。
それはケサンもチコリも覚悟はしていたものの、その覚悟すら毛先ほどの役にも立たない困難な道のりであった。
一面に岩と砂ばかりが続く道は目印となるべきものもなく、パルサスとはぐれれば、すぐにも道に迷ってしまうだろう。さらには風が強く吹けば、砂嵐で一寸先の見通しさえ利かなくなる。
昼の暑さはじりじりと肌を焼き、夜の寒さは疲れきった体を凍らせた。水を確保するのも容易ではない。まさに命がけの旅であった。
だが、パルサスは支払った代金に見合うだけの働きをみせたし、チコリも目が見えないながら決して弱音は吐かなかった。
それでも七日目が過ぎる頃、計画の遅れが顕著になってきた。当初の予定では、明日にもバルトラに着く見通しであったが、このペースだとあと三日はかかるだろう。パルサスの見通しが甘かったというよりも、それだけ砂漠の旅がケサンとチコリにとって、想像を絶したものだったといえるだろう。
食料に余分はある。だからといって、これ以上、遅れがでては、死活問題になりかねない。ケサンはパルサスと相談のうえ、ペースをあげることに決めた。
八日目。

砂の向こうに、美しい町並が浮かんでみえた。
蜃気楼である。
「あれがバルトラだ。近くにみえるが、まだここからたっぷり二日半はかかる」
パルサスはそう言って、それ以上関心をはらおうとしなかったが、目の見えないチコリにとって、遠くの町が近くにみえるという現象が、想像すらつかず、不思議でたまらなかった。
とはいえ、目指すバルトラにクツァルがいるとすれば、ケサンとチコリの旅路も終わりに近付いているのだ。どういう結果になるにしろ、改めて覚悟を固めずにはいられない。
その日は、これまでの遅れを取り戻すため、日が暮れても黙々と歩き続けた。クツァルと対決する前に出来るだけ休息をとりたいというケサンの希望で、バルトラまでは強行軍を続けることにしたのだ。
やがて、ラクダが疲れきったころ、三人は野営を張ったが、異変はその夜中に起こった。
最初にそれに気が付いたのは、チコリだった。
朝起きると、いつもであれば誰よりも早く目覚めて活動しているパルサスの気配がなかったのだ。
だが、チコリは不審に思うことはなかった。パルサスはしばしば道を確認するため、一人で動き回ることがあったからだ。今回もそれだろうと思った。
しばらくしてケサンが目を覚ますと、慌てたようにチコリにパルサスの行方を尋ねた。
「あたしが目覚めた時からいませんでした。道を探しに行ったのではないですか？」
「いや、違う。荷物が全部持っていかれている」
そのケサンの言葉に、チコリもようやく何が起きたのか理解した。パルサスに逃げられたのだ。
「やられたよ」
ケサンは絶望的な溜息をついた。とりたてて騒ごうとしないのは、余計な体力を使うのは無駄だからだろう。
「追いかけなくちゃ」
「いや、無駄だ。それより下手にパルサスを捜して、道に迷うほうが危険だ」
「でも、何故――？」
チコリは呆然と呟いた。
「わからない。元々そのつもりだったのかもしれないし、あるいは僕たちの目的をそれとなく察して危険を感じて逃げたのかもしれない。どちらにしろ、もはや引き返すこともできない。ここからは道案内なしでバルトラを目指す」
幸いにも、最低限の水と食料、それにラクダは残されていた。砂漠の民は盗みを働いても全てを奪い去ることはしない。砂漠において、それは命を奪うことと同義だからだ。
だが、ここから先、案内もなく砂漠を進むことを考えれば、あまりにもか細い。
「大丈夫」
チコリを慰めるように、ケサンは言った。
「これから向かうべき大体の方角はわかっている。順調にいけば、二日もあればバルトラに着

くよ。水も食料もそれくらいはもつさ」
　しかし、それが空元気であることは一目瞭然であった。
　事実、その日から二人を待っていたのは、あてもない砂漠の放浪であった。

一日目、とにかく二人はバルトラに向けて歩をすすめた。夜になると、ケサンは地図と夜空の星を見比べて、必死に方角を確認しようとしていたが、それが正しいかどうかまで確かめる手段はなかった。
二日目、上手くいけばこの日にもバルトラに着くはずであったが、虚しく砂原を歩き続けるだけに終わり、町はおろか水場すらみつけることは叶わなかった。
三日目、とうとう食料が底をついた。水はまだ幾分かあるが、それも節約して二日持つかどうか。水がなくなれば、三日と持たずに、ひからびて死ぬだろう。
ケサンまだ余分の水が残っていると嘘をついて、自分の分の水までもチコリに飲ませた。チコリはすぐにそれが嘘だと気づいたが、何も言わなかった。
なぜなら、もし自分がそのことに気が付いたことを少年が知れば、彼の誇りは傷つくだろう。しかし、だからといって、その水を自分で飲むことはしない。ケサンはそういう気高さを持った人間である。
だからチコリは何も言わずにケサンの優しさに甘えるしかなかった。胸のうちで何度も感謝を口にしながらも、それすら伝えることが出来ない自分が心苦しかった。ただ、水袋を渡されても、唇を湿らすだけにとどめた。
その夜、ケサンはパルサスに逃げられて以来、毎晩続けている地図と夜空との睨めっこをしたまま、いつまでも寝ようとしなかった。それだけでも、いかにケサンが追い詰められているかがわかった。
少女はそんなケサンの様子に密かにある決心をした。
「――ケサン、あたしはここに残ります」
チコリがそう宣言したのは、翌日の出発前のことだった。
少女の性格から考えて、こう言い出すのは予想していたのだろう。ケサンは呆れたように首をふった。
「そんなことはさせない。今はその話はなしだ」
ケサンはそれで話を切りあげるように、にべもなく言い放った。
「約束したはずです。あたしが足手まといになれば見捨てて欲しいと」
「馬鹿を言うな。君は足手まといなんかじゃない」
「約束を破るんですか？」
「約束？　約束は、君が足手まといだと、僕が感じたらの話だったはずだ。何も問題ない」
問い詰るようなチコリの口調に、チラと不快な表情がにじんだ。それでなくとも気が立っているのだ。
「でも、もう水がないんでしょう？　このままでは二人とも死んでしまいます」
「だから、そうならないようバルトラを探している。心配しなくても、必ずみつけだす」
「――いつまでに？」
「それは……」
一番痛いところをつかれて、ケサンは懸命に言葉を探した。チコリは言う。
「もはや一刻の猶予もないことは自明の理です。ならば少しでもバルトラに辿り着ける可能性の高い選択をすべきです。何の役にもたたないあたしのために貴重な水を失うべきではないのです

。もはやあたしは足手まといにしかなりません。ケサン、約束です。あたしを見捨ててください」
「だから君は足手まといなんかじゃない。言っただろう、君の魔法は戦力になる。第一……」
　と、言いかけてケサンは呆けたようにチコリの顔をみつめた。
「どうしたんですか？」
「――もしかしたら……いい方法があるかもしれない」
「いい方法とは」
　訳もわからず、チコリは相槌を打った。
　ケサンは言った。
「魔法使いはマナを淀める者だと言っただろう。そのため魔法使いは普通の人では感じ取れない流れを知覚することができると云われている」
「それが？」
「オアシスは、ここからずっと南にある山脈からの雪解け水が、地中に沁み込み、遠路、地下水脈を通って、砂漠に湧き出したものだ。つまり、君がその力を利用して、この砂漠のどこかに存在する地下水脈の流れを感じとれれば、その流れを追いかけていくことで、オアシスに辿り着けるはずだ」
　ふいに生まれた希望に、勇気付けられて、ケサンは力強く断言した。
　困ったのは、チコリである。そんなことやったこともなければ、命のかかった場面で、自分の、いわば勘のようなものに全てを託すのは心細い。
「あたし自信がありません。ケサンがやっていただけませんか？」
「残念ながら、無理だ。僕に魔法の才はないんだ」
「え！」
　意外な返答に、チコリは驚いた。
「でも、以前に魔法を使っていたじゃないですか？」
「僕が使ったのは魔法じゃなくて、魔術だ。魔術は魔具や術式を用いて、マナに働きかけることが出来るが、魔法使いのように、それを淀めたり、感じ取る力はない。これは君にしかできないことなんだ」
「でも、あたし、五感の半ばを失っています」
　不安げなチコリに、ケサンは優しく言った。
「大丈夫。五感は必要ない。むしろ余計な感覚が混じらないぶん、正確に流れを感じ取れるはずだ」
「……」
　チコリは押し黙った。「流れを感じとる」とケサンは言った。だが、口でいうのはともかく、どうやればいいのか、本当にそんなことが可能なのか。
「やってくれるね？」
　念を押すようにケサンが言った。
　できない。

とは、言えない。チコリは頷いた。
それをみて、ケサンは我が意を得たように、頷くと、準備にとりかかった。
砂の上に敷き布を置き、そのうえにチコリを座らせる。それからケサンはその後ろに立って、少女の肩に手をかけた。

　その姿勢のまま、ケサンはチコリ語りかける。
「よし、いいかい？　それじゃあ、僕の言うとおりにするんだ。まず流れを感じるには、何よりも精神を集中することだ。心を研ぎ澄ますんだ」
　言われた通りに、チコリは光を失った瞳を閉じた。
「まだ、もっと集中するんだ。もっと、もっと奥深く」
「はい」
「返事はいいから、もっと」
「――」
「深く集中するうち、君の意識は、自然と溶け合うようになる。僕の声も、耳で聞くのでなく、身体全体から染みこんでくるはずだ。聞くでもなく、触れるでもなく、見るでもなく、感じ取る。そうだ。太陽の熱、耳を震わせる音、大気の肌触り、呼吸のリズム、血液の流れ、それらが一体となって、混然となり、やがて君は自然の流れの一部となる」
　ケサンの声が耳に心地よく響く。まるでケサンに暗示をかけられたかのように、いつしかチコリの意識は深く沈みこんでいった。
「いいぞ、そのまま。火の激しさと死の乾きが渦巻く流れがわかるかい？　砂漠を支配する流れは生者を拒絶する。だが、その奥に柔らかい優しい流れがあるはずだ」
「……みつかりません」
　まるで、何かに憑りつかれたような、呻くような声で返事をする。過度な精神集中によって、意識が朦朧としているのだ。
「探して！　もっと心を研ぎ澄まして、よーく感じるんだ。わかるはずだ、この場に、明らかに異質な流れがあるのが。君の心を自然に惹きつける豊潤な流れがあることが」
「あっ！　……あった。ありました」
「よし、いいぞ。いいか、その流れを追っていくんだ。どこだ。どこに続いている？」
「あちら」
　と、チコリは指差した。
「この方向、ここから三千ユールの距離に――」
　そう言うが早いか、チコリの身体全体から、どっと力が抜けた。慌てて、ケサンがそれを支える。
「大丈夫か？」
「はい。はい、大丈夫です。少し疲れただけです。あたし、わかりました。ケサンの言葉に従ったら、確かに流れが感じとれたんです」
「何を言うんだ。君の素質が素晴らしいからだよ。さあ、行こう。三千ユールなら、今日中にはたどり着けるはずだ」
　こうして二人は出発した。これまで、あてずっぽうに歩き回っていたことを考えると、確かな道しるべができたことは、図らずも二人を元気にした。
　途中で、水が一滴もなくなってしまった。これで、チコリの指した方角が間違っていれば、二人は立ち往生することになる。
　喉がカラカラになり、もはや二人は一言も喋ろうとしなかった。ただ、その先にオアシスがあ

るものと信じて、歩き続けた。
　やがて、日が暮れる頃、
「あった――」
　と、ケサンが短く発した。
「え？」
「やった、チコリ。街だ！　バルトラだ！　僕たちは着いたんだ！」
　まだクツァルを倒す旅が終ったわけじゃない。それでも、ケサンは笑っていた。
　それくらい、砂漠の旅路は辛いものであったし、それはチコリも同様だった。
　嬉しさのあまりか、勢い余って、ケサンはチコリを抱きしめた。
「ケサン、痛いです」
「ああ、ごめんよ」
　少年は謝りながらも、その声音には笑みがこぼれていた。
「そうだ、まだやるべきことはこれからだ。気を引き締めないと」
　そう自戒しながら、少年はチコリの手をとった。二人は駆け出さんばかりの勢いで、バルトラに歩きだした。
　パルサスの話では、バルトラは付近でも最大のオアシス都市となっている。砂漠の民にとって、交易の集積地となっているため、街全体が賑わっており、近代的な都市整備がなされている。――そのはずだった。
「……どうしましたか？」
　街に近付くにつれ、ただごとでない雰囲気を察したチコリが尋ねた。
「いや、わからない。どうも人の気配がしないが」
　ケサンも首を捻る。
　その理由は街についてわかった。
　死に絶えていたのだ。街が。
「見えなくてよかった」
　そう呟いたケサンに、チコリは何が起こったのか聞こうとはしなかった。
　流れを感じとって以来、チコリの感覚は異常に研ぎ澄まされていて、見えなくても何が起きているのかはすぐにわかった。
「クツァルの仕業だ」
　それ以上、ケサンは何も語ろうとはしなかった。
　幸いにも、水は枯れていなかった。二人は水で喉を潤すと、今度は主のいなくなった民家に入り、干し肉を失敬し、久しぶりの食事にありついた。
「クツァルはこの街のどこに潜んでいるのですか？」
「男爵の配下の情報では、この街から南西に三十ユール下った場所に、屋敷を構えているらしい」
　だとすれば、ここから一刻もかからない。
　捜索は明日にすることにして、二人はとりあえず疲れた身体を休めることにした。

ケサンとチコリの旅の終わりが近付いていた。

太陽は完全に暮れ、あたりは暗闇に包まれる。
無人の街ではわずかな明かりが、そこに人がいることを教えてしまう。相手は遠く離れたチコリにすら呪いをかけた恐ろしい魔法使いである。どちらにしろ既に気づかれている可能性は高かったが、それでも火は焚かなかった。二人は民家の一室に潜り込むと、毛布にくるまった。明日のことを考えれば、早目に体を休めるべきだろう。
だが、チコリは色んな考えが頭を渦巻いて容易に寝付けなかった。あるいは、明日のことを思い、緊張しているのだ。
それはケサンも同様だったのだろう。
「チコリ……寝れないの？」
声が聞こえた。
「ええ。ケサンも？」
「ああ。身体は疲れきっているんだけどね」
そう言って、ケサンは黙り込んだ。沈黙が訪れ、静かな時間が流れる。これが二人にとって最後の夜になるかもしれない。
「ねえ、ケサン、そういえば……」
チコリは思い切って、今日感じた疑問を尋ねた。
「なんだい？」
「ケサンは魔法を使えないのに、何故クツァルの討伐を命じられたのですか？」
ケサンが寝返りをうつ音が聞こえた。少年はチコリの問いに答えるかわりに、逆に質問をぶつけた。
「魔法使いを討つなら、当然、魔法使いを差し向けるべきだ、というわけだね？」
「はい」
チコリは素直に同意する。ケサンはポツポツと語りはじめた。
「それはできなかったんだ。何故なら、王家はクツァルだけでなく、あらゆる魔法使いを恐れている」
「何故――？」
「魔法使いは密かにクツァルに賛同しているからだ。チコリ、君は政魔分離を知っているか？」
聞いたことがない。チコリは首を振った。
「いいえ」
「中央政治から魔法使いを遠ざけることを約束した古い取り決めだ。強力な力を持った魔法使いが権力をもてば、誰も逆らえる者がいなくなり、独裁政治となってしまう。それを防ぐため、建国以来、魔法使いは中央政治に係わりを持つことができないとされているんだ」
「知りませんでした」
そう答えたものの、知らなかったというよりも興味がなかったのかもしれない。つい最近まで、チコリにとって最大の関心ごとは今日一日を家族とどう生きていくかということばかりで、王家の話など遠い世界の話だと思っていた。
それが人買いに売られたことをきっかけに、王宮騎士の少年と旅を共にすることになり、村では考えられなかった経験も数多くすることになった。遠くまで来たものだと感慨にふけずにはい

られない。
　ケサンは言う。
「政魔分離は王国の歴史において魔法使いに多大な不遇をかこってきた。いまやその血筋は絶えてしまったが、王家が格別の信頼を寄せていた四賢者でさえ、名声とは裏腹に、その職責は地方執政官に過ぎなかった。もっとも、政魔分離のおかげで、今まで致命的な政治腐敗が起こらなかったのも事実だけどね。ともかく現在の魔法使いの地位は、その実力に比べて、正当に評価されているとは言い難い」
「待ってください。それが魔法使いをクツァルの賛同者だとする理由なのですか？」
「ああ。王国の魔法使いは誰しもが、少なからず、今の政治に不満を持っている。王政を揺るがす今回の事態は、魔法使いを中心とした新王国建設の布石になると考える者も少なくない」
「だって、そのために世界を失ってしまえば、元も子もないではありませんか」
　チコリの当然の疑問にケサンは頷いた。
「その通りだ。だが、クツァルが世界の崩壊を企んでいるといっても、その真の意図は王家も計りかねている。ただ元老院では、クツァルが世界を完全に滅亡させることはないという楽観論が多数派を占めている。世界が完全に滅んでしまえば、クツァルも生きてはいけないだろうからね。そして、そうである以上、王家と元老院が最も恐れるのは、天変地異に乗じ、潜在的な反乱分子である魔法使いが、クツァルを中心に結託し組織的叛乱を起こすことだ。だからこそ、クツァルの討伐には、魔法使いではなく、貴族ともつながりがあり、代々魔術に精通している家系に生まれた僕が選ばれた」
　ケサンは立ち上がると、荷物から何かを取り上げ、チコリに近寄って、その手に握らせた。
　それはケサンの愛用する剣だった。
「これは？」
「この剣は僕の家に代々伝わる宝刀で、メイプル鋼という珍しい素材で鍛えられている。メイプル鋼には、虚魔の性質があり、魔法を打ち消す力がある。クツァル討伐のための切り札だよ。こんなもので、どれだけクツァルと渡り合えるかは不明だけどね」
　それから、ケサンはチコリの手から剣を取り上げた。
「王宮の考えはこうだ。僕がクツァルを倒すなら、それでよし。万が一、失敗しても、王国の最大戦力である魔法使いを温存していれば、打つべき手はまだいくらでもある。ならば、リスクを負わずにすむ策として、まずは僕にやらせてみればいいってわけさ。恥ずかしいことに、王宮にとっては、世界崩壊の危機でさえ、政争の具でしかないんだ」
「そうはいいますが、ただでさえクツァルは王国で最も力の強い魔法使いなんでしょう？」
「もちろん、死は覚悟のうえだ。だが、誰かがやらなくてはならない。このままでは多くの人が死んでしまう。ならば命を賭ける価値はある」
　改めて、自分の覚悟を表明したケサンに、チコリは言葉を見失った。少年がそう考えているからには、これ以上、王家を非難してもしょうがないだろう。
「クツァルとは……」
　と、その代わりにチコリはポツリと呟いた。

「理解りあえないのでしょうか？」
「何を馬鹿なことを……」
「でも――でも、何故争う必要があるのですか？　政魔分離がなければ、こんなことにはならなかったのでしょう？　ならば、王様がこれまでの慣習を廃し、政治を改めれば、すむ話ではありませんか」
「ことはそんな簡単な話じゃないんだ」
　ケサンは首を振った。
「クツァルが何を考えているのかはわからないが、奴が王家に叛旗を翻した理由は政魔分離だけじゃない。その根本には、もっと何世代にもわたって繰り返されてきた王家の負の歴史がある」
「負の歴史――？」
「これは王家の継承者にのみ伝わる話だったんだが、そもそもクル＝クァールの歴史は建国の時に遡る。クル＝クァールの始祖である初代クツァルは、王朝を樹立した国祖タイガァ王一世の腹違いの弟だったという」
「弟！　じゃあ？」
「そう。クル＝クァールと歴代の国王は血族になるんだ。もっとも今では、その血もずいぶん薄れているけどね」
――そして、そのことが悲劇を生んだ。
　と、ケサンは言った。
「初代クツァルとタイガァ王一世。この二人は血を別けた兄弟であり、タイガァ王が各地の豪族を併合し、王朝を樹立できたのも、強力な魔法使いであったクツァルの武力的後ろ盾があってのものだった。だが兄は建国の祖となる一方で、弟は歴史の闇に埋もれることとなる。その原因となったのが、クツァルの大きすぎた功績が、皮肉にもタイガァ王をして実弟に危惧を抱かしめたことだった。英雄クツァルに地位と権力まで与えてしまえば、王国の実権は二分されてしまうことになるだろう」
　ありえる話である。兄弟というのは血の繋がっているだけに、気が置けない存在であると同時に、たとえ相手が国王であろうと軽んじる気持が芽生えることもある。しかも、弟は建国の立役者にして、魔法という無形の軍事力も保有しているのである。
「そこでタイガァ王は、政魔分離を打ち出した。本来の政魔分離とは、弟である初代クツァルを政治権力から切り離すことで、国王である自分自身に権力を集中させようとするタイガァ王の政治的配慮にあったんだ。もちろん、それはクツァルにとって理不尽な措置ではあったが、本人はそれに異を唱えることはしなかったそうだ。その理由には諸説あるが、私生活において二人は非常に仲の良い兄弟で、クツァルが兄の苦悩を慮ったからだとも、元来から権力志向が異常に薄い男だったからだともいわれている。ただ、そうはいっても、タイガァ王としては、王国の最大功労者であるクツァルを今さら地方領主なんかにするわけにもいかない。そこでタイガァ王は、無位無官のまま、クツァルを宮中にとどめおいた。その地位を空位とすることで、クツァルの立場は王国から自由なものとなる。いわば、特別の名誉を与えることで、クツァルの功績に応えようとしたタイガァ王の苦慮の策だった。そして、それはひとまずは上手くいった。タイガァ王は唯

一無二の絶対君主として、思うとおりに手腕をふるうことで、着々と王国の基盤を築いていったんだ。ところがタイガァ王の晩年に事件は起きた。タイガァ王の第二子トルア皇子の子供、つまりタイガァ王一世の孫が魔法使いの才を宿していることが発覚したんだ」
「それって……」
「ああ、魔法使いでない両親から魔法使いが生まれる。君と同じケースだよ。おそらく君の遠い先祖にも魔法使いの血統がいたのだろう。もっとも今回の場合、その原因は明らかだ。なにしろ、弟であるクツァルが魔法使いであるということは、その兄であるタイガァ王も当然、魔法使いの血が流れている可能性は高いんだ。タイガァ王は、弟の魔法使いの才能は母系によるものと油断していたようだが、その血が孫の代になって顕現したんだ。そして、ここで問題となったのが、すでに政魔分離が国政の柱のひとつとなっていたことだ。王権の継承者である王族の血筋に、魔法使いの血が潜んでいるという矛盾。この矛盾はいずれ王位継承権の正当性を否定する危険性さえ孕んでいた。そこでタイガァ王は自らにまつわる魔法使いの出自そのものを闇に葬ろうとした」
　チコリにケサンの表情はわからない。だが、何故だかその時ケサンが悲しそうな顔をしているような、理由はわからないが、そんな気がした。
「そのためにすべきことが、自身の血族にして王国最強の魔法使いであるクツァルの存在をあらゆる表舞台から消し去ることだった。当時、初代クツァルは亡くなり、その継嗣である二代目がクツァルを継いでいたが、彼にはタイガァ王の強権に逆らうような気概はなかった。かくして、クツァルは王宮の社交場から姿を消し、歴史書からはその存在を削られることとなった。だが、クツァルはいなくなったわけではない。彼らはその後も人知れず宮中にとどまり、歴代の王の影として、ずっと王家に仕え続けていたんだ。それも縁戚婚を繰り返すことで、初代クツァルの血を濃く受け継ぎながらね。そして、決して表に出ることのない、その影なる存在を総称し、クツァルの血族はクル＝クァールという暗語で呼ばれるようになったんだ」
「ケサン、その……タイガァ王の孫はどうなったんですか？」
「さあ、そこまでは聞いていない。ただ大きな声では言えないが、今でも稀に、王家から魔法使いの力を宿した子が生まれることがあるらしい。そんな時は表向き死産ということにして、どこかに身分を隠したまま里子に出してしまうそうだ。大方、その子もそんな運命を辿ったんじゃないかな。まあ、それはともかく、こうして影なる存在となったクル＝クァールだが、王家にとって、記録に残らない魔法使いというものほど、都合のいいものはなかった。クル＝クァールが、王の密命によって、政敵の暗殺や、宮中工作に利用されるようになるのに、そう時間はかからなかった。そして歴代の国王のなかでも、最もそういった裏工作にクツァルを重用したのが、先王であるライン王だ。今のクツァルが当主の座についたのが九つの時だったが、それから王都を出奔するまでの十数年間で、命を奪った者の数は三桁に届くとまで言われている」
「そんなに！」
「ああ、間接的なものも含めれば、犠牲者の数は、その三倍になるとさえ言われている。もっとも、その全容を正確に知っているのは、今は亡きライン王だけだけどね」
　それからケサンはやれやれとでも言いたげに、息をついた。

「わかったかい？　クル＝クァールの歴史は血に呪われている。クツァルの裏切りには、何百年にもわたる王家への恨みがこめられているんだ。いや、もしかしたらクツァルが本当に憎んでいるのは、自分をやりきれない憎悪に駆り立てた、この世界そのものかもしれない。今さら、話し合いでどうにかなる相手じゃない」
「……」
　チコリは返事はしなかった。だが、そこにあったのはケサンの思惑を超えて、どこかクツァルの運命を想い馳せるような気持であった。

　ふと、ケサンの声が聞こえた。
「君には本当にすまないと思っている。こんな醜い戦いに巻き込んでしまって。君を助けようと、良かれと思ってした行動が、クツァルに君の存在を教えることになってしまった」
「そんな！　謝らないでください。ケサンがいなければ、あたしは今頃、男爵に殺されていたでしょう。それに、あたし嬉しいんです。あなたがあたしを助けてくれたこともそうですが、ここまで一緒に旅をしてこれたことが」
「はは。本当かい？」
　自分を慰めてくれていると感じたのか、ケサンは疑わしそうに言った。
「嘘じゃありません。あたし思うんです。人は自分の人生を思い通りにすることはできませんが、その生き方は選べます。あたしは自分でケサンについていくことを選び、自分でクツァルと戦うことを決めたのです。その結果迎える結末がどんなものであれ、あたしはあたしのまま生きることができたのです。悔いはありません。それに――」
「それに――？」
「ケサンと一緒なら……」
「僕となら？」
　しかし、その先の言葉は出てこなかった。ケサンもそれ以上、何も言おうとしなかった。二人のあいだに再び静かな時間が流れる。砂漠の夜気は冷たいが、この静けさは、どこか暖かい。
――その時だった。
『……恐ろシい魔珐使い』
　ひどく、くぐもった声が聞こえた。
　聞き覚えがある声だ。間違いない、男爵の屋敷で倒れたあと、夢のなかで聞いたあの影と同じ声である。
「ケサンッ！」
　チコリは慌てて少年の名を呼んだ。
　だが、おかしい。返事がない。
　耳をすませると、少年は寝息をたてている。
（眠っている――？）
　そんな馬鹿な。つい今ほどまで確かに起きていたはずだし、寝入ったにしても、そんな気配もなかった。
（それに……なんだかあたしも眠い……ような……）
　そうなのである。
　誰知れぬ声に、全身の細胞が危機を感じているのに、それとは裏腹に、頭は朦朧とし、まるで眠りにつく寸前の、そんな多幸感が波のように襲ってくるのだ。
「一体……何なの？」
　現実と夢の境界線の狭間にいるような、ふわふわした気分のまま、チコリは必死で声を荒げた。もはやそれが自分の口から確かに発せられたのかさえ定かではない。
『恐ろしィ魔珐づがい』
『貴様ニ話ガあル』

「話？　あなたは何者？」
『我ハ影』
『影』
『カゲ』
『カゲ』
　水面に無数の波紋が花咲くが如く、その声は響いた。
「……影？」
『ソウだ』
『王の影にシで』
『影ノ王』
　チコリは言葉を交わしながら、これは夢だと思った。自分は夢をみて、夢のなかで会話をしているのだ。なぜなら、身体がまるで金縛りにあったかのように動かないのだ。
『恐ろシい魔法使い』
『君と話ガしたい』
　やがて無数の声はひとつに重なっていく。その中心には確かな熱を感じる。眠りから覚めるように、徐々に脳が覚醒していく。
『なぜナら君と私が争う必要なドないのだ』
　そして、声はハッキリとした輪郭を描き出す。みえなくてもわかる。そこにいるのは……
『だって、君も私と同じ――』
　刹那、夢と現実が重なりあった。
「――魔法使いなのだから」
　……気が付けば。
　何時の間にか、何処かもわからぬ場所に、チコリは自分の足で立っていた。
「あなたは……」
　チコリは息を呑んだ。
　そして目の前には、男の気配。
　それが誰か、チコリはハッキリと自覚していた。
「――クツァルっ！」
「ようこそ、お嬢さん。賓客をご招待するには、少々強引なエスコートだったが、お許し願いたい」
　その男――クツァルは笑って言った。
「驚いただろう。それともパーティーの気分には、刺激が強すぎたかい――？」

　あまりにも突然の事態にチコリは動けなかった。
　状況を把握しようにも混乱しているのか頭がうまく働かない。
「ケサン――？」
　思わず少年の名前が口をついて出た。
（そうだ！　ケサンはどこに？）
　チコリは目が見えないながらも、辺りを手でまさぐった。さっきまでは手を伸ばせばすぐ届く距離にケサンがいたのだ。
「あの少年ならいない。ここは私の屋敷だ」
　クツァルの声に、チコリは自分が震えていることを知った。恐怖が喉奥からせりあがってきた。
（馬鹿――ッ！）
　少女は自分を叱咤した。ここまできて恐れるのなら、何のために旅をしてきたというのか。何がおきているのかは未だに理解できていないが、それでもクツァルに立ち向かうためには何よりも津より心が必要なのだ。
　チコリは深呼吸をひとつすると、声がしたほうに向き直り、光を失った視線をキッとあげた。そこにはもはや先ほどの恐怖はない。
「ケサンは無事なのですか？」
「素晴らしい。この瞬間で、精神力を持ち直したか」
　まるで、それが嬉しいかのように、クツァルの声音に喜色がにじんだ。
「さすがは獅子の血だ」
「獅子の血……？　何を言っているの？　そんなことより、あたしの質問に答えて下さい！」
「心配しなくても無事だよ。あの少年には何もしていない。それどころか、これからの君の態度次第では、君の呪いも解き、そしてあの少年にも決して危害は与えないと約束しよう」
　それがどこまで本気かはわからないが、今すぐ身に危険が降りかかるわけではないことは確かなようだ。それにケサンも無事であるようなので、ひとまずは安心してもいいだろう。
　チコリは冷静になったことで、いくつかのことに気づいた。ひとつには、クツァルの声が予想に比して、まだ若い男の声であったこと。そして、クツァルはここが自分の屋敷だといったが、肌を撫でる風の感触からすれば、自分が――たとえば屋上のような――屋外にいることである。
「それで、あたしの態度とは？」
「君に話がある」
　クツァルは言った。
「そのために私の屋敷に招待した」
「ええ。話なら、あたしにもあります」
「ほう……？」
　そのセリフは予想外だったのだろう。クツァルは驚いた声をあげた。
「もう――これ以上ひどいことをするのは止めて下さい」

「ひどいこと……だと」
「ええ。あなたは世界を崩壊させようとしているのだとケサンから聞きました。いえ、あたしが聞いたのはそれだけではありません。今まであなたが——あなたたちの一族がこの国の歴史のなかで、どれだけ苦しめられ、血塗られた道を歩んできたかも知りました。あなたたち一族の苦しみはあなたたちのものです。だから、それを理解るとは言いません。でも、未来(これから)のことなら共に考えていくことができます。ケサンにはあたしから事情を話します。決して悪いようにはしません。だから、もうこれ以上、罪を重ねるのは止めてください」
「君があの少年に話をしたところでもはや取り返しなどつくものか！」
　やや苛立たしげにクツァルは答えた。
「いえ、約束します。必ずケサンには納得してもらいます。それに王様もケサンが説得すればきっとわかってくれます」
「ハッ！」
　今度は鼻で笑う。そこには明らかな嘲笑が含まれている。
「よしんば君の考えが上手くいったところでどうするというのだ？　政魔分離を廃し、私に執政の地位でも約束するかね？　今さら？　あの腐敗した国の？」
「それを共に考えていく最初で最後の機会を頂きたいのです」
　クツァルは嘲笑うのをやめた。それから感心したように低く唸った。
「なるほど、よくよく芯が強情(こわく)できているらしい。だが、そんな者ほど自分が信じていたものが揺らいだ時、えてして脆さをみせるものだ」
　好意とも皮肉ともつかぬことを呟きながら、かといってチコリの提案には否とも応とも言わない。チコリはからかわれているような心持ちになった。

「考え直す気はないと仰るのですか？」
「そう結論を慌てなくてもいいだろう。何より私の話を聞いてからでも遅くない」
　クツァルの口調は落ち着いており、それがチコリの不安を煽る。
「一体、何を話すというのですか？」
「ふむ」
　クツァルは頷く。
「君の呪いのことだがね……」
　と、まるで赤子に噛み含めるような言い方で、クツァルは切り出した。
「確かに私の術によるものだ」
（何を今さら――）
　あまりにもわかりきったことをわざわざ宣言したクツァルに少女は怒るよりもむしろ戸惑いを覚えた。しかし、クツァルの話には続きがあった。
「だが、君の呪いが発動した時、私はこの屋敷にいた」
「それが？」
　どうしたというのだ。
　クツァルはこの砂漠の屋敷に居ながらにして、新しく魔法に目覚めたチコリの存在を恐れ、死の呪いをかけた。ケサンから、それを聞き、そう信じていた少女にとって、それは何ら疑問を差し挟むことではなかった。少なくとも、クツァルの次の台詞を聞くまでは。
「おかしいと思わないか？　いくら私でも遠く離れた君の命を奪うような強力な呪いがかけられるはずがない」
「何を仰っているのですか。あたしの呪いは自分がかけたものだと、今、仰ったばっかりではないですか」
　チコリの当然の疑問に、クツァルは大きくうなずいた。
「その通り。だが、私が言っているのは、遠く離れた場所から君にその呪いをかけるのは不可能だということだ」
「矛盾です」
　少女は思わず、声を荒げた。少女にかけられた呪いは自分の手によるものだと告白しながら、一方でそれを否定する。もっとも、そう断言しながらも、一滴のシミを心の水面に落としたような、不安があった。
「そう矛盾。だが、その矛盾は君をここまで連れてきた、あの少年が嘘をついていることに起因する」
「嘘？」
　チコリはゴクリと唾を飲み込んだ。
「そうだ。君は私が君の魔法の才を恐れるがために呪いをかけたと聞いたのだろう。だが真実は違う。君の呪いは君が赤子の時に、私が王の命を受けて、かけたものだ。なぜなら――」
　昂ぶりを抑えるかのように、クツァルはそこで殊更に大きく息を呑んだ。
「――なぜなら君は王家に生まれながら、魔法を才を宿していたからだ」
「え！」

　チコリは驚きのあまり声を失った。
「君は先王レオ王の実娘にして、現国王に告ぐ王位継承者なのだよ――」
「そんなの嘘よ！」
　少女はようやく声を絞り出すと、どうにかそれだけ言った。
「嘘ではない。古来より政魔分離のため、王家に魔法使いが生まれることはあってはならないこととされていた。そのため、君は生まれると同時に、表向きは死産と公表され、その裏では出自を隠したまま農村へと里子に出された。魔法の才は、将来的に王国の禍根となる危険性があるため、もし君が魔法に目覚めるようなことがあれば、それが引き金となり、発動するタイプの呪いをかけてね」
「嘘だ！」
　チコリはなおも首を振った。信じられなかった。いや、信じたくはなかった。クツァルの言うことが真実なら、村で育ててくれた両親は本当の父と母ではなかったということになる。そうなれば、今までの少女の人生全てが偽りであったということだ。もはや、何を信じればいいというのか。
「にわかに信じがたいのも無理はない。君にとってはさぞや辛い話だろう」
　クツァルの声には演技とも思えない同情が滲んでいる。
「もちろん、このことはあの少年も全て知っている」
「ケサン……！」
　少女は思い出したように、「あっ」と声をあげた。
「ああ、そうだ。不思議に感じなかったかね？　たかが村娘である君に、王宮騎士たるものが、ああも献身的な執着をみせるのを。全ては君が王姫だからだよ」

「でも――！」
　少女はなおも信じようとはせずに、すがりつくように反論した。
「でも、あなたの話はおかしいです。あたしが王家から捨てられたなら、どうしてケサンは今さらあたしにつきまとうというのですか？」
「確かに君が生まれた当時は、政魔分離のために魔法の才を持つ王族は許されなかった。だが今は時代が違う。いまやあらゆる意味で王国の秩序は緩みきっている。何も私のせいではない。王家は長年の腐敗政治のツケを払うときがきたのだ。この異変はいずれ時代のうねりとなり、やがて大きな時流となって王国を飲み込むだろう。解放騎士団などはその時代の先頭集団に過ぎない。しかし、現王であるライン王は政治を重責としか感じず、壮年の頃より、詩楽に興じることにのみ生きがいを見出し、あまりの昼行灯ぶりから、先王も政敵としての脅威を抱かず、その凶手を逃れたため、かえって国王の座が巡ってきたという暗君だ。この難局を乗り切るだけの辣腕は期待できない。もはや、この時代に必要とされるのは政魔分離などという因習ではない。王国を再興すべき強力な指導者だ」
　時代。と、クツァルはいう。
　時代の要求が、新しい時代の象徴となるべき王を欲し、王家に見捨てられたはずの少女を再び見出したのだと。
「すでに王と元老院との間では取り決めが交わされている。叛逆の魔法使いクツァルを滅ぼし、救国の英雄となった王姫が王都に帰還した暁には、新時代の旗手となるべく国王の座を戴くと。それが彼らの用意したシナリオなのだよ。そして、そのために偶然を装って、君はここまで連れてこられた」
「そんな……」
「理解したかね？」
　チコリは答えない。
　今、言葉を発しようものなら、そこから気魂が萎え、クツァルの言葉を全て受け入れてしまうことになるような、そんな気がしたからだ。
「君にもわかっただろう。この国には何の正義もない。王家は自分たちの都合で君を捨てておきながら、今また自分たちの都合で、君を王に押し戴こうというのだ。これほど人を愚弄した話があるか？　しかも、そこまでして奴等が考えているのは、自家の保身のみ。この国はそこまで腐りきっている。いや、なにもそれは今に始まったことじゃない。無官ながらにして『影王』と敬し称された我が血族を歴史の恥部に貶めた建国の頃から本質的には何も変わっていない。この国は最初から間違っていたのだ」
「だからといって、そのために世界を滅ぼそうというのですか？」
「そうだ。世界は滅びる。だが、その混沌と混乱のなかから生き残った者たちによる新しい秩序が生まれる。不誠実と欺瞞と裏切りに満ちた秩序ではない。荒廃した世界を生き抜くために、お互いがお互いを助け合う。そんな素朴だが力強い秩序だ。そして、その生き残る選ばれた者たちこそ、本当に力を持った者――つまりは魔法使いとなるべきなのだ」
　クツァルの声が低く響いた。
「私の仲間になれ」

　それが当初からのクツァルの目的だったのだろう。
「ここで君のような才能に溢れた魔法使いを殺してしまうのは惜しい。そもそも私たちは争う必要などないのだ。考えてもみたまえ。君を捨てた王家に義理立てしたところで何になる。よしんば君が王家を相続したところで、王宮にとって君は有用な道具に過ぎない。我々の始祖がそうであったように、用がすめば直ちに捨てられる運命だ。それよりも私と一緒に来い。そうすれば、君の呪いも解き、君が心を寄せるあの少年も命だけは助けると約束しよう。魔法使いは魔法使いと共にあるべきものなのだ」
　もし断るようであれば、命はないという脅しが言外に含まれている。
　しかし、チコリは首を縦にはふらない。
「でも――」
　と、少女は言う。
「あたしはそのために罪のない人々を死においやっていくあなたに与することはできません」
「大いなる目的のためには多少の犠牲はやむを得ない」
「自分のために誰かを犠牲にするのなら、あなたもあなたを利用した王家と同じではないですか」
「否定はしない。だが魔法は超越した力ではあっても全能ではない。誰も傷付かずに世界を変える方法などありはしない。所詮は血塗られた道だ。ここで犠牲をいとうなら、これまで私が殺してきた者たちに申し訳がたたない。だから私は自分の進むべき道を血で贖うことを悔いたりはしない。ただ自らの罪を畏れるのみを恐れる。それが咎人として生きてきた私の矜持だ」
「間違いです。それは間違いです」
　チコリは叫んだ。今まで生きてきた心の支えを失った少女にとって、そう叫ばねば、心が折れそうだった。
「君はそうやって、私を否定することで、さも自分が正しいかのように主張するが、ならば他にどんな方法があるというのだ？」
「それは……」
　チコリは言葉に詰まって、顔をふせた。少女は胸のうちに必死で言葉を探したが、何も出てきはしなかった。

「そもそも、私が知らないと思っているのか？　君がこうしてここに立っているのもクロウ男爵の犠牲あってのことではないか」
　胸にトゲを刺されたような痛みにチコリは唇をかんだ。クツァルの言うとおりだった。男爵を殺すことで、生き延びた自分がどうしてクツァルを否定できようものか。クツァルが咎人であるならば、チコリもまた等しくして咎人なのだ。
「クロウ男爵は非道な男であったから殺してもいいと？」
　クツァルはなおも激しく少女を痛罵する。
「なら何故私も裁かない？　何故和議をもちかけた？」
　詰問するクツァルの言葉は、チコリの心を容赦なく斬りつける。
「それとも男爵を殺した罪を私を許すことで購おうとでも？」
　その語調の激しさは、少女が顔をあげることも許さない。
「もう何をしたところで男爵は戻らないのに？」
　クツァルは偏執的な喜色を滲ませると、言った。
「君は卑劣だよ」
　皮肉でもなんでもなく、クツァルの信念からすればそうなのだろう。そして、それがことごとく正しいことはチコリ自身が一番よく知っていた。
　こらえきれなかった。
　チコリの口から嗚咽が洩れだすと、あとは涙となってポロポロと零れ落ちた。チコリは顔を手でおおって泣いた。
　もはや少女が拠って立つべきものは何もなかった。
　と、少女の手首をクツァルが掴んだ。
　そのまま力任せに腕を引き寄せられたかと思うと、
「動くな！」
　クツァルの低い声が聞こえた。
　何が起きたかはまもなくわかった。
「そんなところで隠れてないで、出て来い！」
　クツァルが大声をあげる。
　地面を擦るような足音が聞こえて、誰かが現れたのがわかった。
「王姫がさらわれたというのに、随分遅かったではないか」
「ケサン――！」
「……」
　見えなくてもわかった。
　そこにいたのは、チコリをここまで連れてきた少年――王宮騎士ケサンだった。

「ケサン！」
　少女はもう一度少年の名を呼んだ。
　状況が好転したわけではない。だが、ここにケサンが駆けつけてきてくれたことはチコリにとって他の誰よりも心強かった。
「……」
「どうした、少年？」
　クツァルが沈黙したままの少年に、からかうような声をかけた。
　聡い少女はその沈黙の意味をすぐに悟った。
　クツァルは少女のことを「王姫」と言った。つまり少年はその一言で、クツァルがチコリに何を話したかに気づいたのだろう。
「ケサン……本当……なのですか？」
　チコリは懇願するように尋ねた。
「……すまない」
　その短い一言でチコリには充分だった。それはチコリにとって、今までで一番辛い言葉だった。もしケサンが「違う」とだけ言ってくれていたならば、それがどんな状況であれ、チコリは少年を信じていただろう。その最後の希望さえ打ち砕かれて、チコリは声を失った。
「クツァル！　その娘を放すんだ！」
　ケサンの澄んだ声が響いた。
「それは君次第だ」
　クツァルにはこの場にやや不釣合いな余裕すら感じられる。
　「あっ！」と、チコリは心の中で声をあげた。自分の身柄がクツァルの手の内にある以上、ケサンは自由に動けない。自分が体のいい人質となっていることに今さらのごとく気づいたのだ。
　もちろん、クツァルはそれすらも最初から計算して、少女を連れてきたのだろうが、今さらそれに気がつくとは何たる失態か。
「ケサン！　あたしにかまわないで！」
　チコリは叫んだ。
「だそうだが、どうするね？」
　だが、チコリがそう言い出すことすらもクツァルの計算の内だったのだろう。そして、王家を守るべき騎士が、王姫を見捨てるような真似は決してしないということも。
「わかった、どうすればいい？」
　ケサンは観念すると、言った。
「ケサン！　ダメ！　絶対！」
　チコリはなおも叫び続けたが、その声がケサンに届くことはなかった。
「まずは、その剣を捨てろ」
　勝ち誇ったようにクツァルが指図を与える。
「わかった」
　言うが早いか、剣が地面に投げ捨てられる甲高い金属音が聞こえた。
「ケサンっ！」

「さあ、次はどうすればいい？」
　ケサンは従順な態度を崩さない。つまり、ケサンにとって、王姫であるチコリはそれだけ大切だということなのだろう。
（どうにかしなければ）
　そうは思うものの、クツァルに腕をとられて、体の自由が利かない。
　ならば魔法で――と考えるも、魔法を使おうとすれば場の流れがひどく歪になり、気が散じてしまう。間違いなく、クツァルの仕業で、チコリは魔法も封じられていた。
　ただ、それでもなす術が全くないわけではない。
　精神を集中すれば、かろうじてごく微かな力を生み出すことができそうなのである。
　それは叛逆の魔法使いを滅ぼすことはおろか、発すればたちまち空気中に四散してしまいそうな、か細いものであったが、それでも、
（それでも自分の体内の流れを乱すことくらいなら――）
　チコリは氷のような冷たさで考えた。
　たとえば心臓。
　いわば、ぱんぱんに膨らんだ血袋のようなこの臓器に、力を収束することができれば、たとえ今のか細い力でも、その負荷に耐え切れず、決定的な損傷を与えることができるだろう。
　その結果、少女は当然死ぬ。

――死。
　恐怖がないわけではない。それでもチコリの心は澄んでいた。これ以上、ケサンの足手まといになるわけにはいかない。自分さえいなくなれば……。
　チコリはケサンに裏切られていたことを知ってなお、少年のために命を捨てる覚悟をした。
　迷いはなかった。それが少女の当然の選択だった。
　チコリは力を集約させるために、意識を集中させた。
　その異変にクツァルはすぐ気がついた。だが、同時に不意をもつかれた。まさかチコリが命を捨ててかかるとは思わなかったのだ。
「――馬鹿！」
　考えるより先に横なぎに少女を張り倒していた。チコリは床に転がり、集まりかけた力も途切れる。
「死ぬつもりか――！」
　それが合図となった。チコリが縛めを解かれた今が好機とみたケサンは袖口に隠していたナイフをさっと取り出すと、クツァルに向かって投げつけたのだ。
　クツァルは避けざるを得ない。
　その一瞬の隙に、ケサンは地面に転がった剣を拾い上げる。慌てたようにクツァルは立ち上がり直進してきた少年に魔法による光弾を放った。王国一ともいわれた魔法使いの必殺の一撃である。
　だが、ケサンはそれを避けようともしない。
　携えた剣を振り下ろすと、唐竹割りに光弾を両断した。
――虚魔の剣。
　それた光弾はそれぞれケサンの両脇に着弾する。激しい衝撃音とともに、石床が爆ぜ、瓦礫が宙を舞う。
　ケサンの体躯がそこから更に加速した。
　魔法の威力の残骸をあっという間に置き去りにして、自らの間合いにクツァルを追い詰める。
　柄。
　と、右下方に構えた剣を翻すと、逆袈裟に斬りあげる。
　二人の影が交差した――。

――光を失ったチコリには、その全容を窺い知ることはできない。
　ただ、音だけが、詳細にその断片を伝えてくれた。
　床を蹴って駆ける音。石床が爆ぜる音。そしてクツァルが息を呑む声なき声。
　そして――
　ドサリ。
　と、クツァルかケサンか。そのどちらかが床に倒れ伏す音が聞こえた。
　決着がついたのだ。
　突如として訪れる束の間の静寂。
　チコリは緊張のあまり時が止まったのかと錯覚しそうになった。だが、それも長くは続かなか

った。
　すぐさま勝利者となった攻防の片割れが口を開いたのだ。
「――フン。魔術師如きが私に敵うと思ったか」
　クツァルの声だった。
――ケサンが斬りかかる、あの刹那。
　クツァルは身に降りかかる刃を避け得ないとしるや、逆に一歩踏み込んだ。そして踏み込んだ勢いを利用し、ケサンを軸に体を回転させると、攻撃力の大半を受け流した。その間、魔法の力を込めた右手はケサンの胸を性格に捉えていた。
　単純な魔法の強さだけではない。
　戦いのなかで力の流れを見極め、理法をもって、その流れを利する。幼少より培った暗殺術を結実させた王国最強の魔法使いの真髄だった。
「ケサンッ！」
　チコリが悲鳴をあげた。
　床に倒れた姿勢のまま、ケサンがいると思わしき方向に這い寄った。その指先に何かが触れた。ドロリとした生暖かい液体がチコリを濡らす。
（――血だ）
「ケサンッ！」
　チコリはもう一度少年の名を呼んだ。だが返事はない。
　一方でクツァルは少女の鬼気を帯びた気迫に、思わず後ずさると、ケサンから距離をとった。それは動物的本能による行動ではあったが、それを自覚したとき、クツァルは自分の直感を否定し、それを意識的なものだとして自身を納得させようとした。ケサンの一撃は致命傷ではないものの、クツァルのわき腹に傷を与えていた。その回復のために、大事をとったに過ぎない。
　そうでなくば、最強の魔法使いである自分が少女に恐れを抱いたことになる。そんなことはありえない。いや、そのありえないことが起きたということになる。
　クツァルの背筋を冷たい汗が流れた。
「ケサン」
　あえぐように荒い息を吐き続ける少女の動きが止まった。
　伸ばした腕の先に、少年の体を見つけたのだ。
「ケサ――」
　と、言いかけて、それからは言葉にならなかった。
　チコリはケサンがもはや助からないことを悟ったのだ。
　言葉のかわりに、涙が頬を伝っては次々に流れ落ちた。
「さあ、これでわかっただろう」
　それまで沈黙を守っていたクツァルが声を発した。
「その少年のようになりたくなければ、私に従いたまえ」
　チコリは思わず、
（ふざけるな――！）

と吠えそうになったが、ふいに伸びてきた手がそれを制した。
ケサンだ。
意識を取り戻したのか、弱々しい動きでチコリの腕を掴んだ。
「チ……コリ……」

「ケサン、いい。いいから、喋らないで！」
　少年はなおも何か言おうとしたが血渋きに嗄れた咳でその声は途切れた。しかし、少女にはケサンが言おうとしていることが、言葉に聞かずとも、理解できた。不思議なことに、少年の手から伝わってくる体温が、微かな息遣いが、それを教えてくれた。
「ま、まさか……」
　そして、そのあまりの内容にチコリは体を強張らせた。
「クツァルの言うとおりにしろと仰るのですか？」
　ケサンの手にわずかに力が込められた。それは肯定の証。
「何故――？　何故なのです！　世界がどうなってもいいというのですか？」
　少年からの答えはない。チコリはなおも問いかけ続ける。
「クツァルを倒すには強い心がひつようだと仰ったではないですか！　命を賭けてでも誰かがやらなくてはならないと！　そう仰ったではないですか！」
「……君……は」
　消え入りそうなケサンの声が聞こえた。いかにも苦しげで、もう限界が近いことを示していた。チコリの瞳からまた大粒の涙が零れる。
「……死んじゃ……ダメだ……」
「どうして！」
　チコリは叫んだ。
　いくら王姫であるとはいえ、どうして自分の命を世界の命運と天秤にかけれるというのか。そのうえで、どうしてケサンは少女の命を選択し得るというのか。
　短い言葉ではあったが、チコリが言おうとしていることがわかったのだろう。少年はゆっくりと口を開いた。
「……君の……ことが――」
　しかし、その先は聞けなかった。
「ケサン」
　慌てて少女は声を荒げた。少年がその力すら失ったかと思ったのだ。
　だが、違う。
　何時の間にか少女を取り巻く世界の全てが静寂に包まれていた。
　少女は気づいた。
　ここにきて、遂には自分が聴覚までも失ったことを。
「ケサン」
　チコリはもはやその手の温もりからしか、その存在を感じることのできない少年の名を呼んだ。わずかに少年の指先に反応があったが、やはり鼓膜を通して伝わってくるものはなかった。
「ああ、ケサン！　聞こえない。聞こえないのです」
　チコリは今や泣き叫ばんばかりに少年の名を呼んだ。
「声も……聞こえない。ケサン……もう……聞こえないのです。ケサン……ああ、ケサン」
　だが、果たして死にゆく少年に、少女は何を求めて、そして少女はどこまでそれを自覚していたものか。

もはや二人の間には、最期の瞬間を交わすための言葉すら残されていないのだ。
その時だった。
ふと、少年の手が伸びてきて、少女の涙を指でぬぐった。
「……ケ……サン――？」
それから、少女を慰めるように、頬を優しく撫でると、それが最後の力だったのだろう。まるでロウソクの炎が消える瞬間のように、パッと力を失い、少年の手が少女の頬から零れ落ちた。
「あっ――」
と、チコリは声をあげた。ケサンの死を悟ったからではない。
四散していくケサンの生命の流れが雨の雫のように、チコリのなかに流れ込んできたからだ。それはケサンの生命の最期の欠片であると同時に少年の心そのものであった。
少女は知った。
ケサンにとって少女の存在は、王姫というだけのものではなくなっていたことを。そして、それが騎士である少年にとってどれだけ重大な意味を持つのかも。
旅の途中、幾度となくケサンの優しさに触れてきたはずなのに、何故ケサンを信じ切れなかったのだろうか。そこには、打算などではない、溢れるような真情があったではないか。
皮肉といえば皮肉であった。
チコリは今まで言葉や仕草をもってしてケサンの心を推し量ろうとしていたがために、逆にクツァルの言葉によって惑わされた。
だが五感のほぼ全てを失うことで、心の感じるがままにケサンを信じることができた。自分のなかに流れ込んでくるケサンの心に全てをただ委ねることができたのだ。

チコリは少年の手を離すと、ゆっくりと立ち上がった。もう泣いてはいなかった。
少女の周囲の待機がまるで鳴動するかのように渦をなす。
――ケサンは死んだ。
そこには、冷たい、そして確かな感触があった。
だが、それは同時にある重大な変化を少女にもたらしていた。
ケサンの生命が消えうせる瞬間、チコリは巨大な力の奔流が自分の中に流れ込むのを感じた。
――心の感じるがままに。
それこそが魔法使いにおいて、最も重要な心の在り方だった。自然物としての人間は本来、世界の流れの一部でありながら、肉体を持つがために、自分と世界との間に隔絶を生む。魔法使いは無限の精神を有限の肉体から解き放ち、マナにその精神を溶かしつくすことによって、流れと一体化し、導き、自らの理とする。
それこそが“淀める者”といわれた魔法使いの深奥であり、チコリは五感を失い肉体の意識が希薄になったこと、さらにはケサンの死でかつてないほどに神経を研ぎ澄まされたことによって、その境地に辿り着いた。
チコリは自分が魔法使いとして、王国一といわれたクツァルを遥かにしのぐ強大な力を手に入れたことを知った。
もう少女に迷いはなかった。
自分をここまで導いてくれた少年が死を賭して教えてくれた大切なこと。自分が最後まで譲れなかったもの。
（あたしは……）
――王家が生み出した怪物、クツァル。
強大な力を持ちながら、呪われた運命のために、血みどろの道を歩み、それ故、世界を滅ぼそうとした恐ろしい魔法使い。
確かに一度はクツァルの信念に屈し、自分の道を見失った。
あるいは、クツァルの言うとおり、この世界は一度滅びるべきなのかもしれない。
だが、それでも――
（――それでも、あたしはこの世界を愛したい）
チコリは渾身の魔法を放った。それは防ぐことも避けることもできない神をも殺す魔法。全てを灰にする光の一閃が、白い軌跡を描いた。
――天空に向かって。
チコリは魔法を放ったばかりの腕をダラリと下ろした。
少女はクツァルを殺さなかった。
クツァルの位置は目も耳もなくとも、大気の流れから感じ取ることができた。それでも少女は明確な意思をもって外したのだ。
「クツァル！」
少女は叫んだ。
「あなたはもはやあたしには敵わない。でも、あたしはあなたを殺しません！」
少女は言った。

　そして、それこそが少女の選択だった。
「あたしはあなたのしようとしていたことを決して許すことはできない。でみ、数多の憎しみが今のあなたを生んだように、憎しみは新たな憎しみを生むだけだとあたしは知っています。だから、あたしはあなたを否定しますが、滅しはしません！」
　あるいは今この瞬間にも、クツァルが少女に向かって魔法を放つかもしれない。そんな死地にありながらも、なお少女は声をあげるのをやめようとはしない。
「たとえ、あなたの望みが叶ったとしても、世界は決してあなたの思うとおりにはならない。何故なら、人は力では変わらない。人を変えるのは、力ではなく、強い意志です。人間の素晴らしさを拒絶するあなたには誰もついていかない。世界の滅びの果てに、あなたが得るものは後悔と孤独です」
　チコリの胸のなかには、これまでの人生が走馬灯のように浮かんでは消えた。
　家族のこと。アリスたちのこと。クロウ男爵とハン族の男たち。そして、ケサンのこと。
　返しきれないほど沢山のものを貰った人たちもあれば、理解りあえないまま、敵となった人たちもいた。
　だが、今のチコリがあるのも、その全ての人たちの存在があったからだ。
　だからこそ自分を信じることを、もう恐れはしなかった。
　罪も過ちも、全てを受け止めて、この世界を愛そうと決めた。そして、それはクツァルですら同様だった。
「犠牲などなくとも、世界は変わっていけます。その歩みは遅くとも、人はより良い方向に進んでいくことができます。そして、それを信じない者には、たとえ世界を変革する魔法すら何の意味も持たない。間違ってしまえば、壊すしかなくなるからです。本当に強い力は、心に宿るのです」
　チコリは虚空に向かって、吼え続ける。
「あなたがそれでも世界を憎むというのなら、あたしが変えてみせる。この力であたしが世界を変えてみせる。だから、もう止めましょう！　クツァルっ！」
　ケサンがいれば、甘いというかもしれない。
　それでも、それこそが最後まで少女が譲れなかったものだった。
　だから、たとえそのためにどのような結果にとなったとしても悔いはなかった。
　と、
――グニャリ
　ふと、足元が歪んだ。チコリはたちまち平衡感覚を失う。
　とうとう、最後の触覚さえも失う時がきたのだ。
　だが、不思議にチコリは安らぎさえ覚えていた。
　恐怖も後悔もなかった。
　ただ透明な闇が少女の体を満たしていき、その闇が満ちきったとき、まるで吸い込まれるかのように、少女は意識を失った――。

　沈んでいく。
　闇がどこまでも、沈んでいく。その闇のなかに、ひとつの体がある。
　チコリの体だ。
　と、チコリの体がふわりと空中に着地する。闇はさらに沈む。少女は残される。
　そして、チコリは光の世界に浮かび上がった。

――チコリは目覚めた。

「――お目覚めですか？」
　誰かが言った。
　チコリは自分のベッドのなかにいることを知り、上体を起こすと、声のする方に顔を向けた。最初はあまりの眩しさに目がくらんだが、やがて慣れてくると、視点は目の前にいる人物に焦点を結んだ。
　そこには老婆が立っていた。
「どうやら」
　と、老婆は言う。
「蛇の世界はお気に召さなかったようですね」
「ヘビノセカイ？」
　言葉が頭のなかで上手く像を結ばず、チコリは小首を傾げた。それから思い出したように、声をあげると、あたりを見渡した。
　少女に残る最後の記憶。
　クツァルを前に、少女は五感の全てを失い、意識が途絶えた。
（自分は死んだのか――？）
　どうやら、チコリは石造りの部屋にすえられたベッドに寝かされているらしい。そういえば、五感も元通りになっている。
（ここは天国だろうか？）
「いいえ、違います」
　まるで、チコリの心を見透かしたように、老婆が答えた。
「あなた様は死んではおりません」
「え！」
　チコリはまばたきを繰り返した。
「ここは蛇の屋敷です」
「蛇……？　それにおばあさんは一体？」
「私はこの屋敷の召使で、サリマンと申します」
　少女の問いにサリマンと名乗る老婆は慇懃に答えた。
「そして蛇とは、この屋敷の主の名がガウル神話に語り継がれる翼を持った蛇の姿をした嵐の神

に由来することから、そう呼ばれております。私ども召使は、蛇に仕えど、敬い奉してはおりません。そのため、主なき時には、あの男のことを蛇と呼びます。もっとも、その召使も今では私だけとなってしまいましたが」
「神の……名？」
「ご存じのはずでしょう？　その神の名とはクル＝クァール。クツァルとはクル＝クァールの御真名でございます」
「――ッ！」
　チコリはその言葉にすぐに反応できなかった。それは目覚めたばかりで頭が完全に覚醒していなかったからだけではないだろう。
「……ということは」
　と、チコリは言った。
「クツァルは私の言葉を聞き入れてくれたのですか？」
　それが、今の状況から下したチコリの結論だった。
「いいえ、違います」
　だが、サリマンはそれにも首をふった。
「もっともあなた様の行動が蛇にとっても予想外のものであったことは間違いありませんがね」
「一体、どういうことですか？」
　チコリは思い切って、直接的に尋ねた。
「もちろん、あなた様には全てをお話します。蛇の本当の罪ともいうべき真実を」
　それから、サリマンは部屋の棚から、服を一式と靴を取り出すと、チコリに手渡した。
「話をする前に、まずはお会いしていただきたい者がおります。廊下で待っておりますので、この服を着替えたら、おいで下さいませ」
　チコリはそこで初めてシーツに包まれた自分の体が一糸まとわぬ裸であったことに気がつき、顔を赤くした。
　その間に、サリマンは部屋を出て行った。
　よくわからないが言う通りにするしかないだろう。

　チコリは服に袖をとおすと、靴を履き、念のため用心しながら、部屋の扉を開いた。
「こちらでございます」
　ぬっ、と突如としてサリマンが現れたように感じたのは、サリマンが手に持ったランプの光に照らされて、その顔に濃い陰影が作られていたからだろう。
　そう、何故かサリマンはランプを手にしていた。
　廊下は太陽と反対方向にあるのか、部屋と比べて薄暗いが、それでも灯が必要というほどではない。
　しかし、チコリが疑問を差し挟むより早く、サリマンはツカツカと歩き出したので、少女は慌ててそれを追いかけた。
　やがて、サリマンはある扉の前で立ち止まると、少女の方を振り返った。
「この部屋です」
　サリマンが扉を開くと、古くなっているのか軋んだ音をたてた。チコリの角度からだと部屋の中はうかがい知れない。
　先導したサリマンに招かれて部屋へ足を踏み入れると、湿った空気が鼻の下を撫でた。
　そこは陰鬱な部屋だった。
　窓がなく、空間そのものが外界から隔離されており、サリマンが用意したランプがなければ、あたりは完全に闇に包まれていただろう。
　だが、物理的な要因よりも、この部屋から感じる重々しさは、その鬱蒼とした雰囲気に起因しているだろう。
　ランプの光の先には、ベッドがあり、誰かがその中で眠っている。
「どうぞ、こちらへ」
　そう言って、サリマンはランプを枕元に寄せる。チコリは歩み寄って、その顔を覗きこんだ。
「……ケサン！」
　チコリは驚きの声をあげた。
　そこに眠っていたのは、少年騎士ケサンであった。
　チコリは思わず手を伸ばした。
「いけませんっ！」
　突然、サリマンが大声をあげる。
　少女はびっくりして、反射的に手をひっこめる。それと同時に毛布の隙間という隙間から、何かがチコリの手を伸ばした先に向かって、襲いかかってきた。
　それは十数匹におよぶ蛇であった。色とりどりの模様を持ち、全て種類が違う。当然チコリが知っている種類の蛇もいれば、初めてみる蛇もいた。
　一瞬、早く手を引っ込めたため、怪我はなかったが、まるでベッドに眠る人物を守るかのように、鎌首をもたげ、チコリを威嚇する。
「危ないところでした」
　サリマンは嘆息を漏らした。チコリは無意識的に目で蛇の数を数えた。全部で十一匹。いや、遅れて枕元からモゾモゾと一匹のマムシが姿を現すと、これだけはやる気がないのか、チコリを一瞥もせず、毛布に頭を静めた。

　全部で十二匹。
「この蛇たちは魔法使いが使役する使い魔で、眠れる主をこうして守っているのです」
「ケサンは……生きているのですか？」
　チコリは尋ねた。ベッドに眠るケサンは、血の跡もなく、まるで生きているかのように見えたからだ。
「いえ、そこに眠る者はケサンではありません」
　しかし、サリマンは別の意味で思ってもみなかったことを言った。
「その方こそ、この館の主である蛇――クル＝クァールが現当主クツァルでございます」
「え！」
　チコリの目はベッドに釘付けになった。そこでチコリはあることに気づき「あっ――」と声をあげた。ケサンは若々しい十代の少年であったが、そこに眠るのは二十後半と思われる大人びた男であった。だが奇妙なことに、その顔は確かにケサンのそれなのである。まるで、ケサンがいつの間にか十年ほど年を重ねたような……
「……どういうことですか？」
「さて、何から話したらよいものか……」
　困惑したような態度とは裏腹に、サリマンの声は落ち着き払っている。
「そうですね。やはり順を追ってお話しましょう。そのためには、時間を始まりの時に遡らねばなりません」
「はじまり……」
　チコリはまるで話に誘い込まれるように、サリマンの言葉を反芻した。
「そう。あなた様が蛇を追うようになった始まりの時についてでございます。あなた様は蛇について、どんな話をお聞きになりましたか？」
「確か……王国一の魔法使いであると」
「それから？」
「そして、その力を持って、世界を滅ぼそうとしているのだと」
「……フフフ」
　サリマンは忍び笑った。

何故笑うのか、チコリには理解できず眉根を曇らせた。
老婆は言う。
「これが笑わずにいられましょうか。蛇の——あの不器用な男らしい滑稽な話でございます。蛇の自己愛は、奇しくも蛇蝎がそうであるが如く、人から忌み嫌われるという暗い情念をもってしか規定できないものであったのです。真実はまるで逆であるといういうのに」
チコリには意味がわからない。しかし、まだ種々のショックから立ち直れずにいたため、何か言おうとしたが、考えが上手くまとまらず、結局は口をつぐんだ。
サリマンはそんなチコリの様子をみて、
「人間とは——」
と、一見今までの流れからすれば、関係のなさそうな話をはじめた。
「人間とは、本来この世界においてケシ粒のような存在でございます。ケシ粒がゆえに、儚げで、可憐であり、そしてそれ故に哀れな存在でございます」
チコリはなおも黙ったまま頷いた。共感したわけではなく、むしろこの少女なりに言いたいことがないではなかったが、話の腰を折らないように、口を挟むのを差し控えたのだ。
「蛇はそんな人間を憎んでおりました。そして憎み、憎み、憎み続けたうえで、ついには憎みきることができなかったのでございます。蛇はよく申しておりました。自分は人間の愚かしさを誰よりも骨身に沁みて知っているだけに、いっそその愚かさがいじらしくもあると」
それからサリマンは天を仰いだ。しばらくして、チコリに視線を戻したが、皺に隠されて深く窪んだ双眸からは何の感情も読み取ることはできない。
サリマンは続ける。
「人間はなにも苦しむために生まれてくるわけではありません。それにも関わらず、人は誰しもが、より良き生き方を望みつつ、かえって、そのために不幸を味あわねばなりません。その業の深さ、哀れさはどうでしょうか。いじらしいといえば、これほどいじらしい存在もないでしょう。しかし、その最大の不幸は、人がただ世界に従属すべき存在ではなく、むしろ世界の主たるべき勢いで繁栄するほどの知恵を身につけていたことにあるのです。そして、今やその人間のために世界は滅びつつあります。蛇がそれを知ったのは、まだ蛇が王家に仕えていた頃のことです」
「人間の……ために？」
と、思わずチコリの口から言葉がついて出たのは、あまりの事態に頭がついていかず、それを整理するための、いわば肉体的な反射であったが、サリマンはそれを言葉のままに受け取り、
「その通りでございます」
と、言った。
「ご存知のように、世界はマナによって支配されています。しかし、マナはそれ自体が超然としてあるものではなく、あらゆる現象や事物に相関し、影響されあいながら存在するものでございます。水が低きに流れるが如く、善き流れは、善きマナとなり、豊かさと潤いを生み出す反面、悪しき流れは、悪しきマナとなり、渇きと滅びをもたらします。そして、人間は多年に渡って、マナに悪しき影響を与え続けてきました。なぜなら、人間の持つ根源的な不幸は、妬み、嫉み、悲憤、恨み、苦悩、裏切りといった悪しき心を生み、それがために悪しき流れをも生んだから

です。世界は蛇の魔法で滅びようとしているのではありません。悪しき流れが累積し、ついにはマナの流れすらも決定的に歪めたために――つまりは人間が持つ自らの罪によって滅びようとしているのでございます。そして、悪しき流れは、また新たな不幸を呼ぶため、その滅びは今や加速度的にその歩を速めております」
　しかし――
　と、サリマンは語を継いだ。
「しかし、クツァルは世界を救おうとしたのです。あれだけ世界に愛されなかった男も珍しいというのに、世界の崩壊を知るや、それを食い止めるため、王宮をあてにはできぬと見限り、数人の召使とともに密かに出奔され、世界を救うための、たった一人の戦いに身を投ぜられたのです」
「そんな……」
　頭をガンと殴られたような衝撃に、チコリはようやくそれだけを絞りだした。
「まったく馬鹿な男でございます」
　軽侮するように、サリマンは吐き捨てた。
「いくら蛇が大きな力をもっていようとも、世界を変えることなどできようはずがありませんでした。しかし、蛇は自らのクル＝クァールの血と誇りにかけて、それをしようとしたのです。世界を救うための、絶えまざる挑戦。そして、その結果として常につきまとう失敗と敗退。さしもの蛇も自分の力ではどうにもならぬと気がついたのでしょう。とうとう最後の手段に出たのです。古来より魔法使いは淀める者といわれております。蛇はその魔法使いの力を持って、世界の滅びをその身に留めようと考えたのです。――マナを淀め、悪しき流れだけを自分の内に淀めることによって、マナの流れを清浄化しようとしたのです。いわば蛇は己が身を悪しき流れの濾過装置とすることで、世界を救おうとしたのです。もっとも、それは世界中のあらゆる苦悩と不幸を一身に引き受けるということでもあります。そんなことを一人の人間が何時までも続けようはずがありません。すぐに蛇の精神は衰弱し、その体は目に見えて衰えていきました。しかも蛇の憐れなところは、そこまでしても世界の滅びを救うことは出来なかったということです。確かに蛇の捨て身の行動は世界の崩壊を緩やかなものにしましたが、その滅びへの歩みは決してとまりはしませんでした。王国一の魔法使いと謳われた蛇の命がけの意地ですら、世界の運命を変えることはできなかったのです」
　さらにサリマンは言う。

「それでも蛇は引き返そうとはしませんでした。たとえ世界の滅びを遅らせるだけであったとしても、蛇は自分の力を誰かのために使えるなら本望だと申しておりました。いえ、あるいはそれこそが血に塗れた自分の前半生への贖罪だと考えていたのでしょう」
　と、ここでサリマンは話をやめた。
　よほど、チコリの顔色がすぐれなかったのだろう。
「ついつい長い物語となりましたが、あなた様はまだ目覚めたばかりでございます。少しお休みになりませんか？」
　と、尋ねた。
「いえ、大丈夫です！　それよりも早く話の続きを！」
　チコリは首を振った。体がやけに重たいのを自分でも感じていたが、到底ここで休む気になどなれなかった。
「それでは、せめて少し外気にあたりましょうか。ここの空気は濁っていますから」
　そう言って、サリマンはチコリを廊下に追いやると、自分も部屋を出て、扉を閉めた。
「どうぞ、ついてきてください」
　サリマンは来たときと同様、先導する形でゆっくり歩き出した。チコリはその後を追いかけながら、その背中に言葉をかけた。
「あの……早く続きを」
「もちろん、そのつもりでございます」
　背中が微かに揺れたのは、またあの忍び笑いを浮かべているのかもしれない。
「時の呪法――」
　と、サリマンは話を切り出した。
「クル＝クァールには代々そんな禁呪が伝えられておりました」
「かつてケサンから聞きました。確か肉体と精神を永遠のものにすることができると」
「ええ。その通りでございます。蛇は自分の身に悪しき流れを引き受けることを考えた際、最初からその禁呪のことを考えていたのでしょう。自分の体が保たなくなれば、時の呪法をかけて、永遠に命を生き延ばらせることで、生きたままこの世界の人柱石となろうと。しかし、不老不死などといえば聞こえはいいものの、永遠など何ほどのものでありましょうか。時の呪法は肉体を時の狭間にとどめることによって、まるで深い眠りにつくかのように生き続けることができますが、しかして、その精神は孤独な闇を永遠に漂い続けることになります。永遠の孤独。果たして人間の世に、これほどの地獄がありましょうか。とうに命を捨てることを覚悟していた蛇ですら、時の呪法を用いることだけは、なかなか踏ん切りがつかなかったようです。ですが、蛇の衰弱は日に日に激しくなっており、もはや予断は許されないことは傍目にも明らかでした。そんな時のことですよ――」
　階段に差し掛かった。
　サリマンは急に足を止めると、振り返ってチコリの顔をみつめた。
「――蛇があなた様のことを知ったのは」
「……あたしを？」
　チコリはつられたように立ち止まると、体を強張らせた。

「ええ。当時、蛇は一縷の望みを託して、自分の助けとなるべき力を持った魔法使いを探しておりました。そこで蛇はあなた様を見出されたのです。もっとも、あなた様は稀な魔法使いの才能を宿しておりましたが、到底、蛇の助けとはなりませんでした。ところが、その人生の多くを陰謀渦巻く宮中で過ごし、人間の醜さをずっとみてきた蛇にとって、貧しいながらも家族を愛し弱音を吐かないあなた様の気高さ、清らかさは、目を洗うほどに眩しく映ったのです。蛇は瞬く間に、その一人の少女に惹きつけられました。蛇はあなた様に心を奪われたのでございます」

サリマンは視線を戻すと、階段を登りはじめた。

だがチコリは息をするのを忘れたまま、一歩も動けなかった。

「蛇によって生涯でたった一度の恋。その恋慕が蛇をして、恐ろしい計画に駆り立てました。蛇は、あなた様への恋心に囚われ、執着したあげく、とうとうそれを遂げようとなさったのです。とはいっても、穢れた蛇では美しいあなた様に相応しくないことは言うまでもありません。そこで蛇は、自分の中にわずかに残っていた少年の精神——つまりは勇気や冒険心、優しさ、さらには誇り高さ、そして純粋さ——だけを切り離して、もう一人の自分とも言うべき、あなた様に見合った人格を造り出しました。しかし、それだけではありません。蛇の計画がなによりも恐ろしいのは、それと同時に、時の呪法によって、永遠の闇に漂うべき自らの残された精神を、いっそ殺してしまおうとしたことです。それも愛するあなた様の手にかかって——」

チコリがついてきていないことに気づいたのか、サリマンは階段を少し登ったところで、足をとめた。

しかし、振り向こうとはしない。チコリに背中をみせた姿勢のまま、話を続ける。

「蛇の計画の全容はこうです。蛇は、まずあなた様に気づかれないよう、術をかけることによって、その心を魔法使いクツァルの精神世界に引き込みました。さらには、その世界において、もう一人の自分である少年を案内人に、魔法使いクツァルを滅するように誘導し仕向けたのでございます。もうお気づきでしょう？　その少年の精神こそが、即ち騎士ケサン——！」

「まさか——」

「そうお思いになるのも無理はありません。そして、それこそが蛇の狙いだったのです。お考えになってみてください。クツァルはあなた様に五感を奪う死の呪いをかけましたが、そのためにあなた様は魔法の深奥に触れられた。あなた様はこれが偶然によるものだとお考えだったかもしれませんが、クツァルともあろう者が、それを知らぬはずがなかったのです。全ては蛇のシナリオのうちだったのでございます。そして、途中、予期せぬ出来事もあったようですが、それすらも上手く利用して、事態は蛇の望むがままにすすみました。あなた様は少年の蛇と共に、魔法使いクツァルの世界を旅し、いつしか少年に心を寄せるようになっていたはずです。そして、蛇の計画では、最後にあなた様はあのままクツァルを滅する予定だったのです。もしそうしていれば、死せる蛇の精神が生み出した夢の残滓ともいうべき偽りの世界で、あなた様は愛する少年といつまでも幸せに暮らすことができたのです」

「そんなはずありません！」

チコリは叫ぶように言った。

「だって、ケサンは死にました！」
「ホホホ」
　サリマンは声をあげて笑った。
「己が分身を自ら殺すなどあり得ないこと。それは魔法使いクツァルの死に巻き込まれないよう、一時的に避難させたに過ぎません。あの後、少年騎士ケサンはあなた様の愛の力によって生き返るはずだったのです。あの世界は蛇の世界でございます。それくらいの奇跡は造作もないこと。それにあなた様はご存知のはずです。先ほど、ベッドに寝ていた男。時の呪法で肉体を時の狭間にとどめる蛇の顔が、少年騎士ケサンと同一のものであったことに」
　チコリは黙り込んでしまった。
「納得されましたか？」
「では、あたしが王家の血を継ぐというのも？」
「もちろん、蛇の作り事でございます。蛇はあなた様と永遠に暮すためには、王宮こそが相応しいと考えていたのでしょう」
「……」
　チコリは黙り込んでしまった。
「ただ、自体は計画通りに進んでいたにも関わらず、蛇はたったひとつだけ重大なミスを犯しました」
　サリマンはゆっくりと振り返ると、まっすぐな目でチコリの全身を刺した。
「それは、あなた様の心を計り間違えたことでございます。あなた様の清らかさは、蛇をすら、殺すことは選ばなかった。あなた様は蛇の世界を拒絶したのでございます。そのため蛇は心を閉ざし、あなた様は現実世界に戻ってくることができたのでございます」
　それから、サリマンは階段を昇りきると、テラスに通じる扉を開けた。
　薄暗い廊下に光が差し込んでくる。まるで、その光に誘われるかのように、チコリはフラフラと足を前に踏み出した。
　外に出た。
　風が吹き抜ける。辺りを見渡して、少女はこの屋敷が砂の海原の上に建っていることを知った。
　傾いた夕日が、世界を赤い薄闇に沈め、地平線の彼方では、稜線が空と混ざり合い、溶け合いながら消えていく。
　光を反射した砂の粒がキラキラとチコリの目を刺した。
「……綺麗」
　チコリは思わず声をあげた。
「――七年」
　と、いつの間にそこにいたのか、後ろにサリマンが立っていて、そこから声が聞こえた。
「え？」
「心と殻では過ぎ行く時は違うもの。肉体に変化がないためお気づきにおなりではないかもしれませんが、あなた様が蛇の世界に入り込まれてから、既に七年が過ぎております。そのあいだ、世界はますます滅びへの歩み早めております」

「七年……」
　そう呟いたチコリは、その言葉を口中で繰り返してはみたものの何の実感も湧かなかった。少女は自分の処理能力をはるかに超えた驚愕と当惑の連続のなかで、
「私はいつからクツァルの世界にいたのでしょうか？」
　と、小さな疑問をもった。
「奴隷馬車より、一歩足を踏み出した瞬間からでございます」
「私の家族はどうなっていますか？」
　少女は続けて問う。
「……」
　しかし、沈黙。
　チコリにとって、覚悟はしていたものの、重たい沈黙だった。サリマンはスッとチコリの隣に立つと、遥か彼方に目を向け、ことさらに話題を逸らした。
「この場所から望む光景は蛇が愛した景色でございます。蛇はよく申しておりました。この死の大地は無垢の世界であると。いまは世界は大半がその無垢の世界になりつつあります」
　それからサリマンはチコリの顔をのぞくようにして言った。
「あなた様にはお詫びの申し上げようもございません。蛇はあなた様から全てを奪ってしまわれた。せめて、とは申しませんが、あなた様には出来る限りの贖罪をさせて頂きとうございます。故郷に帰られるというならそれもいいでしょう。人里というには余りに荒れ果てた世界となってしまいましたが、せめてあなた様が生涯を過ごせるようには、万難を排して、手筈を整えさせていただきます。もっとも、あなた様が望んでも、蛇への復讐だけは叶わぬこと。なにせ、その肉体は不滅の眠りにあり、その精神は永遠の闇を彷徨っているのですから」
「ひとつだけ……」
　とチコリは口を開いた。
「ひとつだけ、お聞かせください。クツァルはもう目覚めることはないのでしょうか？」
「蛇が申していたことによりますと、世界が滅びきって、いつしかマナが正常な流れに戻った暁に目覚めるはずでございます。もっとも、それが何時のことになるかは神のみぞ知る。早くても数十年後か、あるいは数百年後か……」
「ですが、その言い方ですと、マナの流れさえ正常になれば、世界は滅びずともクツァルは目覚めるのではありませんか？」
「理屈のうえではその通りでございます。もっとも、今や世界は不幸と苦悩の悪しき流れに満ちており、それがために新たな不幸が生まれるという負の連環のなかにあります。世界中からあらゆる不幸がなくならない限り、そんなことは不可能でございます」
「つまり――」
　と、チコリは視線をサリマンに向けた。
「世界中から、あらゆる不幸が取り除かれれば可能ということですね？」
「え？」
　サリマンが細い目を見開いて、驚きの声をあげた。

「あたし、クツァルを恨んでいません。確かにサリマンさんのお話を聞いて、ひどくショックを受けました。でも、あたしこの景色をみて思い出したんです。クツァルの世界は悲しいことも多かったけど、決してそれだけではなかったと。あの世界がクツァルの心だったとすれば、あたしに世界の素晴らしさと美しさを教えてくれたのも、またクツァルの心です」
「ま、まさか……」
「あたしはクツァルを救います。クツァルの気高い自己犠牲の精神が世界を救おうとしたというのなら、彼の孤独を扶けるものは、勇気ある友愛であるべきです。世界を変えたいというあたしの希望（ねが）いがクツァルの心を閉ざしたのなら、あたしにはそれを救う責務があります」
「そんな！」
「世界が不幸に満ち溢れているというのなら、あたしはそれを変えてみせます。あたしにはそのための力があります。世界を救うための旅に出ることが、あたしの望みです。サリマンさんも協力していただけますね？」
「なりません！」
　サリマンは首を振った。
「何故――？」
「そんなことは不可能だからでございます。不幸とは人間が生き続ける限り常に付きまとう業のようなもの。なればこそ、蛇もそんな手段をとろうとは考えもしなかったのでございます」
「考えもしなかったということは、試さなかったということですよね？」
「それは……」
「それに、他に方法はないんでしょう？」
「方法などというのは、その先に道があってこそ初めて意味を為すもの。世界を救うなどという大それた希望を抱いて、あなた様まで蛇と同じ絶望を味わうひつようなどないのです」
「道なき道に足を踏み出そうとする心の行き先を志といいます。そして道とは、志を標に自らが切り開くものです」
　チコリはきっぱりと言い切った。
「それに、あたしはクツァルの心を知り、それに応えるべく自分の心を決めましたが、まだサリマンさんの心をうかがっておりません」
「私の……心。で、ございますか？」
「ええ」
　チコリはうなずいた。
「サリマンさんはどうしたいか、です」
「私はそんな無謀なことに賛同するわけにはまいりません」
「無謀かどうかは心ではなく、理あってのこと。あたしが聞いているのは、サリマンさんの心が何を望んでいるかです」
　チコリの瞳がサリマンの胸に突き刺さる。
「私は……」
　サリマンは息を呑んだ。
「私は……」

　それから先は言葉にならず、唇を一文字に引き絞る。サリマンが瞼を閉じると、深い皺が顔中を刻んだ。
――この世には生まれてはならん人間もいる。貴様はこれからそんな男の乳母として生きるのだ。
　サリマンの脳裏をあの日の言葉がよぎった。
　それは、あの日の言葉を聞かされて以来、自分の感情を殺して生きるため、身に付けた鉄の仮面でもあった。
　サリマンはなおも顔中の筋肉を引き絞り、あらゆる皺を凝縮させたような渋面を作ったが、
「クツァル……様」
　固く結んだ唇の端から、一片の本音が洩れた。
　その感情のか細い漏洩が、サリマンの仮面をみるみる崩していく。まるで春の陽にあてられた雪のように、サリマンの表情は溶け、溶け出した感情が、涙となって皺くちゃの目から零れていった。もう、これ以上自分を偽ることはサリマンの強固な意思をもってしても不可能だった。
「……救い……たいです」
　それは消え入るような声だった。しかし、その声は確かにチコリに届いた。
「私はクツァル様をお救いしたいのです」
　嗚咽まじりであったが、今度はハッキリと聞こえた。
「ああ……。私は……救いたいのです。お願いです。どうかお願いです。クツァル様をお救い下さい。あの哀れな魔法使いを救ってやって欲しいのです」
　チコリは優しく微笑むと、力強くうなづいた。
「おお！　おお――！」」
　それをみて、サリマンその場にうずくまると、声を殺して泣いた。
（ああ……）
　チコリは思った。
（やっぱり無理してたんだ）
　少女は気がついていた。「蛇」と忌々しげに吐き捨てる老婆の言葉に、たとえようのない苦渋が滲んでいたことを。そして、それがクツァルの計画が破れた今、チコリへの贖罪のためにクツァルを殊更悪者とする、自分の本当の気持ちを押し殺した演技だったということに。
　サリマンの押し殺した声が静寂の世界に吸い込まれていく。
　どこまでも続く広い空だけが、沈みゆく残光をいつまでも赤く照らしていた。

――それから、五日後。
　ついにチコリが旅立つ時が来た。
　旅に必要なものは全てサリマンが整えた。
　これから、少女が歩む道程は誰も味わったことが無いほど過酷なものとなるだろう。
　しかし、サリマンはもう止めようとはしなかった。
「他に必要なものはございますか？　何でも仰ってください」
　サリマンは尋ねた。少女が旅立てば、もはやサリマンにしてやれることは何もない。チコリがまだ望むものがあるならば、協力は惜しまないつもりだった。
「最後に……」
　と、チコリは言った。
「クツァルに会わせて頂けますか？」
　サリマンはうなずいた。
　クツァルの眠る部屋は常に闇に閉ざされている。
　ランプに火を灯すと、サリマンはチコリを招じ、部屋へと案内した。
　ベッドのなかには初めてみた時と変わらぬクツァルの姿。永遠の眠りにつく魔法使いを守護する１２匹の蛇たちは、その傍らで静かに侍っている。
　チコリはクツァルの枕元に立つと、眠るクツァルに声をかけた。
「クツァル。あたしは行きます。きっと世界を救ってみせます。どうかあなたが目覚める日には、笑って今日のことを話せるように」
　ランプの光で浮かびあがるクツァルの青白い顔が、やけに白く映えた。
　チコリは薄く目を閉じた。
　ケサンとの出会いから始まった少女の旅。今、その旅が終わり、この瞬間からは、自分の足で踏み出す新たな旅が始まろうとしている。
　そして、今度は――
「ねえ？」
　チコリはベッドに頭を横たえる一匹のマムシの顔を覗き込むと、声をかけた。
「一緒に行きませんか？　ケサン？」
　マムシの瞳がたちまち丸くなる。
「なっ！」
　と、サリマンが驚きの声をあげた。
「……なんで」
　声がした。サリマンではない。今しがたチコリが声をかけたマムシが言葉を発していた。
「なんで、わかったんだ？」
「やっぱり！」
　チコリは笑った。
　あの瞬間、少年はクツァルの世界から避難させられていたと、サリマンは言った。
　では、クツァルから離れて、少年はどこにいたのか？
　そして、クツァルの精神が心を閉ざした今、帰る場所はあるのか？

　ふとした疑問から浮かび上がってきた推測。そして、ある違和感。それらは、やがてチコリのなかで、ひとつの線を結んだ。
「だって！」
　チコリは嬉しそうに言った。
　主を守るため防衛本能を剥き出しにして殺気立っていた蛇のなかで、唯一そ知らぬ体だったマムシ。
「サリマンさんと一緒だったんです。クツァルのことを気にしていない素振りをしてるのに、その実、無理をしているのが明らかだったんです」
「チコリ様！」
　サリマンが何か言おうと、話に割り込んだ。が、
「いいですよね？」
　その機先を制し、サリマンに目を向けると、了承を求めた。その目にどこか悪戯じみた色があるのは、何でも言ってほしいといったサリマンの言をたてにとって、念を押しているからだ。
　それに気づいたサリマンは、観念して笑った。
「もちろんです」
「でも……」
　マムシはなおも何か言いたいらしい。
「ケサン」
　と、少女はマムシに語りかけた。
「あたしをここまで導いたのはあなたです。今さら、あたしを見捨てるつもりですか？」
「そんなわけじゃ……」
　マムシは痛いところをつかれて、口ごもった。
「これからの旅は、あなたの物語ではありません。辛く苦しい旅になるでしょう。だから、あたしには助けが必要なのです」
「でも、僕は君にひどい嘘をついた」
「何も嘘なんかありません。これまでと同じようにあたしを助けて欲しいだけなんです」
「それに僕にはもう何の力もない」
「あたしに魔法を教えてくれたのは、あなたではありませんか」
「……僕でいいのか？」
「もちろん」
　チコリはうなずいた。
　瞬間、チコリの笑顔が弾けた。
「来ていただけますね？」
「……仕方ないな」
　マムシは大きく息を吐いた。
「僕も一緒に行こう」
　言葉とは裏腹に、どこか弾むように、マムシは言った。

こうして、一人の少女と一匹の蛇の、標なき旅が始まったのだった。

風が吹き、焚き火から熾った蛇の舌のような炎がチコリの瞳を赤く映した。
夜は更けている。
荒野を旅する老人――モンクはすでに眠ってしまったのか、もうずっと何も喋らない。
チコリはふと空を仰いだ。
――十年。
不用意に自分の口から出たその一言で、呼び起こされた在りし日の追憶がチコリの胸を急に締め付けたからだ。
夜空には満天の星。
その星々たちがたちまち輪郭を失い、視界のなかで溶けて混ざり合っていく。
（ダメだ――！）
チコリは自らを叱咤すると、今度は両手で抱えた膝の間に顔を埋めた。
「――泣いて……いるのかね？」
モンクの声が聞こえた。
少女はギクリと肩を震わせると、顔を膝に埋めたまま、プルプルと首を振った。それから、手で涙を拭うと、努めて平静を装って言った。
「もしかして、起こしてしまいましたか？」
「いいや、眠れんのじゃ。こうして人に会うのは久しぶりじゃから、妙に目がさえてしまってのう」
「そう……」
チコリは細い息をついた。それから、しばらく炎をみつめていたが、やがて思い詰めたように口を開いた。
「おじいさん……。あたしね。信じていたんです」
「信じていた？」
「はい。あたしには魔法がある。だから、この力で世界中の人を幸せにできるんだって、そう信じていたんです」
と、チコリはちょっと鼻をすすりあげた。
「でも駄目！　あたしには何が幸せで、何がそうじゃないのかがもうわからない。ザラスの村では水不足に悩む村人のために井戸を掘りました。でも、今はもうその村も、砂に埋もれてしまった風の噂で知りました。トリニテルの町では、盗賊の被害に苦しんでいたため、盗賊団を捕らえて、町の自警団に引き渡しました。そしたら、次の日、あたしがみたものは、町の人々によってなぶり殺しにされた盗賊たちの死骸でした。もう駄目なんです。いくら魔法が使えても、あたしには誰も幸せにできない。あたしは……あたしは何も変えられない」
まるで、ずっと抱えていたものを自分自身にぶつけるように、想いのたけを吐き出すチコリに、モンクは言葉のひとつひとつを噛み締めるように耳を傾けていたが、
「お嬢さんが背負っているものをワシはよく知らんし、お嬢さんの話から察する限り、聞いたところで、ワシでは何の役にもたたんじゃろう。じゃが、ひとつだけ言えるとすれば、幸せはそんなに難しく考えるもんじゃない。現にワシは今、充分に幸せじゃよ」
と、言った。

「嘘――！」
　チコリはうめくように声をあげた。
「何故そんなことが言えるんですか。世界はますます荒廃し、生きるために苦しみ、そのうえでなお、明日をも知れぬ日々を過ごさねばならない。それどころか、おじいさんに至っては、その年で身寄りを亡くして独りぼっちなのに。それに！　それに……」
　それまで眠ったままの姿勢で話を聞いていたモンクは瞼をあげると、ムクリと上体を起こし、チコリの言葉を制するように言った。
「お嬢さん、人間をなめるんじゃない」
　厳しい声だった。　その言葉を聞いて、チコリはハッと息を止めた。
　それから、モンクは優しげな声音に戻って、誰に言うともなしに呟いた。
「誰かに教えてもらわずとも、自分の体のことは自分が一番よく知っておる」
　モンクはゆっくりと煙管を取り出すと、火をつけて、大きく煙を吸い込んだ。
「お嬢さん、大事なのは幸せになることじゃない。幸せを感じる心を手に入れることじゃ」
　チコリは「あっ」と目を見開いた。
　それは奇しくも、少女の父親がよく言っていた言葉と同じものだった。
「上手くは言えんがの、死があるから生きる喜びがあるように、不幸があるから幸せもまたあるんじゃないかな？　息子たちに先立たれたのは確かに悲しいことじゃが、孤独になる悲しみを背負うのがワシだけで過んだと思えば、それはそれで良かったとも思えるんじゃよ。ワシのようなジジイでも、息子たちを想えばこそ、その分まで生きねばならんし、生きていれば、お嬢さんに出会えたように、愉快なことにも沢山出会える。よしんば、死んだら死んだで、妻や息子たちにまたあえるんじゃ。これほど愉快なことはない」
　チコリはうなだれたまま、また鼻をすすりあげた。
「のう、お嬢さん？　明日をも知れんから、人は旅をするんじゃないかな。まだ見ぬ明日を知るために、歩むことができるんじゃないかね。もしかしたら、お嬢さんが目指す場所は果てしなく遠いのかもしれん。今は地図もあてにならない時代じゃから、ひょっとしたら目指す場所にはずっと辿り着けないかもしれん。行く道もわからず迷い続けるかもしれん。じゃが、歩みを止めてしまえば、辿り着ける可能性すら決してなくなる。逆に言えば、歩み続けるかぎりは、たとえそれが思い描いていた場所ではなくても、どこかには辿りつけるはずじゃ。違うかのう？」
「はい……」
　チコリはモンクの言葉を噛み締めるようにうなずいた。
「さあ、もう寝なさい。明日も旅を続けるじゃろう？　サヨウナラが寂しくなるから、ワシは朝早くに旅立つことにするよ」
「……ええ」
　そう返事をしてから、チコリは言われたように、体を横たえた。
　まぶたを閉じると、どこか不思議な温もりが感じられた。
　チコリはもう何時ぶりかわからぬ安らかな眠りに引き込まれていった。

　翌朝、チコリが起きると、大分日が高くなっていた。
「お寝坊さんだね」
　すでに活動を始めていた蛇が嫌味たらしく、チコリに毒吐いた。
　チコリは周囲を見渡す。
「……おじいさんは？」
「さあ？　もう出発したんじゃないかな？　僕が起きたときには、もういなかったよ」
　蛇はチロチロと赤い舌を出した。
「まったく薄情だよな！　一言くらい声をかけてくれたっていいのに……」
　不満気な蛇にチコリはクスクス笑った。何が可笑しいのか、蛇はギョッとした様子だったが、気を取り直すと、言った。
「さあ、そろそろ出発しないと」
「うん」
　チコリは元気よく応えた。それから、チコリと蛇は支度を整えると、荷物を持って歩き始めた。
　足を踏み出そうとして、チコリはふとモンクが歩み去ったと思わしき方角を振り返った。
「どうしたの？」
　蛇が不思議そうに尋ねた。
「ねえ」
　と、チコリ。
「頑張ろうね！」
　突然、そんなことを言い出した、楽しげなチコリに蛇はなおも小首を傾げたが、仕方なくうなずいた。
　それから、チコリは足を踏み出した。ただ前だけをみて。
　少女の残した砂の足跡は、折りしも吹いてきた風にさらわれて、次の瞬間には、どこかに吹き飛んで、消えていった。

エピローグ

　少女と蛇が旅立つ日。
　蛇はサリマンと二人だけで話がしたいと言った。
　少女は了承すると、二人を残して、先に部屋を出た。
　残された一人と一匹はしばらく黙ったまま向かいあっていたが、蛇は視線を逸らすように、ベッドで眠るクツァルに目をやると、こんなことを言った。
「本当はサリマンに今までの礼を言いたかったんだ」
　それから蛇は薄く、乾いた笑いをたてた。
「でも、不思議だな。何て言えばいいのか、言葉が出てこないよ」
「お気になさらずとも結構ですよ」
　と、サリマンは言う。
「ようやく、あなたが望んでいた外の世界に出られるのではありませんか。ここは私がしっかりと留守をつとめますので、ご安心くださいませ」
　蛇は口から出かけた「すまない」という言葉をぐっと飲み込んだ。そして、そのかわりに、
「ずっと考えていたんだ」
　目を伏せた。
「世界が滅びた日に、僕は目覚める。その時、僕は、世界の死と己の孤独に身を引き裂かれながら、きっと泣くんだと。そして、泣き続けて、いつしか独りで死んでいくんだと」
　その言葉に、サリマンはうなだれた。
「でも、今は違う」
　と、蛇は言って、少し悲しそうな表情をした。
「僕は馬鹿じゃない。あの少女の望みが叶うことは決してないだろう。それでも思うんだ。世界が滅び、僕が目覚めた暁には、少女と歩いた道程を巡る旅に出ようと。かりそめの旅なんかじゃない。本物の世界を、僕自身の足で、旅しようと思うんだ。だから、僕はもうその日を迎えるのが怖くない」
　と、大人しく蛇の話を聞いていたサリマンが大声で笑いはじめた。
「何故、笑う？」
　さすがにムッとして、蛇が不快気に言った。
「これが笑わずにいられますか」
　言いながらもサリマンはなおも腹を抱えて笑い続け、ひとしきり笑い終えたあと、苦し気に、目の縁に溜まった涙を指の腹で拭った。
「クツァル様ともあろう方が随分と弱気なことを！　何故、世界を救えると信じていたあの日のように、あの少女を信じようとしないのですか？　現にあの少女は誰よりも深い絶望の中にあったあなた様の心を救ったではありませんか。私は信じております。あの少女なら、きっと世界を救い、またここに帰ってくると」
　蛇はじっと黙り込んだ。
「だから、お礼の言葉など聞きたくもありません。それを聞かせて頂くのは、今ではございま

せん。そのかわり、約束してください。きっと、またお会いできると」
　サリマンを言葉を聞きながら、蛇は薄くまぶたを閉じていた。が、次に目を開けた時には、全てが吹っ切れていた。
「そうだね」
　と、蛇は言う。
「サリマンの言うとおりだ。僕もあの少女を信じるよ」
「ええ、それがよろしゅうございます」
　サリマンは力強くうなづくと、それから押し黙った。蛇もこの瞬間を名残惜しむように、何も言葉を発そうとはしない。
　時が止まったかのような、長い長い沈黙。
　その沈黙の後、サリマンはゆっくりと口を開いた。
「ならば、その約束は決して忘れないでください」
　それから、サリマンは穏やかに微笑った。
「もう……あなた様だけの夢ではないのですから――」